

## 目次

里山環境の再生モデルとしてのストローベイル・ハウスの可能性

〔仰木八王寺山農業小屋（交流施設）の自力建設を通して〕…………… 3

大岩 剛一・大原 歩

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 前編…………… 25

永江 弘之

仰木の民俗誌・牛と人の関係

〔「仰木ふるさと五感体験アンケート」より考察する〕…………… 73

大原 歩

近江の水をめぐる……………83

石川 亮

安土城書院の狩野永徳筆「三上山図」……………103

小寺 善通

古式祭礼に見るコミュニティとそこに展開するコミュニケーション  
（大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心に）……………111

加藤 賢治

里山環境の再生モデルとしてのストロベリー・ハウスの可能性  
（仰木八王寺山農業小屋（交流施設）の自力建設を通して）

大岩 剛一・大原 歩

## 里山環境の再生モデルとしてのストローベイル・ハウスの可能性

〓 仰木八王寺山農業小屋（交流施設）の自力建設を通して〓

大岩剛一・大原 歩

はじめに（研究の概要と目的）（担当：大岩）

成安造形大学附属近江学研究所における近江学研究「里山と水と暮らし」が始まったのは二〇一〇年度である。本研究は、その第一期「水系からみる集落の空間構成・景観要素に関する研究と聞き取り調査―大津市仰木地区―」の成果を受け、第三期「仰木八王寺山〓地域交流拠点〓自力建設プロジェクトに関する研究」として二〇一二―一三年度にかけて実施したものである。

近年、仰木地区（註）では一部地域住民による棚田ボランティアの受け入れや棚田オーナー制度等の保全活動が進み、近郊都市からの参加が増加している。また、大学と連携した研究活動や里山保全活動、地場産野菜の販売による地域への発信の試みも始まっており、地元での活動を広げ、新たなコミュニティを創造するための体制づくりが急務となっている。本研究はこれを受け、上仰木地区の「八王寺組」（第一章―参照）が進めている地域活性化活動「仰木自然文化庭園構想」の一環としての小屋（拠点）づくりに協力するかたちで行った。

研究の内容は「地域の素材研究、及びその成果を生かした建

Title :

The Potential of Straw-Bale Houses as a Model in the Regeneration of the Environment of "Satoyama"

Summary :

Here I will report on my work in the rural community of Kamiogi in Otsu City, Shiga Prefecture. The theme of my work is the connecting of people, nature and region through the construction of straw-bale houses by the residents themselves.

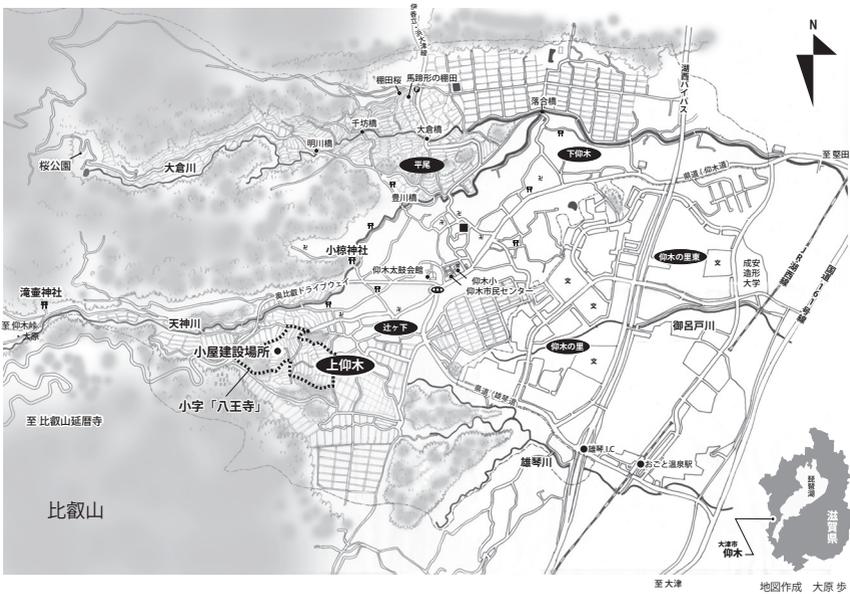


図1：建設地と仰木全体地図（大原作図）

築・景観計画の提案と建設の監修」、そして八王寺組が主体となって進める「自力建設の報告とその成果」である。これは近江学研究第一期、二期の研究成果である「暮らしとコミュニティのかたち」の具現化であり、大学（本研究所と学生）と地域住民が一体となって行う、地域に根ざした新たなコミュニティ創出のための実践的な研究活動である。同時に、私が一九九九年来研究を続けているストロー・ハウス (straw-dale house) が、温熱環境のみならず、人と自然と地域をつなぐ里山再生の建築モデルとして有効であるかを問う研究でもある。また本研究は、二〇一二年度に担当した本学学生対象の半期ごとの授業、「プロジェクト特別実習A3」（前期）および「プロジェクト特別実習A4」（後期）として行い、二〇一三年度は永江弘之准教授担当の同実習に特別講師として協力した。

〔註1〕 大津市北部、比叡山から琵琶湖の西岸へと伸びる雄大な山麓の中間に位置する仰木は、階段状の棚田が取り巻く、世帯数八〇一戸、人口二、三三五人（平成二五年四月一日現在）の、上仰木、平尾、辻ヶ下、下仰木の四つの字から成る大きな農村集落である。仰木の集落形成の歴史は約二二〇〇年前に遡ると言われ、大津と北陸を結ぶ近江路（国道161号線）から西へ分岐し、若狭街道、いわゆる鯖街道へと抜ける間道「仰木道」の途中に発達した。東塔、西塔と並ぶ比叡山三塔のひとつ、横川への登り口に当たる

## 第一章 上仰木地区における里山再生の試み

### 1-1 仰木の里山と八王寺組（担当：大原）

仰木地区を構成する四つの字の中で、比叡山に最も近く標高が高い位置にある上仰木。二〇〇二年から八年かけて棚田の約七割がほ場整備されたが、急峻な山間地にある一部の棚田は対象外とされたため一部残されている。今回の研究対象である八王寺山周辺も昔ながらの棚田が残された地区である〔註2〕。

「仰木自然文化庭園構想八王寺組（以下八王寺組／会長：上坂雅彦）」は、農業組合員と農業組合員が集まり、荒れた耕地に公園や果樹園をつくるなど自分たちが思い描く田んぼのあり方を話し合ったことがきっかけで構想が練られた。さらに、その提案を受けた上仰木・辻ヶ下地区が地域ぐるみで農村活性化委員会を組織、二〇〇七年二月に発足し、活動の中心地である字名から「八王寺組」と名付けられた。構成員は三五名。中心メンバーは四〇～五〇歳代で、農業従事者としては若手に当たる〔註3〕。

当初は地域の魅力を再発見するためのハイキングなどに取り組んでいたが、滋賀県が取り組む棚田保全ネットワーク推進事業の一つである「棚田ボランティア」の受入れ（平成二十一年度～）と「棚田オーナー制度」を軸に活動を開始（平成二十二年～）した。生産の場であると同時に生活の場としての棚田を取り戻す活動として、都市住民の協力を得た持続的な棚田保全活

動のあり方を模索し始めている。

〔註2〕上仰木土地改良区による基盤整備促進事業（ほ場整備）／二〇〇二年に認可を受けてほ場の整備事業を開始し、二〇一〇年に竣工した。整備実施面積は四五・七ha。急峻な傾斜地につくられた棚田は整備からはずされたが、今回の建設地である小字八王寺の一画はその一部に当たる

〔註3〕八王寺組の組織構成：会長一名、副会長二名、事務局（幹事一名、相談役、監事、指導員各二名）、顧問（仰木学区自治連合会長・上仰木自治会長・上仰木農業組合長・辻ヶ下自治会長・辻ヶ下農業組合長）

### 参考文献・資料

- ・ウェブサイト「仰木自然文化庭園構想 八王寺組」<http://kaniog.jp/>
- ・「中山間地稲作経営への模索―仰木自然文化庭園構想八王寺組の活動について」（「近江米情報」第44巻第4号）通巻222号、近江米振興協会発行 [http://www.ohminai.jp/news/koho\\_file/222.pdf](http://www.ohminai.jp/news/koho_file/222.pdf)

1-1-1 ストローベイル・ハウスと八王寺組（担当：大原）  
ストローベイル (straw-bale) とは直方体に圧縮した藁のブロックのことである。このブロックを積んで壁をつくり、土を

塗った建築がストローベイル・ハウス (straw-bale house) で、十九世紀後半に森林の少ない北米の牧草地帯に移住した入植者が、不足する材木の代わりに最も身近な素材である麦藁や干草をブロックにして家を建てたのが始まりである。およそ二五年ほど前からその価値が見直され、今や環境に負荷をかけない持続可能な建築(二二二三参照)の代表格として、北米、オーストラリアを始め、アジア、ロシアからヨーロッパに至る世界各地に広がっている。私は一九九九年よりストローベイル・ハウスの研究を始め、国内での普及をめざして全国各地で講演活動や建設に向けた一般参加型ワークショップを実施してきた。

地元での活動を広げ、新たなコミュニティを創造するための体制づくりを進める八王寺組にとって、交流拠点の建設は大きな目標の一つであったが、二〇〇七年、発足直後の八王寺組からストローベイル・ハウスに関する講演依頼がきた。同年十一月に上仰木自治会館で行った「八王寺山を考えよう」藁の家で「まち興し」(「上仰木農業組合おはなし会」仰木自然文化庭園構想八王寺組主催)と題する講演会をきっかけに、二〇一二年の着工と自力建設に向けた準備がスタートしたのである。建設用地も決まり、八王寺組との具体的な打合せと現地調査が始まったのは二〇一二年三月である。同年四月から小屋の計画案作成に取りかかった。



バイラー (圧縮梱包機) 付きトラクターで広いほ場を走ってストローベイルを作る



稲藁のストローベイル



ストローベイル・カフェ (大岩設計、2001、東京)



ストローベイル・ハウス (大岩設計、2004、山梨)

## 第二章 施設概要（担当：大岩）

### 二・一 建設地と建物の配置

建設地は、元三天師の石造道標がある京都大原に至る仰木道よぎみちと横川よこがわへの登り口との分岐点（註：参照）の南側の、ひととき目立つ小山のような高台に位置している。標高約二四〇メートルの南縁を桜に縁取られた東西に細長い敷地は、八王寺山の森を北に控え、眺望が南に大きく開けている。急峻な崖に接した敷地の南縁からは、眼下に昔ながらの小さな棚田が重なるように広がり、その先に遠く琵琶湖から対岸までを望むことができる。

施設の配置計画は、以前より敷地内にあった公衆便所とご神体のない社、敷地のほぼ中央の一本の山桜の位置を考慮し、雄大なランドスケープと敷地形状を生かした、南に開いた建築として構想した。住所は滋賀県大津市仰木二丁目字八王寺一六二番（地目は田）。地籍一、一七〇平方メートル（水路部分九・九二平方メートル含む）のうち、建物を含む一八六・三平方メートルのエリアを対象に大津市農林水産課に用途変更届を提出、「農業用倉庫」として申請した。認可が下りたのは二〇二二年九月。九月二二日に地鎮祭を行い、十月に着工した。



右手小さな社の手前の山桜と手前の公衆便所との間のスペースが建築予定地



仰木道から八王寺山を望む。円内が建設地



建設地での地鎮祭。中央に八王寺組会長の上坂雅彦氏、後方が棟梁の暉彦氏（雅彦氏父）



敷地の南端からの雄大な眺め。眼下に棚田。遠く琵琶湖を望む

## 二二一 建築の目的と概要

## 二二二 施設の目的

八王寺組は、棚田ボランティアの受け入れや棚田オーナー制度等の保全活動を精力的に推進してきたが、その結果、大津市内を中心に京都、大阪等の都市部からの参加が増加し、里山保全活動を通じた地域交流も盛んになっている。本施設は法的には農業小屋であるが、単に棚田ボランティアのための休憩場所や農具等の収納場所としての機能を越えた、地域交流の拠点としての多様な機能が求められている。

例えば、地域住民のためのお月見会や映画上映会、餅つき、縄縫い教室（注連縄づくり）を始め、草刈ボランティア等に参加する代わりに学生たちに場を提供する貸ギヤラリー、さらには地域住民と都市住民、学生による交流会等の様々な利用が考えられている。すなわち、新たなコミュニティを創りながら地域の活動を活性化させていくための多目的な機能である。棚田の消失に歯止めをかける手立てとして有効であり、同時に今後の農業のあり方を考える上で不可欠な文化的機能であるといえる。

## 二二二 建築概要

建物の構造は在来木造軸組構造平屋建てで、間口五間（九メートル）×奥行二間（三・六メートル）の東西に長い長方形平面をもつ。屋根は眼下に広がる南の眺望を意識し、北から南に下

がる片流れとした。南面には間口五間、奥行四尺ほどの広い庇下の外部空間を設けた。ここは山桜の根元に設けたデッキと共に、さまざまな人のつながりが生まれることを想定した縁のスペースである。

室内は、予測される多様な機能に対応できる広いフリースペースと農機具等を収納するバックヤードが、一続きの三和土で連結している。入って正面の壁は土で仕上げたストローペイルで、上部には北側の森が望める通風用の高窓がある。ストローペイルの壁はその厚み（四七センチ）を利用して二つのニッチを設け、ベンチにした。

建築面積—四三・二〇平方メートル（一一三・一坪）

延床面積—三二・四〇平方メートル（九・八坪）

最高高さ—三・二三メートル

外部仕上—屋根・小波鉄板葺き／軒裏・野地板杉（厚一五）

現し／外壁・焼杉板張り／基礎立ち上がり…コ

ンクリート打放し（※単位ミリメートル）

内部仕上—床…三和土／壁…杉板（厚一五） 張り、一部稲

藁ストローペイル（幅七〇〇×奥行四二〇×高さ

三一〇）をシュロ縄で固定の上、土塗（厚五〇）

／天井…野地板杉（厚一五）現し／間仕切壁…杉

皮葺き（※単位ミリメートル）

開口部—木製建具／高窓…ポリカ（小波、透明）

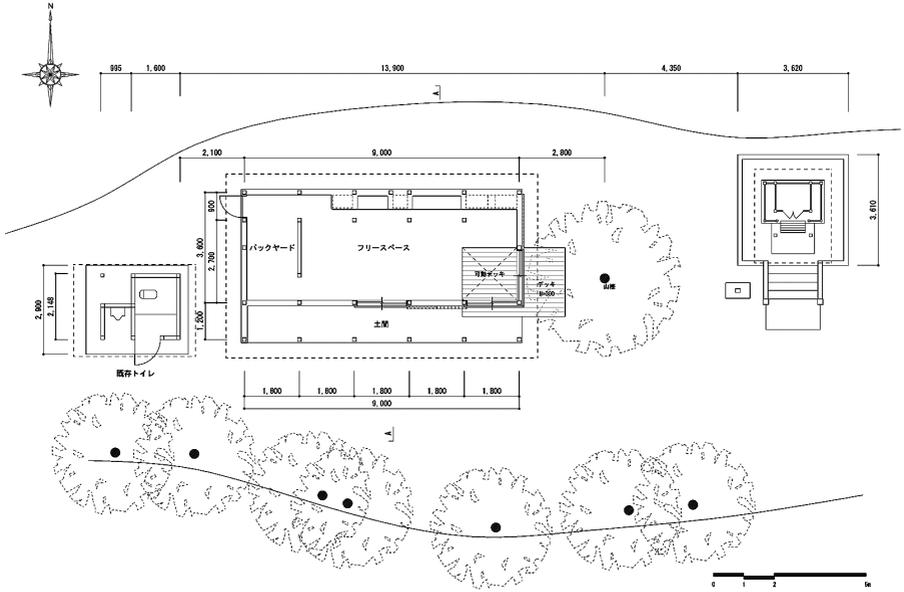


図2：平面配置図



図3：南立面図

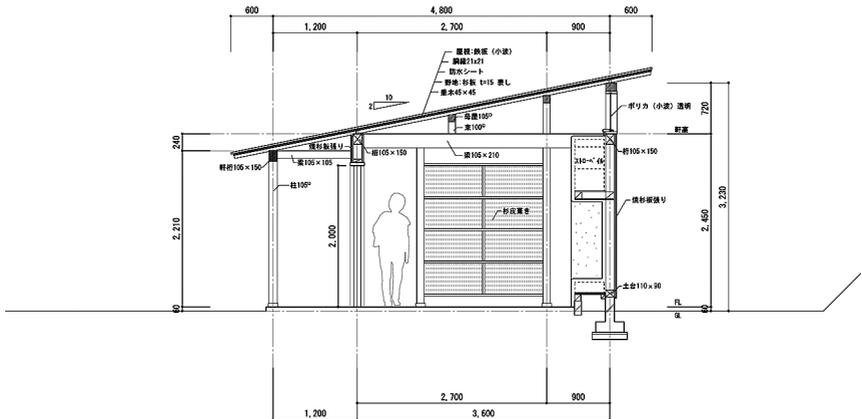


図4：断面詳細図

図2、3、4：水野和子作図

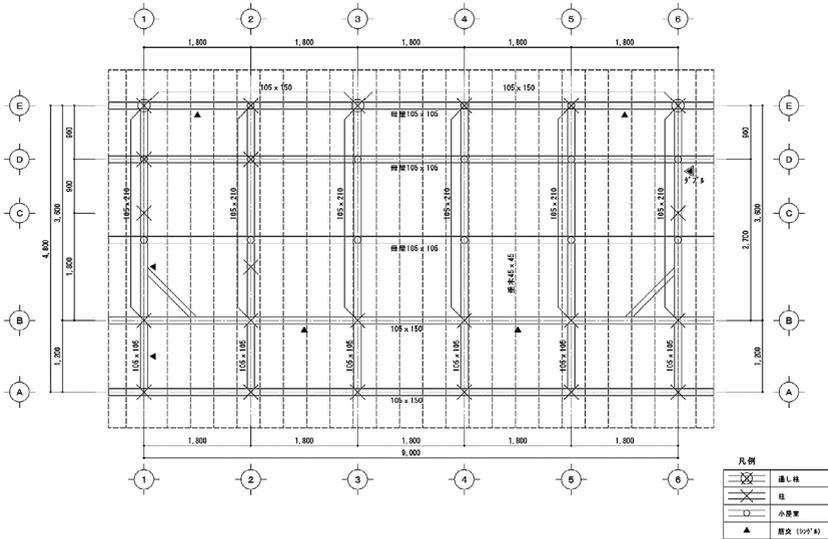


図5：水野和子作図

図5：小屋伏図

2. 省エネルギー建築
 

藁と土でできた厚い壁には高い断熱性と蓄熱性があり、熱効率に優れている。また合板やボード類を使わないこの壁は調湿性にも優れ、壁が湿気調節をする。太陽エネルギーによって室内の温熱環境を調節するのでエアコンへの依存を減らし、木質系燃料（バイオマス）による暖房への道を開く。
  3. 健康によい建築
 

優れた調湿性は室内環境を良好に保つので健康にも良い。有害な化学物質を使わないので身体への負荷が小さい。遮音性も高く、室内は清浄な空気と静けさを保つことができる。
  4. 人と人をつなぐ建築
 

ストローベイル・ハウスは建主が率先してワークショップを企画する。中でも藁積みと土塗りの工程は、大人や子供、地域住民や素人のボランティアが自主的に施工に参加する。
- 二二二三 ストローベイル建築をつくる意義
1. 低エネルギー・環境循環型の建築
 

ストローベイルには、毎年必ず収穫される稲藁や萱、干草など、身近な場所に生育する植物を使用するため、材料の調達から運搬、製造、加工の全過程を通じて多大なエネルギー（化石燃料等）を使わずに建設できる資源効率に優れた素材である。また、藁は古くから日本の生活文化のリサイクル素材の主役として、本来的に廃棄とは無縁の、最後は大地に還る循環型の持続可能な素材である。

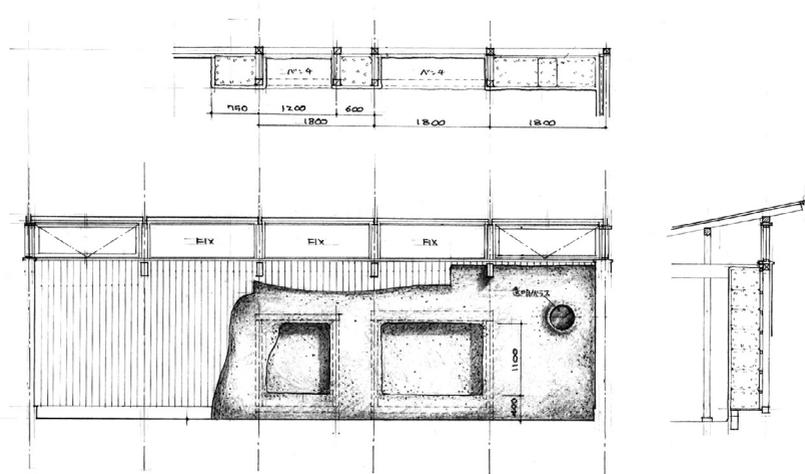


図6：大岩作図

図6：室内展開図（北面）

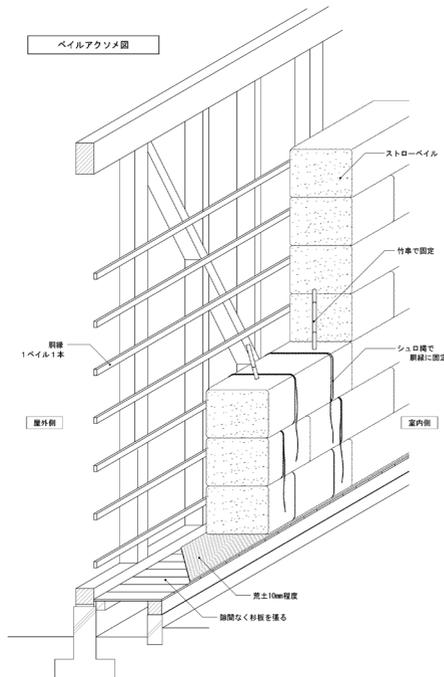


図7：ストローベイル壁のつくり方

図7：水野和子作図

とができる。人と人のつながりを生み、建物への愛着を育み、ものづくりの喜びを知ることができ、地域住民に愛される、地域に根ざした建築を可能にする。

5. 人と地域をつなぐ建築

ストローベイル・ハウスは材木と稲藁を中心に、土、石、竹、ヨシ、萱などの、地域に固有の素材を組み合わせ、地元の人たちのエコロジカルな知恵と伝統的な技術を取り入れてつくる。地域を見つめ直す建築として、地域資源の掘り起こしと地場産業の創出、地域活性化への道を開く。

### 第三章 施設の素材 (担当：大岩)

#### 三一 里山の素材

日本は森林国であるが、相当量の木材が余っているのほとんど使わず、必要な建設用木材の大部分を海外から輸入している。その一方で、間伐もされず、放置されたまま荒廃を余儀なくされている里山の自然環境がある。建築用建材が地域の田んぼや雑木林、竹藪や水辺とのつながりを取り戻すことは、景観も含めた里山環境の再生に欠かせない。本研究では森の間伐材として活用し、伝統技術に精通する地域住民と協力してつくることを重点課題にした。



地域の素材(土、木、藁)できている仰木の旧家

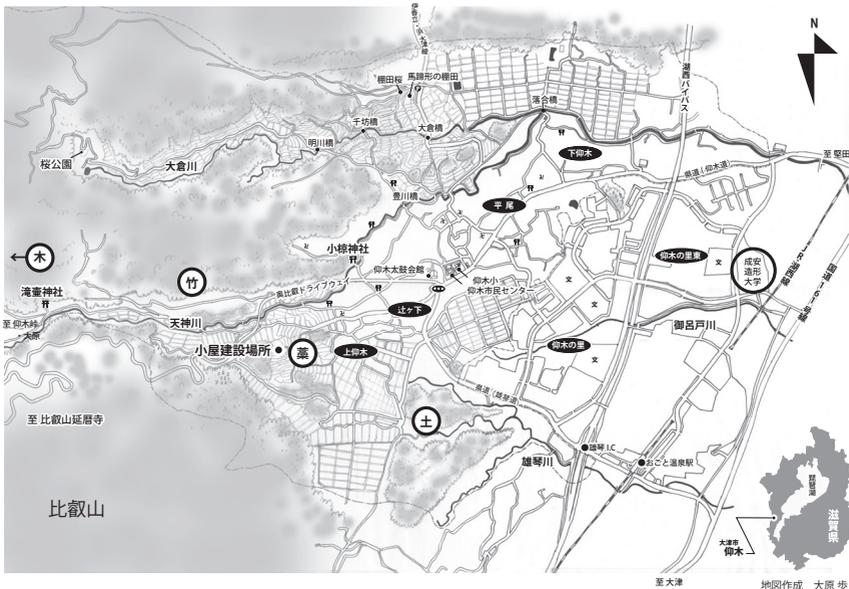


図8：素材採集地 (大原作図)

三二一 素材の採取と加工

三二一 土

採取場所…上仰木小字北谷の休耕田

二〇二二年六月二四日に八王寺組と成安造形大学学生、大岩、大原が共同で荒土をつくった。



土を採取する八王寺組のメンバー



土に藁サを混ぜて荒土作り

三二一 稲藁とストローベイル  
 収穫場所…平尾地区、上坂暉彦氏のほ場

上仰木地区八王寺、棚田オーナーのほ場

二〇二二年九月一日に八王寺組、成安造形大学学生、大岩、大原が共同で稲刈をした。収穫後、同ほ場にて稲架を組み、稲架掛けによる天日乾燥を行った。後日、八王寺組が収穫した稲藁をトラックで愛知県弥富市に運び、ベイラー（干草用圧縮梱



3 / 稲架掛け



1 / 稲刈



4 / 干した藁は乾燥後ストローベイルにする



2 / 稲架作り

包機)を借りてストローベイルを製造した。今回施設に使用したストローベイルは計四三個であった。

三十一三 木

伐採地・「上仰木辻ヶ下生産森林組合」が管理する小字大久保の共有林／伐採者・八王寺組

上仰木と辻ヶ下によって共同運営される「上仰木辻ヶ下生産森林組合」が、山の健全な育成を目的に管理している共有林の杉とヒノキを使用した。土台と柱にはヒノキを、筋遣、間柱、垂木には杉を使用。梁、桁、母屋については予算の都合上やむなく輸入材(米松)を使用した。二〇二二年十二月九日と一五日の両日、棟梁(上坂暉彦氏)と八王寺組会長(上坂雅彦氏)の指導の下、成安造形大学学生、大岩、大原、外部参加者により、構造材の刻み作業(ホゾ穴加工)を行った。二〇二三年一月二七日に建設地への資材搬入作業を合同で行い、上棟を迎えた。



鑿でホゾ穴を掘る棟梁



材木を伐り出した共有林 (円内)



八王寺組会長より鑿の使い方についての指導を受ける



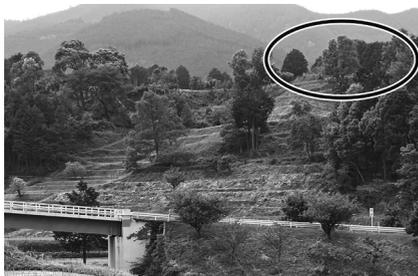
1 / 建設地への道が狭くて大型重機が入らないため、  
人力で資材搬入



2 / 上棟は八王寺組のメンバーで



3 / 無事上棟を終え、全貌を現した農業小屋



竹の伐採地（円内）

三十一四 竹  
伐採地…上仰木地区放棄耕作  
地周辺の竹林 / 伐採者…八王  
寺組

## 第四章 自力建設の概要（担当：大原）

### 四一 自力建設の意義

本研究では、建設現場周辺の自然環境、伝統文化と技術、暮らしのかたちをフィールドワークによって調査し、計画案作成作業を進めてきた。八王寺周辺のフィールドワークから始まり、仰木祭の見学、雄琴川での「生き物観察会（仰木を守る会主催）」への参加、建材の元になる素材の採集作業（第三章三一「参照」）、木材の刻み、上棟、ストローベイル積み・土塗りワークショップを行った。

中でもストローベイル積み・土塗りワークショップは、地元の農業組合の四〇〜五〇代の若い世代や、優れた伝統技術に精通する地域の職人たち、そして地域を超えて、大学、棚田オーナー、棚田ボランティア参加者などに広く声をかけ、連携しつつ行われた。それは、仰木で行われてきた田仕事や屋根葺き、道普請などで近所が協働し、作業も材料も持ちつ持たれつで補い合う「結」の精神を思わせた。八王寺組会長の上坂雅彦氏が参加者への挨拶の中で言われた、「これは現代版の『結』だ」と思う。たくさんの方の気持ちつながる場所にしていきたい」という言葉に、本研究を通して、里山で現在起きている様々な問題に向き合っていくための、求心力のある拠点が生まれたことを感じた。



素材を探して仰木をフィールドワーク



活動の意義を伝える八王寺組会長の上坂氏



仰木の子供たちと一緒に生き物観察会に参加

#### 四二一 ストローベイル積みと土塗りワークショップ

##### 四二一 ワークショップの概要

平成二五年八月十七日(土)、十八日(日)の二日間、小屋の内部にストローベイルの壁をつくるワークショップを行った。主催は八王寺組、共催が成安造形大学。総参加者数は延べ八七名(一日目四七名、二日目四〇名)。成安造形大学からは学生七名、近江学研究所研究員五名、職員二名の計十四名が参加した。ワークショップの指導は、日本ワークショップの指導は、日本大学にて環境建築を研究し、ストローベイル・ハウスのワークショップを数多く手がけるカイル・ホルツヒューター氏〔註4〕に依頼した。



作業方法を解説するカイル氏(△)

〔註4〕アメリカ合衆国ウイスコンシン州生れ。ペンシルベニア州 Slippery Rock University 大学院博士前期課程終了。日本大学大学院生物資源科学研究科博士後期課程終了。現在、日本大学系長浩司研究室研究生。研究テーマは「ストローベイル建築の温湿度環境と壁内湿気対策」。日本各地でストローベイル構法の指導や左官工事に従事

#### 四二二 作業詳細

##### 〈作業工程 一日目〉

一日目の八月十七日(土)は、主に「下地作りとストローベイル積み作業」を行った。午前中は八王寺組と上仰木農業組合、成安造形大学スタッフが午後から行う一般公開ワークショップの準備を進めた。

##### ① 材料準備

- ① 作業材料(ストローベイル・土等)を運び込む。作業環境を整える。
- ② ストローベイルを固定するための竹串をつくる(長さ五五センチ)。



藁スサに使う稲藁を搬入する(●)



先をとがらせて竹串をつくる(▲)

(2) 下地づくり  
 木部に塗る土の付着強度を高めるために、藁縄やシュロ縄を木部に巻きつける。



特製ストロー・ニードルにシュロ縄を通し(上)、ペイルを分割する(下)(△)

④ 壁面デザインに合わせ、特注サイズのカスタム・ペイル(custom bale)をつくる。



押切で藁スサを作る(●)

③ 土壁用の藁スサをつくる。

撮影者

- ：穴風 光恵
- ：今井絵理沙
- △：大原 歩
- ▲：永江 弘之

(3) 土づくり(下塗り用)  
 腐葉土に水と藁スサを混ぜ、下塗り用の土をつくる。下地には藁スサを少なめに混ぜ、粘土質の強い土をつくる。



杉板に藁縄を巻く(△)



下塗り用の荒土と藁スサを足でこねて混ぜる(△)



ニッチ側面の壁下地作り(○)

(4) ストローベイル積み  
竹串と藁縄で木部にベイルを  
固定しながら積んでいく。



4 / ベイル1個当たり2本のシュロ縄を背後の横胴縁に縛り、ベイルを固定する (○)



5 / ベイルを固定したら、竹串を2本ずつ2段分打ち込む (△)



1 / 完成した木造部 (○)



6 / ベイルを積み上げる (△)



2 / 足元の板張りの上に土を薄く塗る。地面からの湿気を藁壁に伝えないため (▲)



7 / 積みあがったベイル (▲)



3 / 土を塗り終えたらベイルを置いていく (○)

(5) 木部の土塗り

中塗り土との接着剤代わりになるように、縄を巻いた木部の上から下塗り用の土を薄く塗りつける。



ニツチ奥の壁を塗る (▲)

〈作業工程 二日目〉

二日目の十八日(日)は主に「土壁の仕上げ作業」を行った。

午前中から、一般公開ワークシヨップとして行った。

(1) 土づくり(中塗り用)

二層目の土をつくる。下塗り土よりも藁スサの量を増やすことで強度を高める。



荒土に藁スサを混ぜる (△)

(2) 中塗り土と壁の成形

① 中塗り用の土を使い、ベイ  
ルとベイルの隙間を埋めて  
壁の形を成形する。



(▲)

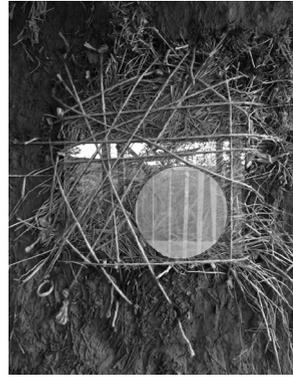
② 土壁のクラックを防ぐため、  
広い面には竹釘を打ち込み、  
シユロ縄を張り巡らす。



(△)

(3) 土壁の表現

① 壁の中のストローベイルを覗くための「真実の窓 (truth window)」を設置する。溝を切った四本の竹釘に硝子を挟んで固定する。



真実の窓 (truth window) の下地づくり (▲)

② 壁面右側にレリーフをつくる。

デザインは学生からのアイデアを採用。「真実の窓」を月に見立て、その下に広がる棚田を有機的な曲線で表現した。イラストレーション領域3年の留学生、ツリアンディカ・アンジャニのデザイン。



ツリアンディカ・アンジャニさんのデザインスケッチ (△)

(4) 仕上げ用中塗り土の土づくり

草刈機で粉碎した藁スサを水分を含んだ柔らかい土に大量に混ぜ、三層目の仕上げ用の土をつくる。



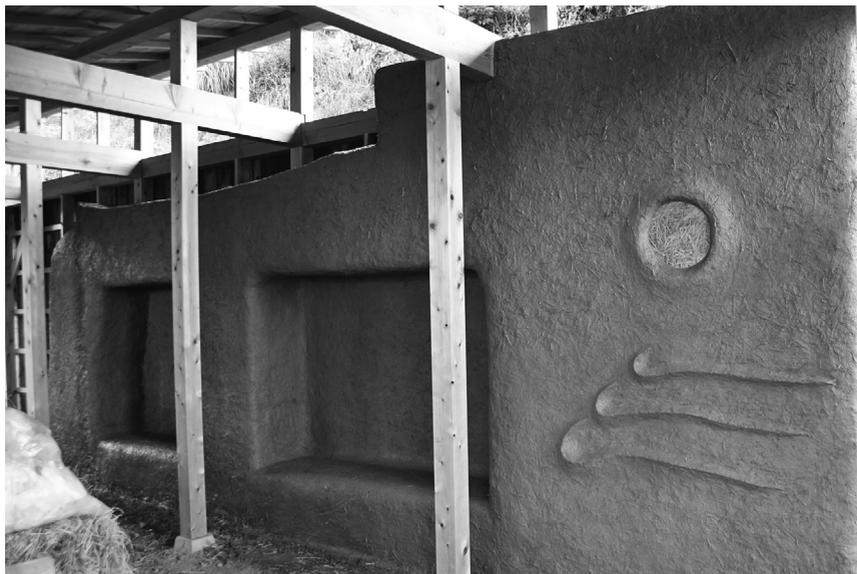
棚田のレリーフを造形するツリアンディカ・アンジャニさん (●)



(●)



(5) 中塗り土による仕上げ  
掌で表面を撫でるように土を塗り重ねていく。光沢がでてくる。



完成した藁と土の壁 (△)

## 終わりに（担当：大岩）

住まいとはもともとその土地の気候風土で育った材料と、地域に蓄積された豊かな知恵と技術によってつくるものであり、かつてはどの地域にも結ゆいと呼ばれる相互扶助組織があつて、家族、親戚、近所の仲間が協力し、裏山から材木や萱を伐り出して家を建てていた。そのため、集落の景観には地域の素材が生み出す統一感があつた。

仰木の里山には、建築（家づくり）が農的世界と分かち難く結びついていた時代の豊かな技術の記憶が、未だ枯れることのない水脈のように生き続けている。主に藁と土と木でつくるストローベイル・ハウスは、そうした地域の記憶の上に、新しい技術や表現を施していくのに最適な建築であるといえよう。

本研究は地域を歩く素材探しから始め、八王寺組の指導の下、学生たちと一緒に荒土を作り、稲を鎌で刈って稲架（はさ）に掛け、彼らが伐り出した材木に鑿（のみ）でホゾを刻んだ。八王寺組や棚田オーナーとの協同作業やワークショップの目的は、単なる技術の習得にあるのではない。里山の自然と地域に対する愛着と理解を、ものづくりを共有しながら深めることにある。ストローベイル・ハウスが人と人をつなぎ、結を再生するツールとして有効なのはこのためである。

環境の再生とは、単に自然環境を再生することだけではない。環境の再生は、文化の再生なくしてありえないのである。人の

つながりの構築と棚田の保全を同時に進める八王寺組の試みが、より広範な人々を巻き込んだコミュニティとなって根づく時（文化の再生）、仰木の里山環境の再生も大きく前進するに違いない。多くの人々の汗と地域の記憶が積み込んだ農業小屋は、そのための拠点なのである。

## 謝辞

本学研究所研究員でもある永江弘之氏には、本研究における学生への指導、研究活動へのサポート、研究の記録撮影等に対するご協力と心強い励ましをいただいた。本学非常勤講師である建築家の水野和子氏には設計図の作成や現場打合せ、学生への指導等の、そしてカイル・ホルツヒューター氏にはワークショップにおけるストローベイル積み・土塗り指導等のご協力を、それぞれ特別講師の立場からいただいた。また、八王寺組上坂雅彦会長と上坂暉彦棟梁はじめ八王寺組の方々には、学生への熱心な指導と研究活動への協力をいただいた。深く感謝の意を表したい。

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 前編

永江 弘之

## 生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 前編

永江 弘之

## 第一章 はじめに

人と自然が共生できる持続可能でエコロジカルな環境として関心が高まっている「里山」。そこには長い年月の中で育まれた、豊かな知恵と、優れた技術に支えられた、人と人、人と自然、人と地域の血の通ったつながりがある。

本研究のフィールド、滋賀県大津市仰木は、西は比叡山系を背に、東は琵琶湖を見下ろす山麓に位置し、上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四つの字からなる大きな農村集落である。集落を階段状の棚田が取り巻き、背後に雑木林や山林が続く里山は、日本の原風景とも呼べる景観を今も残している(図1)。平安期から「仰木庄」として知られ、延長五年(九二七)氏神の小椋神社が『延喜式』の式内社に選ばれており、千年以上の歴史がある集落である。

仰木地域は、固有の豊かな文化資源を脈々と今に伝えている。棚田・里山をはじめ、歴史、伝承、祭り、信仰、交流、生活様式、民俗、風習、道具、自然といったものが融合して、「仰木の暮らし」をかたちづくっている。一方で、圃場整備や開発によって里山の姿は大きく変わりつつあり、高齢化などの現代的

Title :

An Interview-Based Fact-Finding Survey of the Life and Culture of Ogi and the Making of karuta (picture cards for a traditional Japanese game) Featuring the Omi Countryside: Part One

Summary :

The ogi area, Otsu city, Shiga pref. is an agricultural community which is surrounded by rich village mountains and has history more than one thousand years. We surveyed the living culture survives in memories by hearing people from 60s to 90s, and created a set of card game named "Ogi Furusato Karuta" (Ogi country card). In this paper I report the results of the first half of our project, "the survey of living culture by hearings".

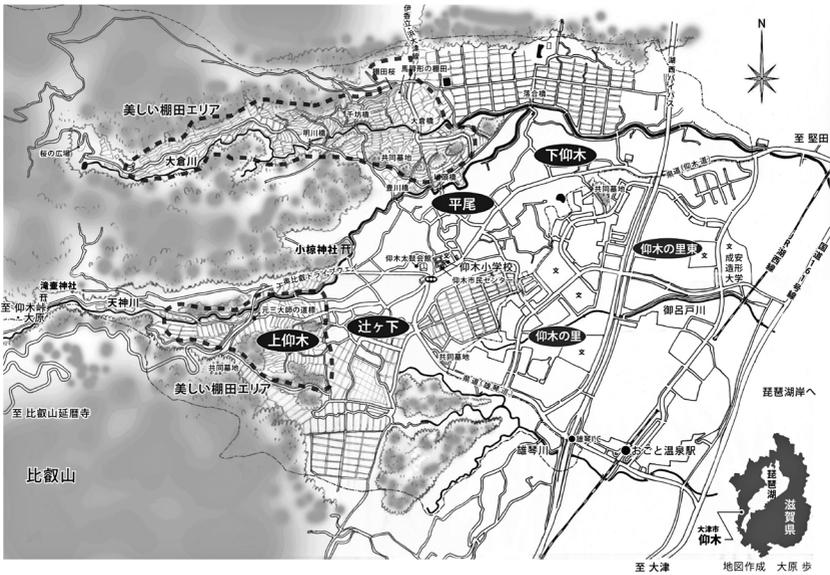


図1：仰木全体地図

滋賀県大津市仰木：大津市北部、比叡山から琵琶湖の西岸へと伸びる雄大な山麓の中間に位置する仰木は、階段状の棚田が取り巻く、世帯数801戸、人口2335人（平成25年4月1日現在）、四つの字（上仰木・辻ヶ下・平尾・下仰木）から成る農村集落。仰木の集落形成の歴史は1150年前に遡ると言われ、大津と北陸を結ぶ西近江路（国道161号線）から西へ分岐し、若狭街道、いわゆる鯖街道へと抜ける間道「仰木道」の途中に発達した。集落には、小椋神社を筆頭とする多数の社寺、無数の地藏や祠、共同墓場が点在し、東塔、西塔と並ぶ比叡山三塔のひとつ、横川への登り口に当たる。



写真2：自然の地形をいかした棚田で農作業



写真1：仰木祭の神輿が小椋神社を出発



写真3：集落や棚田にはたくさんのお地藏様



写真4：仰木の牛。かつてはどこの家でも飼っていたが今は2軒だけ

課題の深刻化とともに仰木も今、急激な変化の中にあることは否めない。

それでも現在の仰木にはなお、圃場整備されていない自然の地形を利用した棚田をはじめとする豊かな里山の自然、古式にそった伝統ある仰木祭（泥田祭）、山林の保全活動として全戸から一名は参加する「山行き」をはじめ暮らしの中に息づく人と人とのつながりである「結」など、かつての日本の里山に息づいていた心惹かれる魅力がたくさん詰まっている。そこには、効率化を優先した現代の都市型社会において失われつつある価値観が生きている。

## 第二章 調査・研究の目的

本研究では、高度経済成長で「物質的豊かさ」と引き替えに切り捨ててきたさまざまな素材や道具、生活思想、自然観などに目を向け、住民聞き取り調査等を通して人々や集落の記憶・思い出の中に息づく「今は見ることのできない情景」「現代に名残をとどめる情景」「暮らし（生活文化）のかたち」を掘り起こし、仰木固有の風土や文化、暮らしの情景を浮き彫りにして記録すること。および、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさを再発見し、未来につないでいくためのツールとして、記録した言葉や情報をデジタル化して、世代や地域を超えて多くの人が共有できる「ふるさとカルタ」を制作することを目的とした。

本研究には、大原歩氏、加藤賢治氏と私の三名の研究員に加え、成安造形大学学生十二名が研究スタッフとして参画し、一貫して活動した。成果物もさることながら、学生たちが地域と深く関わり、聞き取り調査からカルタ制作までをチームとして担うという形の研究手法の確立を重要視し、本研究における教育効果に期待した。

また、思い出の聞き取りをベースとした手法は、近年、高齢者の認知症の予防として取り組みや研究が広がっている「回想法」と密接に関連している。心理療法のみならず、世代間交流や地域活動などの活性化の効果が指摘されており、ご高齢の方

が元気に活動的になられるだけでなく、話をする若者の活力や成長にも大きな効果が見られるとのこと。人生経験豊かなおじいちゃん、おばあちゃんと話すことは、本などからの知識よりずっとリアルで心に響くのもかもしれない。そうした意味でも、「ふるさとカルタ」の取り組みが、「過去と現代と未来をつなげる」「世代をつなげる」「地域をつなげる」「いのちをつなげる」、そうした総合的な地域発展につながっていくかと思う。

なお本研究は、成安造形大学附属近江学研究所で平成二二年度（二〇一〇）から三カ年計画で取り組んだ近江学研究「里山と水と暮らし」の第二期「生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作」として、平成二三年度（二〇一一）、二四年度（二〇一二）に仰木地区で実施した調査・研究活動である。本稿では、その前半部分である「生活文化の聞き取り調査」の成果を報告する。

### 第三章 仰木における生活文化の聞き取り調査

#### （カルタ読み札を決めるための聞き取り調査まで）

#### 三一 概要

平成二三年（二〇一一）四月に学生向けの説明会を実施し、イラストレーションと住環境デザインをそれぞれ学ぶ一年生から三年生の学生が研究に参加することになった。まず、五月三日の仰木祭（泥田祭）の見学や、仰木が主な舞台となっている

NHKスペシャル映像詩里山「覚えていきますかふるさとの風景」（註<sup>1</sup>）の鑑賞などを通して、仰木を知り、仰木を体験し、仰木に親しむことからスタートした。

五月から仰木学区老人クラブ連合会（以下、老人クラブ）にご協力を依頼し打合せを始めたが、「田植えが終わるまでは忙しい」とのこと。聞き取り調査を開始したのは六月だった。老人クラブの方々にご協力をいただいて、仰木の人々の思い出を浮き彫りにする住民聞き取り調査を次のようなステップで進めた。

1. 仰木ふるさと五感体験アンケート<sup>〔註<sup>2</sup>〕</sup>の実施。
2. アンケートの集計。
3. アンケートの記述内容の検証と、仰木ふるさとマングラフの作成。
4. カルタ読み札を決めるための住民聞き取り調査。

#### 三一 仰木ふるさと五感体験アンケート

本研究をひとことで言い表すとすれば、「思い出を形にする」ということなるかと思う。さて「思い出」は人間のどこにしまわれているのだろうか。まず思い浮かぶのは「頭（脳）」であるが、昔のことがありありとよみがえってくるとき、それは心の内から湧き出して、身体の中に満ちるように当時の感覚が再現され追体験するということが往々にしてある。「今でも目に浮かぶ風景」「耳に残る音」「なつかしい匂い」「手足によみ

「忘れられない味」など、思い出や記憶とは単に頭で覚えている出来事ではなく、身体のいろいろなところにしみ込んでいて「体験をした『その時』」を生き生きと再現してくれるもののように思う。五感に残る感覚記憶が思い出に生彩を与える。こうした身体感覚（実感）をベースとした「あふれ出す想い」や「つながらる想い」が、本研究の重要な要素になっていく。

「ふるさと五感体験アンケート」では当時の五感体験、身体感覚を思い出して書き出していただいた。アンケート項目の「記入例」は、老人クラブの役員の方々への先行アンケートより抜粋した。

平成二三年六月に老人クラブの役員会にて、上仰木、辻ケ下、平尾、下仰木の四地区へのアンケート配布を依頼。配布依頼枚数は四〇〇枚。十日間で一八五枚のアンケートを回収。六〇歳代から九〇歳代の方々の思い出が多数集まった。それらは個人の思い出であると同時に、仰木集落の記憶、土地の記憶と呼べるような言葉の数々である。最高齢は九九歳の男性だった。

以下に、ふるさと五感体験アンケートの質問項目と記入例を掲載する。

#### ■ ふるさと五感体験アンケートの質問項目と記入例

年齢 性別 地区（上仰木 辻ケ下 平尾 下仰木）

支障がなければ、ご住所とお名前をお聞かせください。

1. 今も目に浮かぶ、当地のなつかしい風景、景色、建物や

風物がありましたら、いくつでもかまいませんので、思い浮かぶだけご記入ください。

(例)・昔は麦わら葺きの屋根ばっかりやった。瓦屋根はなかった。

2. 耳に残る音、なつかしい音、当地で聞こえた印象深い音がありましたらお答えください。いくつでも結構です。どんな些細な音でもかまいません。

(例)・夜でも水車のゴトンゴトンという音が聞こえとった。  
・冬の夜、わら打ちの音がどの家からも聞こえとった。  
3. なつかしい匂い、当地ならではの、またはその頃ならではの匂いだと思うものを、ご記入ください。  
(例)・家の中に入ったら、どの家でも牛のにおいがした。



写真5：手書きされた仰木ふるさと五感体験アンケート



写真6：仰木ふるさと五感体験アンケートを地区ごとにまとめたファイル

・納豆をつくるのに豆を炊いたにおいがした。  
 4. 今でも手足によみがえる感触、なつかしい手触りや肌触り、また、熱さ冷たさ、暑さや寒さなどの体験がありました。たらくいくつでもお教えください。

(例)・わら草履の冷たい履き心地が気持ちよかった。

5. 思い出の味、忘れられない味や当地ならではの味や食べ物がありましたらいくつでもお教えください。  
 (例)・子どもの時は、おやつ代わりに畑でキュウリやトマトを食べた。

・よその家の干し柿をこそと取って食べた。

6. その他、当地の暮らしのなかで体験について、特に思い出されたことがありますらご記入ください。絵や図で示していただいてもかまいません。

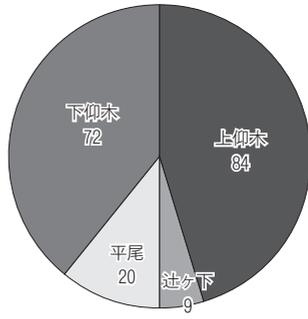
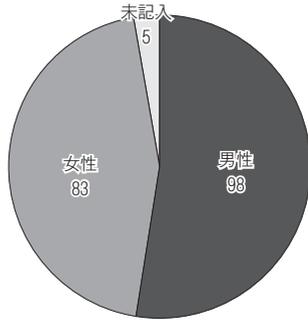
三三三 ふるさと五感体験アンケートの集計

回収したアンケートは一八五枚。細かい字で裏面までびつりと書き込まれたものや、挿絵付きで説明してあるものなど、熱意にあふれたものがたくさんあった。

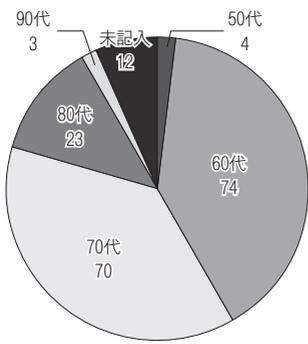
老人クラブの構成メンバーは六〇歳以上なので、五〇代の方はご家族が書かれたのかもしれない。また、地域別以外は合計すると一八六になるが、これは上仰木地区の一枚にご夫婦二名の記名があったため。

アンケートの読み込み、集計の過程で、全てのアンケートの

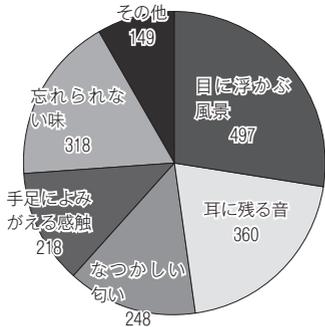
表1 仰木ふるさと五感体験アンケート集計  
 ①男女別  
 ②地域別

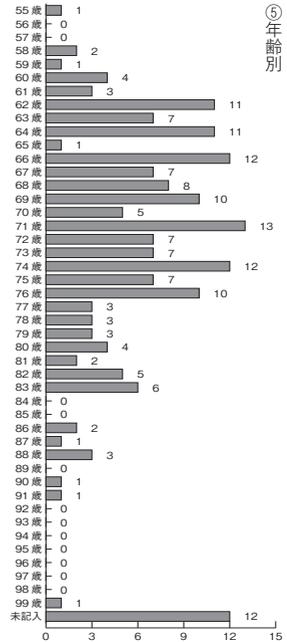


③年代別



④質問別(五感別)の記述項目数





記述内容をテキスト化した。その際、内容（エピソード）によって項目を分けて整理すると、その数は約一、八〇〇項目におよんだ。それぞれの質問別（五感別）の記述項目数は、表1の④を参照いただきたい。

一連の記述をその内容のまとまりでいくつかの別項目に分けることについては、テキスト入力を担当した研究スタッフが判断した。言葉遣いなどは原文のままテキスト化するよう心がけた。しかし、手書き文字が読み取りにくい部分や誤字と思われる箇所は、研究スタッフが解釈して修正を加えた。また、意味が読み取りにくい箇所を、置き換える文言の判断がつかない場合は、そのままの字面を入力した。

これらを、A4サイズ五二ページの仮の冊子にまとめた。

### 三十四 アンケート記述内容の検証と、仰木ふるさとマンダラ

「仰木ふるさとマンダラ」とは、「ふるさと五感体験アンケート

ト」に書かれたさまざまなコメント（五感の思い出）から共通のキーワードを読み取って分類しグループ化したもので、仰木の生活文化を概観することができる言葉の地図のようなものを作成するアプローチである。「仰木ふるさとマンダラ」を作成することで、個人個人の記憶の断片から仰木共通の要素と関係性が図解として読み取れるようになる。その結果、仰木集落の記憶、土地の記憶と呼べるような「仰木の生活文化の構造」が見えてくる。

「ふるさとマンダラ」づくりの第一段階は、約一、八〇〇項目のコメントを生活文化に即した普遍性のあるカテゴリー（同じような性質のものが含まれる範囲）に分類すること。コメントを印刷した約一、八〇〇の細い短冊をつくり、一枚一枚読んで、以下の十二のカテゴリーに分類していった。

#### ■カテゴリー

1. 衣
2. 食
3. 住
4. 冠婚葬祭
5. 結・村組織・コミュニティ
6. 遊び
7. 学校生活
8. 生き物
9. 風景
10. 田畑仕事
11. 山仕事
12. その他

いずれのカテゴリーに分類するかは研究スタッフの判断によるが、実際には複数のカテゴリーの要素を含む項目も多数あり、いずれかに振り分けている。

表2 カテゴリー別の項目数

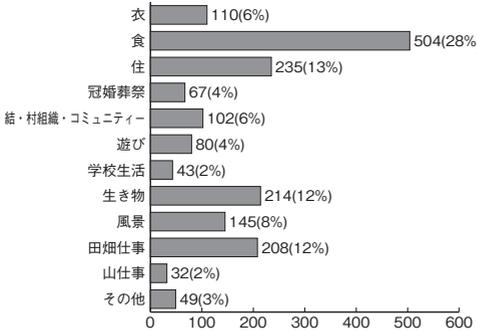


表3 カテゴリー「生き物」のキーワードと項目数

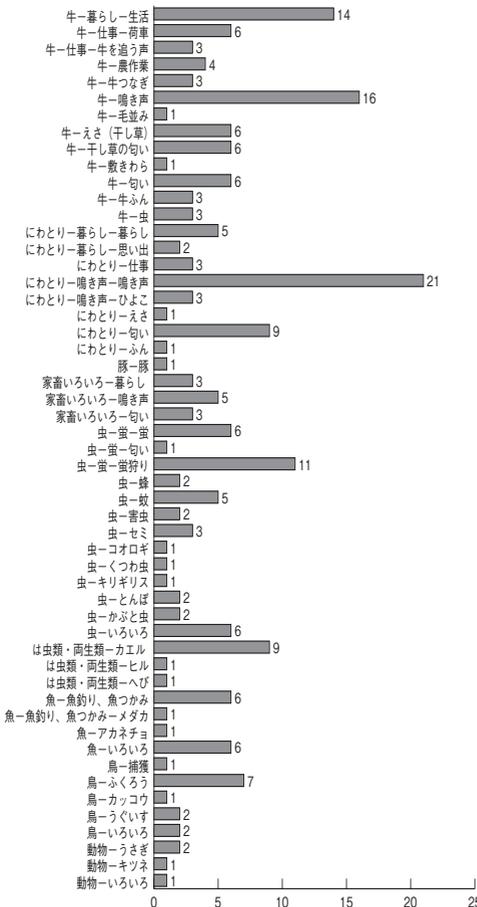


表2「カテゴリー別の項目数」のように約一、八〇〇項目のコメントが分類された。「食」が際立って多く、「住」「生き物」「田畑仕事」「風景」「衣」「結・村組織・コミュニティ」という順になっている。

第二段階は、各カテゴリーに分類した項目それぞれのコメント内容から共通のキーワードを探って、グループ化していく作業。例えば「玄関入ったらモーと牛があいさつをする。(七四歳・下仰木・女性)」というコメントから「牛」「鳴き声」といったキーワードを読み取り、その共通のキーワードを含むコメント項目をグループ化して模造紙に貼り付けていく作業である。そ

うしてできた集合を囲んでキーワードを書き込み整理していくと、カテゴリーごとに模造紙サイズの「仰木ふるさとマンガラ」のベースができあがってくる。「食」などは模造紙一枚に収まらず、五枚に渡った。

こうして図解として整理していくと、「仰木の暮らしの中」に多くの物象や事象が共通の思い出として深くつながっているか」が見えてくる。

読み取ったキーワードの例として、カテゴリー「生き物」のキーワードとその項目数のグラフを以下に示す。(表3)

表4 五感体験アンケートからのキーワード一覧

| カテゴリ：衣 |        |             |     |
|--------|--------|-------------|-----|
| キーワード1 | キーワード2 | キーワード3      | 項目数 |
| 手織り    |        | 綿           | 1   |
| 手織り    |        | 綿づくり        | 2   |
| 手織り    |        | 綿くり         | 6   |
| 手織り    |        | 綿打ち         | 1   |
| 手織り    |        | 糸くり         | 2   |
| 手織り    |        | 機織り         | 12  |
| 手織り    |        | 綿入れ、ドンサ、デンチ | 10  |
| 手織り    |        | 麻           | 3   |
| 履き物    |        | わら草履        | 14  |
| 履き物    |        | 竹の皮草履       | 9   |
| 履き物    |        | 草履いろいろ      | 9   |
| 履き物    |        | 下駄          | 6   |
| 履き物    |        | たび          | 3   |
| 履き物    |        | 下駄・たび       | 2   |
| 履き物    |        | ゴム靴         | 3   |
| 履き物    |        | なめし靴        | 1   |
| 履き物    |        | 靴いろいろ       | 3   |
| 洗濯     |        | 洗濯のり        | 4   |
| 洗濯     |        | 洗濯          | 4   |
|        |        | わら          | 6   |
|        |        | 手袋          | 1   |
|        |        | 帽子          | 1   |
|        |        | 繻み物         | 1   |
|        |        | 堅田の呉服屋      | 1   |
|        |        | 出張販売        | 1   |
|        |        | 農作業の着物      | 1   |
|        |        | 着物について      | 3   |

| カテゴリ：食 |        |          |     |
|--------|--------|----------|-----|
| キーワード1 | キーワード2 | キーワード3   | 項目数 |
| 米      |        | ぬかがま     | 2   |
| 米      |        | ボン菓子     | 1   |
| 米      |        | 赤飯       | 2   |
| 米      |        | おくどさんとお米 | 13  |
| 米      |        | 残り飯の食べ方  | 6   |
| 米      |        | ほうしん     | 3   |
| 米      |        | お供えもの    | 1   |
| 米      |        | おこわ      | 1   |
| 米      |        | ハチの子ごはん  | 3   |
| 米      |        | カレーライス   | 1   |
| 米      |        | すしめし     | 1   |
| 米      |        | 耐ずし      | 7   |
| 米      |        | サバずし     | 1   |
| 麦      |        | ガム       | 4   |
| 麦      |        | もし       | 8   |
| 麦      |        | むしパン     | 2   |
| 麦      |        | アメ       | 2   |
| 麦      |        | ドーナツ     | 3   |
| 麦      |        | うどん      | 3   |
| 麦      |        | はったい粉    | 5   |
| 麦      |        | 粉くい菓     | 3   |
| 芋      |        | 山芋       | 1   |
| 芋      |        | じゃが芋     | 2   |
| 芋      |        | 芋あめ      | 1   |
| 芋      |        | 里芋       | 1   |
| 芋      |        | さつま芋     | 4   |
| 芋      |        | さつま芋 干す  | 2   |
| 芋      |        | さつま芋 生で  | 3   |
| 芋      |        | さつま芋 葉   | 1   |

表4「五感体験アンケートからのキーワード一覧」をご参照いただきたい。前述の「生き物」と同様に、カテゴリ別のキーワードとそのキーワードに含まれるコメント項目数の一覧である。このキーワードの種類とそれに含まれるコメント項目数が、仰木の生活文化の太い幹と大きく広がる枝葉のようなものを象徴しているように思える。

例えば「牛」に注目してみよう。仰木の田んぼの土は粘りが強く、力の強い牛は農作業に欠かせぬ存在だった。かつては全ての家で牛を飼っていて、同じ屋根の下で土間を挟んで厩があり家族のように暮らしていたという。「生き物」のカテゴリで「牛」のキーワードには七十二項目分類されている。「住」や「田

畑仕事」などのカテゴリにも「牛」はたくさん登場し、全項目を「牛」で検索すると一三〇項目ほどになる。

農業で生計を立ててきた村なので、「米」もしくは「稲」を含む項目は一〇〇項目ほど。「田」を含む項目は一七〇項目ほどある。「麦」も意外と多く約六〇項目。食べ物としてだけではなく「昔は麦わら葺き屋根ばかりだった」という記述がたくさん見られる。重複するが、「わら(ワラ、藁)」は約一三〇項目。「わら草履」「ムシロを織るためのわら打ち」「牛のえさ」などの記述が見られる。「水」を含む項目は一六〇項目ほど、「水車」や「行水」など幅広い。「火」は約六〇項目。「柿」は一〇項目。かつて仰木の柿は有名で各家庭で干し柿をつくって出荷し

|        |      |           |    |
|--------|------|-----------|----|
| とって食べた | 家の周り | 家の周りでいろいろ | 14 |
| とって食べた | 家の周り | カボチャ      | 1  |
| とって食べた | 家の周り | 青梅        | 4  |
| とって食べた | 家の周り | サクランボ     | 1  |
| とって食べた | 家の周り | びわ        | 5  |
| とって食べた | 家の周り | ナシメ       | 1  |
| とって食べた | 家の周り | 栗         | 1  |
| とって食べた | 家の周り | につき       | 2  |
| おやつ    |      | おやつ いろいろ  | 11 |
| おやつ    |      | 丁稚ようかん    | 1  |
| おやつ    |      | 寒天        | 1  |
| おやつ    |      | 梅チョコ      | 1  |
| おやつ    |      | アイスキャンディー | 14 |
| おやつ    |      | 思い出       | 2  |
| 漬け物    |      | 漬け物のにおい   | 4  |
| 漬け物    |      | ぬか漬け      | 5  |
| 漬け物    |      | 浅漬け       | 1  |
| 漬け物    |      | あたか菜      | 1  |
| 漬け物    |      | 柴漬け       | 1  |
| 漬け物    |      | 梅干し       | 1  |
| 漬け物    |      | 四季いろいろ    | 2  |
| にわとり   |      | にわとり      | 1  |
| にわとり   |      | 卵油        | 1  |
| 飲み物    |      | ニッキ水      | 1  |
| 飲み物    |      | サラリン?     | 1  |
| お茶     |      | お茶        | 3  |
| お茶     |      | お茶の葉      | 1  |
| お茶     |      | 茶摘み       | 3  |
| お茶     |      | お茶 蒸す     | 1  |
| お茶     |      | お茶 もみ     | 1  |
| お茶     |      | お茶 煎じる    | 3  |
| お茶     |      | お茶 沸かす    | 1  |
| 水と水    |      | 井戸水       | 2  |
| 水と水    |      | つらら       | 2  |
| 酒      |      | 酒造り       | 1  |
| 酒      |      | 甘酒        | 4  |
| 酒      |      | カス汁       | 1  |
| いろいろ   |      | 薬草採取      | 2  |
| いろいろ   |      | ゴマ        | 1  |
| いろいろ   |      | どうもろこし    | 3  |
| いろいろ   |      | ネギ        | 1  |
| いろいろ   |      | 大根        | 1  |
|        |      | 朝食        | 1  |
|        |      | 昼食        | 2  |
|        |      | お弁当       | 1  |
|        |      | みそたま      | 1  |
|        |      | 食の思い出     | 3  |
|        |      | 牛になる      | 1  |

| カテゴリ： 住 |        |            |     |
|---------|--------|------------|-----|
| キーワード1  | キーワード2 | キーワード3     | 項目数 |
| 水       |        | 井戸         | 15  |
| 水       |        | 井戸とつるべ     | 19  |
| 水       |        | 風呂         | 9   |
| 水       |        | 行水         | 10  |
| 水       |        | 水車         | 12  |
| 水       |        | 洗い物(洗濯、野菜) | 6   |
| 火       |        | おくどさん      | 21  |
| 火       |        | かまど        | 5   |
| 火       |        | 焚き火・煙      | 14  |
| 火       |        | いろいろ       | 2   |
| 火       |        | 火鉢         | 2   |
| 火       |        | こたつ        | 7   |

|        |    |             |    |
|--------|----|-------------|----|
| 芋      |    | さつま芋 蒸す     | 3  |
| 芋      |    | さつま芋 焼く     | 9  |
| 豆      |    | 味噌豆         | 3  |
| 豆      |    | 味噌汁         | 2  |
| 豆      |    | 味噌づくり       | 3  |
| 豆      |    | 醤油          | 3  |
| 豆      |    | 味噌・納豆・醤油    | 6  |
| 豆      |    | 豆料理(煮物)     | 3  |
| 豆      |    | そら豆         | 10 |
| 豆      |    | 豆だんご(エンドウ豆) | 6  |
| 豆      |    | 田植えで食べる豆だんご | 10 |
| 豆      |    | 炒り豆         | 2  |
| 豆      |    | 豆を粉にする      | 5  |
| 豆      |    | きな粉         | 3  |
| 豆      |    | 納豆          | 12 |
| 豆      |    | 豆いろいろ       | 3  |
| 餅      |    | 餅つき         | 10 |
| 餅      |    | かき餅         | 19 |
| 餅      |    | かき餅の思い出     | 6  |
| 餅      |    | よもぎ餅        | 1  |
| 餅      |    | 小米餅         | 2  |
| 餅      |    | 納豆餅         | 13 |
| 餅      |    | 納豆餅の歌       | 2  |
| 餅      |    | 餅いろいろ       | 2  |
| 餅      |    | おはぎ         | 1  |
| 柿      |    | 干し柿(つるし柿)   | 25 |
| 柿      |    | 干し柿 出荷      | 7  |
| 柿      |    | 半熟          | 1  |
| 柿      |    | 柿こね         | 10 |
| 柿      |    | 渋柿の皮        | 11 |
| 柿      |    | 冬柿          | 2  |
| 柿      |    | さわし         | 2  |
| 柿      |    | ずくし(熟し)     | 14 |
| 柿      |    | 甘柿          | 4  |
| 魚介類    |    | うなぎ・なまず     | 1  |
| 魚介類    |    | 川魚          | 3  |
| 魚介類    |    | しじみ         | 1  |
| 魚介類    |    | 塩こぶ         | 1  |
| 魚介類    |    | 魚肉ソーセージ     | 1  |
| 魚介類    |    | とろろこんぶ      | 1  |
| 魚介類    |    | 堅田の魚        | 1  |
| 魚介類    |    | 焼き魚         | 3  |
| 魚介類    |    | スルメ         | 1  |
| とって食べた | 田畑 | 野菜などいろいろ    | 11 |
| とって食べた | 田畑 | なす          | 2  |
| とって食べた | 田畑 | うり          | 1  |
| とって食べた | 田畑 | いちじく        | 1  |
| とって食べた | 田畑 | スイカ         | 7  |
| とって食べた | 田畑 | とって食べても     | 1  |
| とって食べた | 野山 | 野山でいろいろ     | 12 |
| とって食べた | 野山 | 松茸          | 3  |
| とって食べた | 野山 | 椎の実         | 3  |
| とって食べた | 野山 | テンボナシ       | 1  |
| とって食べた | 野山 | セリ          | 1  |
| とって食べた | 野山 | 野いちご、木いちご   | 6  |
| とって食べた | 野山 | ユスランベ       | 1  |
| とって食べた | 野山 | イタドリ        | 8  |
| とって食べた | 野山 | あけび         | 3  |
| とって食べた | 野山 | ゆり根         | 1  |
| とって食べた | 野山 | すもも         | 2  |
| とって食べた | 野山 | ナツハゼ        | 3  |
| とって食べた | 野山 | 山ぐり         | 3  |
| とって食べた | 野山 | 山菜          | 1  |

|        |  |         |   |
|--------|--|---------|---|
| 近所付き合い |  | 夜遊び     | 1 |
| 近所付き合い |  | もらい風呂   | 4 |
| 催し     |  | 仰木小唄    | 1 |
| 催し     |  | 青年会     | 4 |
| 催し     |  | 江州音頭    | 1 |
| 催し     |  | 敬老会・婦人会 | 1 |
| 催し     |  | 吹奏バンド   | 1 |
| 催し     |  | 相撲      | 3 |
| 催し     |  | 牛の品評会   | 1 |
| 催し     |  | 芝居見学    | 1 |
|        |  | 鐘の音     | 6 |
|        |  | 交流、物々交換 | 1 |
|        |  | 建設      | 1 |
|        |  | 女中奉公    | 1 |
|        |  | その他     | 4 |

| カテゴリ：遊び |        |           |     |
|---------|--------|-----------|-----|
| キーワード1  | キーワード2 | キーワード3    | 項目数 |
| 自然の中    | 夏      | 釣り・網      | 3   |
| 自然の中    | 夏      | 魚つかみ      | 8   |
| 自然の中    | 夏      | 水泳と食べ物    | 2   |
| 自然の中    | 夏      | 水泳        | 8   |
| 自然の中    | 夏      | 水遊び       | 11  |
| 自然の中    | 夏      | セミとり      | 1   |
| 自然の中    | 夏      | 虫とり       | 1   |
| 自然の中    | 冬      | 氷遊び       | 2   |
| 自然の中    | 冬      | 竹スキー      | 6   |
| 自然の中    | 冬      | 竹スキー・ソリ   | 1   |
| 自然の中    | 冬      | ソリ        | 2   |
| 自然の中    | 冬      | つらら       | 1   |
| 自然の中    |        | 思い出       | 3   |
| 自然の中    |        | 相撲        | 3   |
| 自然の中    |        | 野球        | 2   |
| 自然の中    |        | たこあげ      | 2   |
| 自然の中    |        | みんなで遊ぶ    | 4   |
| 自然の中    |        | お祭りごっこ    | 1   |
| 自然の中    |        | 柴刈り、竹の皮拾い | 1   |
| 自然の中    |        | れんげ畑      | 1   |
| 自然の中    |        | ブランコ      | 1   |
|         | 夏      | 蚊帳        | 1   |
|         | 夏      | 床几（しょうぎ）  | 1   |
|         | 夏      | 映画        | 1   |
|         | 冬      | 火遊び       | 1   |
|         |        | お正月の夜遊び   | 1   |
|         |        | 家の中の遊び    | 2   |
|         |        | メンコ       | 1   |
|         |        | 紙風船       | 1   |
|         |        | 思い出       | 1   |
|         |        | その他       | 6   |

| カテゴリ：学校生活 |        |           |     |
|-----------|--------|-----------|-----|
| キーワード1    | キーワード2 | キーワード3    | 項目数 |
|           |        | 校舎        | 4   |
|           |        | 通学        | 7   |
|           |        | 授業風景      | 3   |
|           |        | チャイム（鐘）   | 2   |
|           |        | 宿直室       | 3   |
|           |        | お弁当、ごはん   | 7   |
|           |        | 宿題        | 1   |
|           |        | 夏休み（葉草とり） | 4   |
| 行事        |        | 運動会       | 4   |
| 行事        |        | 音楽会       | 1   |
| 行事        |        | 遠足        | 1   |

|   |  |               |    |
|---|--|---------------|----|
| 火 |  | 豆たんあんか        | 2  |
| 火 |  | 薪             | 2  |
| 火 |  | ひたきぎ          | 1  |
|   |  | 屋根（麦わら葺き）     | 19 |
|   |  | 屋根 台風         | 4  |
|   |  | トイレ           | 12 |
|   |  | 牛             | 14 |
|   |  | 縁の下のにわとり      | 1  |
|   |  | 傾斜の立地         | 1  |
|   |  | 暑さ寒さ          | 6  |
|   |  | 電気            | 4  |
|   |  | テレビ、ラジオ       | 4  |
|   |  | 昔はなかった、昔は当たり前 | 8  |
|   |  | 家づくり          | 3  |
|   |  | 土間            | 5  |
|   |  | 蚊帳            | 12 |
|   |  | くすべ           | 7  |
|   |  | 柿渋            | 1  |
|   |  | 地滑り防止         | 1  |
|   |  | 燃料            | 1  |
|   |  | こはい           | 1  |
|   |  | しば小屋          | 1  |

| カテゴリ：冠婚葬祭 |        |          |     |
|-----------|--------|----------|-----|
| キーワード1    | キーワード2 | キーワード3   | 項目数 |
|           |        | 結婚       | 3   |
|           |        | 葬式       | 1   |
|           |        | 結婚と葬式    | 1   |
| 正月        |        | しめ縄作り    | 1   |
| 正月        |        | 餅つき      | 9   |
| 正月        |        | かき餅      | 1   |
| 正月        |        | どんど焼き    | 1   |
| 正月        |        | その他      | 1   |
| 信仰        |        | 仰木祭（泥田祭） | 7   |
| 信仰        |        | 相撲大会     | 3   |
| 信仰        |        | すのう（収納）  | 4   |
| 信仰        |        | 獅子舞、太神楽  | 1   |
| 信仰        |        | 地藏盆      | 5   |
| 信仰        |        | お地藏さまの信仰 | 1   |
| 信仰        |        | 盆踊り      | 9   |
| 信仰        |        | 信心       | 3   |
| 信仰        |        | 湯立祭      | 1   |
| 信仰        |        | ヌシ（青ヘビ）  | 1   |
| 信仰        |        | 元三大師     | 3   |
| 信仰        |        | 餅・ミカンほり  | 2   |
|           |        | 節分       | 1   |
|           |        | 季節行事いろいろ | 4   |
|           |        | その他      | 4   |

| カテゴリ：結・村組織・コミュニティ |        |        |     |
|-------------------|--------|--------|-----|
| キーワード1            | キーワード2 | キーワード3 | 項目数 |
| 協働                | 結      | 結の心    | 5   |
| 協働                | 結      | 屋根葺き   | 6   |
| 協働                | 結      | 農作業    | 8   |
| 協働                |        | 火の用心   | 20  |
| 協働                |        | 墓地     | 1   |
| 協働                |        | 自治制度   | 1   |
| 協働                |        | その他    | 1   |
| 子ども社会             |        | 子ども社会  | 5   |
| 子ども社会             |        | お手伝い   | 16  |
| 子ども社会             |        | 手づくり   | 1   |
| 子ども社会             |        | 昔話     | 1   |
| 近所付き合い            |        | 近所付き合い | 9   |

| カテゴリ： 風景 |        |           |     |
|----------|--------|-----------|-----|
| キーワード1   | キーワード2 | キーワード3    | 項目数 |
| 季節       |        | 夏         | 4   |
| 季節       |        | 麦         | 1   |
| 季節       |        | つるし柿      | 7   |
| 季節       |        | 雨         | 1   |
| 季節       |        | 冬         | 6   |
| 季節       |        | いろいろ      | 3   |
| 季節       |        | 麦わら屋根のつらら | 2   |
| 季節       |        | 水車のつらら    | 3   |
| 季節       |        | つらら       | 4   |
| 季節       |        | 雪などいろいろ   | 1   |
| 田んぼ      |        | もみ干し      | 2   |
| 田んぼ      |        | 麦稲木(夏)    | 3   |
| 田んぼ      |        | 稲木(秋)     | 10  |
| 田んぼ      |        | 野小屋(ユオ)   | 2   |
| 田んぼ      |        | 水田の水入れ    | 1   |
| 田んぼ      |        | 耕す        | 2   |
| 田んぼ      |        | 棚田        | 9   |
| 田んぼ      |        | 柿の木       | 1   |
| 田んぼ      |        | ほ場整備      | 1   |
| 水        |        | 池         | 3   |
| 水        |        | 川         | 5   |
| 水        |        | 天神川       | 2   |
| 水        |        | 水車        | 7   |
| 道・交通     |        | 地道        | 10  |
| 道・交通     |        | 砂利道       | 5   |
| 道・交通     |        | 思い出       | 3   |
| 道・交通     |        | 外灯がない     | 3   |
| 道・交通     |        | 車がない      | 5   |
| 道・交通     |        | バス        | 3   |
| 道・交通     |        | ポンプ車      | 1   |
| わら葺きと台風  |        | わら葺き屋根    | 9   |
| わら葺きと台風  |        | 台風        | 3   |
|          |        | 山あり谷あり    | 1   |
|          |        | 比叡山       | 3   |
|          |        | 琵琶湖       | 1   |
|          |        | 自然        | 2   |
|          |        | 仰木の里団地    | 1   |
|          |        | 開発        | 2   |
|          |        | お祭り       | 4   |
|          |        | 時代劇       | 6   |
|          |        | 煙突        | 1   |
|          |        | 暮れ六つ      | 1   |
|          |        | 御所の山      | 1   |

| カテゴリ： 田畑仕事 |        |           |     |
|------------|--------|-----------|-----|
| キーワード1     | キーワード2 | キーワード3    | 項目数 |
| 田んぼ        |        | 田植え       | 11  |
| 田んぼ        |        | 素足で       | 15  |
| 田んぼ        |        | 手仕事・牛     | 22  |
| 田んぼ        |        | 草刈り       | 6   |
| 田んぼ        |        | 稲刈り-稲木-脱穀 | 22  |
| 田んぼ        |        | ゆお(野小屋)   | 8   |
| 田んぼ        |        | もみ干し      | 3   |
| 畑          |        | 綿づくり      | 1   |
| 畑          |        | 遠野        | 1   |
| 畑          |        | 麦         | 6   |
| わら         |        | ムシロ織り     | 47  |
| わら         |        | わら打ち      | 10  |
| わら         |        | 縄縫い       | 8   |
| わら         |        | 俵         | 2   |
| 精米         |        | うす        | 10  |

|    |  |          |   |
|----|--|----------|---|
| 行事 |  | 競争       | 1 |
|    |  | 回虫駆除     | 1 |
|    |  | 思い出      | 2 |
|    |  | 家庭室・回虫駆除 | 1 |
|    |  | 自転車通学    | 1 |

| カテゴリ： 生き物 |        |          |     |
|-----------|--------|----------|-----|
| キーワード1    | キーワード2 | キーワード3   | 項目数 |
| 牛         | 暮らし    | 生活       | 14  |
| 牛         | 暮らし    | 牛つなぎ     | 3   |
| 牛         | 仕事     | 農作業      | 4   |
| 牛         | 仕事     | 荷車       | 6   |
| 牛         | 仕事     | 牛を追う声    | 3   |
| 牛         |        | 鳴き声      | 16  |
| 牛         |        | 毛並み      | 1   |
| 牛         |        | えさ(干し草)  | 6   |
| 牛         |        | 干し草の匂い   | 6   |
| 牛         |        | 敷きわら     | 1   |
| 牛         |        | 匂い       | 6   |
| 牛         |        | 牛ふん      | 3   |
| 牛         |        | 虫        | 3   |
| にわとり      |        | 暮らし      | 5   |
| にわとり      |        | 思い出      | 2   |
| にわとり      |        | 仕事       | 3   |
| にわとり      |        | 鳴き声      | 21  |
| にわとり      |        | ひよこ      | 3   |
| にわとり      |        | えさ       | 1   |
| にわとり      |        | 匂い       | 9   |
| にわとり      |        | ふん       | 1   |
| 豚         |        | 豚        | 1   |
| 家畜いろいろ    |        | 暮らし      | 3   |
| 家畜いろいろ    |        | 鳴き声      | 5   |
| 家畜いろいろ    |        | 匂い       | 3   |
| 虫         |        | いろいろ     | 6   |
| 虫         |        | 蜂        | 2   |
| 虫         |        | 蚊        | 5   |
| 虫         |        | 害虫       | 2   |
| 虫         |        | セミ       | 3   |
| 虫         |        | コオロギ     | 1   |
| 虫         |        | くつわ虫     | 1   |
| 虫         |        | キリギリス    | 1   |
| 虫         |        | とんぼ      | 2   |
| 虫         |        | かぶと虫     | 2   |
| 虫         | 蜜      | 蜜        | 6   |
| 虫         | 蜜      | 匂い       | 1   |
| 虫         | 蜜      | 蜜狩り      | 11  |
| 両生類       |        | カエル      | 9   |
| は虫類       |        | へび       | 1   |
|           |        | ヒル       | 1   |
| 魚         |        | 魚釣り、魚つかみ | 6   |
| 魚         |        | メダカ      | 1   |
| 魚         |        | アカネチヨ    | 1   |
| 魚         |        | いろいろ     | 6   |
| 鳥         |        | 捕獲       | 1   |
| 鳥         |        | ふくろう     | 7   |
| 鳥         |        | カッコウ     | 1   |
| 鳥         |        | うぐいす     | 2   |
| 鳥         |        | いろいろ     | 2   |
| 動物        |        | うさぎ      | 2   |
| 動物        |        | キツネ      | 1   |
| 動物        |        | いろいろ     | 1   |

| カテゴリ： その他 |        |               |     |
|-----------|--------|---------------|-----|
| キーワード1    | キーワード2 | キーワード3        | 項目数 |
| 感覚        |        | 痛い            | 7   |
| 感覚        |        | かゆい           | 1   |
| 感覚        |        | あたたかい         | 1   |
| 感覚        |        | 痛気持ちいい        | 1   |
| 災害        |        | 地震            | 1   |
| 災害        |        | 自然災害、ゆとりのある社会 | 1   |
|           |        | 温泉            | 1   |
|           |        | ハイヤー          | 1   |
|           |        | 仰木から堅田へ       | 1   |
|           |        | 移動、運搬         | 3   |
|           |        | 江若鉄道          | 2   |
|           |        | 今と昔           | 9   |
|           |        | 思い出           | 2   |
|           |        | 便所にはまった       | 1   |
|           |        | 戦争            | 3   |
|           |        | 農業アルバイト       | 3   |
|           |        | よくわからないこと     | 11  |
|           |        | その他           | 2   |

|    |  |        |    |
|----|--|--------|----|
| 精米 |  | 水車     | 16 |
|    |  | 仕事っぷり  | 3  |
|    |  | 肥料     | 6  |
|    |  | 米作りと生活 | 6  |
|    |  | その他    | 5  |

| カテゴリ： 山仕事 |        |            |     |
|-----------|--------|------------|-----|
| キーワード1    | キーワード2 | キーワード3     | 項目数 |
|           |        | 毎日やった      | 2   |
|           |        | 木の葉かき      | 8   |
|           |        | 焚きつけ       | 1   |
|           |        | 柴刈り（小学生の頃） | 4   |
|           |        | 枯木とり       | 3   |
|           |        | 竹の皮拾い      | 2   |
|           |        | 枝おろし       | 1   |
|           |        | まき割り       | 8   |
|           |        | 木の匂い       | 1   |
|           |        | 思い出（山仕事）   | 2   |



写真8：キーワードが共通するコメントを集めて横造紙に貼っていく



写真6：五感体験アンケートのコメントをカテゴリに分類する

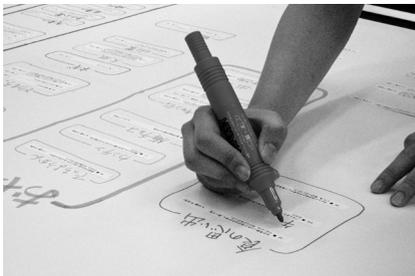


写真9：グループ分けしたコメントにキーワードを書き込み、図解していく



写真7：12のカテゴリに分類されたコメント



写真12：仰木の生活文化を概観することができる言葉の地図



写真10：学生スタッフが集まって、ふるさとマングラづくりの作業風景



写真11：カテゴリーごとにコメントが整理されて図解になる

ていた。おやつとしてもたくさん登場する。

今回の聞き取り調査では、より印象的にかつての生活を彷彿とさせる文言やコメントに注目し、読み札候補を絞る方向に進めたため、詳細な分析は別の機会にゆずるが、このような量的な比較から仰木の生活文化のさまざまな側面を探っていくのも興味深い。

「仰木ふるさとマングラ」は、コメント短冊の切り貼りとキーワードの手書きの状態をベースにして、画像ソフトで整理して見やすい図解を作成した。模造紙サイズで、「衣」一枚、「食」五枚、「住」二枚、「冠婚葬祭」一枚、「結・村組織・コミュニティ」一枚、「遊び」一枚、「学校生活」一枚、「生き物」二枚、「風景」二枚、「田畑仕事」二枚、「山仕事」と「その他」一枚、全部で一九枚作成した。

(図2)

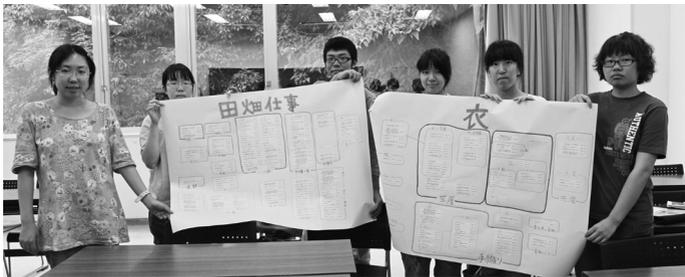


写真13：仰木ふるさとマングラのベースが19枚完成していく

図2：仰木ふるさとマンダラ

# 履き物

## 草履

### わら草履

- 通学の靴は藁草履のみ。  
…番号 109 73 歳 (上仰木 男性)
- わら草履だったので、足が痛かったです。  
…番号 143 67 歳 (上仰木 女性)
- 私も年上の人に混ぜてわら草履づくりをしていた。  
…番号 89 69 歳 (上仰木 女性)
- 昔、わら草履をはいて歩いて強かった。元気がいっぱい。  
…番号 38 74 歳 (下仰木 男性)
- わら草履は軽くて良いのですが、子供の頃よく石につまずき、足の親指の爪の下の皮がめくれ痛い思いをしました。  
…番号 57 76 歳 (下仰木 女性)
- 小学校の上どうり(草履)に、わら草履に古い布をまじえて作ったはきもの。  
…番号 60 69 歳 (下仰木 男性)
- 夫がよくわら草履をあんていた。  
…番号 121 90 歳 (上仰木 女性)
- わら草履は冬は冷たかった。  
…番号 122 60 歳 (上仰木 男性)
- わら草履が当たり前なので、何も考えなく履いていた。  
…番号 124 76 歳 (上仰木 男性)
- 冬も靴がないので、わら草履をはいて学校に行く(寒さ)。  
…番号 149 83 歳 (上仰木 女性)
- 「わら」は聴かしく感じ、わら草履も聴かしく思う。  
…番号 156 83 歳 (上仰木 女性)
- 草履を履くので、足の爪をはがす痛さは大変であった。  
…番号 158 76 歳 (上仰木 男性)
- 友達で集まって、わら草履を作りました。学校で履く上履き布を押し入れて編みました。  
…番号 176 74 歳 (辻ヶ下 女性)
- わら草履の冷たい履き心地が気持ちよかったです。  
…番号 182 72 歳 (辻ヶ下 男性)

### 竹の皮草履

- 竹の皮で作った草履も良いです。  
…番号 18 73 歳 (下仰木 女性)
- 竹の皮で編んだ草履、これ又すべすべ気持ちよかったです。  
…番号 30 年齢未記入 (下仰木 性別未記入)
- 竹の皮で作られた夏草履は、ひんやりと軽かった。  
…番号 43 91 歳 (下仰木 女性)
- 竹の皮で草履を作って、鼻緒をきれいな布をまいて履いていました。大変経て良かったです。  
…番号 52 74 歳 (上仰木 女性)
- 七月ごろになると、竹の皮を集めにやぶに行き、友達と草履作りをした。  
…番号 91 72 歳 (上仰木 女性)
- 夏は竹の皮で作った草履がすべすべして気持ちよかったです。  
…番号 126 75 歳 (上仰木 女性)
- 竹の皮の草履。  
…番号 152 64 歳 (上仰木 男性)
- 竹の皮草履を作ってもらい、真野浜まで水泳教室に歩いた時の草履の音。  
…番号 172 71 歳 (下仰木 女性)

### 草履いろいろ

- 道路など全て土だったので、草履と足の裏に伝わる感じ。  
…番号 159 71 歳 (上仰木 女性)
- 私たちの時代は、夜なべに草履作りが多かった。  
…番号 164 79 歳 (上仰木 女性)
- 草履もわらや竹の皮、葦(すすき科?)等があった。  
…番号 92 70 歳 (上仰木 男性)
- 雨の中でも草履で歩くと、汚水が塗物にかかり汚した。  
…番号 25 99 歳 (平尾 男性)
- 自慢話で恐縮です。母が作った草履を学校へ持っていくと、音が見せ廻りするものでした。  
…番号 72 83 歳 (下仰木 男性)
- 草を刈って、干して、草履を作った。布の草履も作った。  
…番号 106 72 歳 (上仰木 女性)
- 下駄の音、布草履。竹の木皮で草履を作ったのは気持ちよかったです。  
…番号 131 71 歳 (上仰木 女性)
- わら草履のほか、竹の皮、葦の草履など作って、子供には赤白のかわいらしい布のなごにしています。  
…番号 168 77 歳 (平尾 女性)
- わら草履や竹の皮草履。学校から帰ってくる竹の皮を拾いに行き、大きいのはサバ寿司用、小さいのは草履用、小さく拾って蓄えています。  
…番号 173 73 歳 (下仰木 女性)

### 下駄

- 歩く下駄の足音。  
…番号 45 80 歳 (下仰木 男性)
- 下駄をはいて、歩くので(カラコンコ)と音がする。  
…番号 106 72 歳 (上仰木 女性)
- 下駄で歩く音。  
…番号 126 75 歳 (上仰木 女性)
- 高下駄、雪の日は大変。  
…番号 30 年齢未記入 (下仰木 性別未記入)
- 下駄(つっかけ)音がして楽しかった。  
…番号 60 69 歳 (下仰木 男性)
- 下駄のはき心地がよかったです。  
…番号 157 66 歳 (上仰木 女性)

### たび

- 靴下の代りの手作りたび、山ほこ帽子(わた入れ)。  
…番号 21 75 歳 (平尾 女性)
- 寒くなると母親がたびを作ってくれた。とってもあたたかかった。  
…番号 125 71 歳 (上仰木 女性)
- 親がたびを縫って下さった。  
…番号 130 74 歳 (上仰木 男性)

### 下駄・たび

- 上級生はたびで高下駄を履いていた人が多かったと思う。  
…番号 12 71 歳 (上仰木 男性)
- 冬はたびに下駄で、ほとんどの人がしもやけに合った。  
…番号 112 62 歳 (上仰木 男性)

### ゴム靴

- ゴム靴が買ってもらえず(物も不足気味で昭和21年ごろの話)、下駄に草履を釘で打付け小学校にはいて行っていた。雪でよく滑ったが、あたたかかった。  
…番号 12 71 歳 (下仰木 男性)
- ゴム草履(セキヤ)。  
…番号 14 74 歳 (下仰木 女性)
- 学校行きは、ゴム靴をはいていた。くつ下も今のようないい物はではなく、足がとても冷たかった。  
…番号 96 69 歳 (上仰木 女性)

### なめし靴

- 昔(若い頃)冬の山仕事に行くのに、ナメシ靴(猪の皮で作った靴)に藁のそくりかす(袴かす)を入れて履いたものです。足にぬくもりがあつて良かったです。仰木地区でも、ナメシ靴がある家は数が少なく、貴重品でした。今考えれば大変嬉しい思い出です。  
…番号 146 83 歳 (上仰木 男性)

### 靴いろいろ

- 浅くつめの冷たい感触。  
…番号 76 年齢未記入 (下仰木 男性)
- 子供の頃は小学校へ通うときも「ゴム靴」「セキだ」などで、運動靴はなかった。冬の下駄は、雪の中など、下駄の裏に雪がくつき高下駄のようで恐かった。又、ゴム靴は冷たかったし、よく滑ったので、縄を巻きつけてもらってはいていた。夏のせきだは、ゴム製だったので、涼しかった。  
…番号 179 63 歳 (辻ヶ下 女性)
- 昔は、田植靴がなかったのはほかに良かった。  
…番号 181 68 歳 (辻ヶ下 女性)

### 堅田の呉服屋

- 一年に二回、公民会館へ堅田の呉服屋が出張販売に来た。呉服・洋品雑貨・下着・くつ下・作業着等。  
…番号 41 72 歳 (下仰木 男性)

### 出張販売

- 家庭用品・服・はき物等、町から出張して、家を回り、売って…番号 67 61 歳 (下仰木 女性)

# 手織り

# 衣

## 綿

■ 手織。祖母が機織をしていました。わたを畑で採り「綿くり」と云ふ道具で種と白いわたを「キューキユ」と音を立て白い綿にして、それを軸いでキューにし綿に染め、手織で襦（の／＼横糸を通す）を使って「チョンチョンバクタン」と織ってくれました。祖母を思い出すと今も音が聞こえるようです。嫁入り道具として手織3〜4反は持って行きました。  
…番号 184 80歳 (辻ヶ下 男性)

## 綿づくり

■ 昔は家で綿の木を作り、その綿で糸を紡ぎ、反物にしていた。  
…番号 27 63歳 (下仰木 女性)

■ 昔は畑でわたを作り、糸にし、各色に染め、手織りで着物を作った。丈夫で長持ちした。(母より)。  
…番号 129 70歳 (上仰木 男性)

## 綿くり

■ 綿の種抜きする木製の器具の音、「ギギギ」。  
…番号 35 64歳 (下仰木 男性)

■ 綿くりの音。  
…番号 105 66歳 (上仰木 女性)

■ 綿くりの音、ギーギーと。  
…番号 116 72歳 (上仰木 女性)

■ 祖母の綿くりの音や機織りの音、むしろ織の音、なつかしいです。  
…番号 172 71歳 (下仰木 女性)

## 綿打ち

■ 綿打ちや機織の音がした。  
…番号 131 71歳 (上仰木 女性)

## 糸くり

■ 昼間は綿打ちでピーピーと糸くり音も聞こえた。  
…番号 29 68歳 (下仰木 男性)

## 綿入れ、ドンサ、デンチ

■ 冬の寒い日に着るでんち。温かかった。  
…番号 35 64歳 (下仰木 男性)

■ 綿入れの半纏・綿入れ袖なしのベスト (デンチと書いていた) を着ていた。ジャンパーやコートなどはなかった。  
…番号 41 72歳 (下仰木 男性)

■ 手作り「ドンサ」(綿入り)。冬の寒い時に着る。  
…番号 86 67歳 (上仰木 男性)

■ 背中、どんざが軽くてあたたかかった。  
…番号 90 73歳 (上仰木 男性)

■ 地元で言う、ドンサ、デンチを着ると背中がぬくくなる(冬)。  
…番号 141 63歳 (上仰木 男性)

■ モンペをはき、デンチという綿入りのチョッキを着ていてあたたかかった。  
…番号 145 64歳 (上仰木 女性)

■ 親が自分でデンチ、モンペ、タビ等を作って着せてくれました。  
…番号 165 76歳 (上仰木 女性)

■ 冬は綿入りでんち、綿入れのはんてんで寒さをしのいだ。  
…番号 168 77歳 (平尾 女性)

■ 祖母の手織りのはんてん等、心地よかった。  
…番号 172 71歳 (下仰木 女性)

## 機織り

■ 機織りをしていた (かすり)。  
…番号 121 90歳 (上仰木 女性)

■ おばあさんが、その木綿の糸で、反物を織る機織のトントンという音が懐かしい。  
…番号 27 63歳 (下仰木 女性)

■ 昼間は、機織る音もトントンとした。  
…番号 29 68歳 (下仰木 男性)

■ 冬の間に木綿の糸で機織りをして、トントンという音がしていた。  
…番号 67 61歳 (下仰木 女性)

■ 機織りの音が懐かしい。  
…番号 90 73歳 (上仰木 男性)

■ 機織り。  
…番号 91 72歳 (上仰木 女性)

■ 母が夜なべに織る機織の「ガラガラトントン」という音。  
…番号 98 64歳 (上仰木 男性)

■ 機織りの音。  
…番号 105 66歳 (上仰木 女性)

■ 牛車の音やむしろ織り・機織りの音 (特に冬)。  
…番号 126 75歳 (上仰木 女性)

■ 機織り。  
…番号 128 76歳 (上仰木 女性)

■ 冬は手織りの機織りやむしろやかます織の音が聞こえた。  
…番号 131 71歳 (上仰木 女性)

■ 機織りのシュウトントン。  
…番号 181 68歳 (辻ヶ下 女性)

## わら

■ 夜、縄ぬいをしていた。  
…番号 51 82歳 (下仰木 女性)

■ 収穫前になると、父は、縄を手織い、少しして機械に変わったが、二又になったわらのくわし口に数本のわらを入れ、くるくるたるとたるとの回りながらみるみる縄がぬえ、見ているのが楽しかった。又、依作りもそうで、重りの棒玉をわらを並べながら手前から向こうへ向こうから手前へといそがしく、重りがガタガタとぶれる音が響いていた。  
…番号 179 63歳 (辻ヶ下 女性)

■ 何でもわらを使って作りました。帯・座椅子・弁当入れのバックの様な物・たわし・みの等の生活必需品でも。履かさが伝わりました。  
…番号 41 72歳 (下仰木 男性)

■ 田んぼなら農作業で雨の時に着ていた、わらで作った「みの」の感触。  
…番号 86 67歳 (上仰木 男性)

■ 長くつ底にわらを入れると温かた。井戸水は冬あたたかく夏は冷たいので、今も思い出します。  
…番号 111 75歳 (上仰木 女性)

■ 雨降りに使ったわらの「みの」の感触がなんとも云えなかった。  
…番号 147 87歳 (上仰木 女性)

## 農作業の着物

■ 昔の農作業衣。ハンチヤ、ハバキ、モモヒキ、テツ。  
…番号 25 99歳 (平尾 男性)

## 着物について

■ 戦後物がなくて、子供の着物も縫って着た。  
…番号 63 年齢未記入 (下仰木 女性)

■ 学生服の上にかすり羽織り一枚で大変寒かった。  
…番号 109 73歳 (上仰木 男性)

■ 冬、妹は姉のお古 (着回し) と決まっていたので、寒い日何枚重ね着しても寒かった。  
…番号 127 69歳 (上仰木 女性)

## 洗濯

■ 洗濯物はクライデして、流水ですすいでいた。  
…番号 157 66歳 (上仰木 女性)

■ みやざんの川で洗濯をした。  
…番号 90 73歳 (上仰木 男性)

■ 洗濯物をすすくのは、川へすぎに行った。  
…番号 105 66歳 (上仰木 女性)

## 洗濯のり

■ 敷布ののりつけの味、木のタライのりをきうすく水で伸ばしていくの手伝った時の、手に触れたのりにつるつる感は今も忘れません。  
…番号 127 69歳 (上仰木 女性)

■ 敷布ののりの匂いが気持ちよかったです。  
…番号 9 64歳 (平尾 女性)

■ 着物を仕立て直す、はりもの板ののりの匂いがしていた。  
…番号 18 73歳 (下仰木 女性)

■ 手作り洗濯のりで、ゴツゴツした硬巻等、夏はとも涼しく感じました。  
…番号 127 69歳 (上仰木 女性)

## 麻

■ 昔、麻を作りそれを反物に織り、かたびらで大変涼しく、感触が良かった。  
…番号 51 82歳 (下仰木 女性)

■ 夏は、麻の布地の手織りのはんてんを縫い、着こなされていた。明治2年生まれのおばあさんが知られた頃。  
…番号 168 77歳 (平尾 女性)

## 手袋

■ 戦後手袋などなく、手があれてひび割れて痛くて泣かされた。  
…番号 63 年齢未記入 (下仰木 女性)

## 帽子

■ 帽子のかわりに、手拭いでほかおぶり。  
…番号 129 70歳 (上仰木 男性)

## 編み物

■ 一本針で編み物は、いつもおばあさん達が子守りをしていたので、そこで教えられました。  
…番号 173 73歳 (下仰木 女性)





# 食3

## 魚介類

### うなぎ・なまず

■うなぎは、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 川魚

■川で釣れる魚、とりやう、アユ、アサ、水べれはも、魚の代表。…番号38 74番 (下柳本太郎)

### しじみ

■しじみは、川や湖に生息する淡水貝類で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 塩こぶ

■塩こぶは、川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 魚肉ソーセージ

■魚肉ソーセージは、川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### とろろこぶ

■とろろこぶは、川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 野田の魚

■野田の魚は、川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 焼き魚

■焼き魚は、川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### スルメ

■スルメは、川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 干し柿 出荷

■干し柿の出荷は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### ずくし(熟し)

■ずくし(熟し)は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### ざわし

■ざわしは、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 甘柿

■甘柿は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

## 柿

### 柿こね?

■柿こねは、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 茨柿の皮

■茨柿の皮は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 干し柿(つるし柿)

■干し柿(つるし柿)は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 冬柿

■冬柿は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 半熟

■半熟は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

## いろいろ

### ゴマ

■ゴマは、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 葉草採取

■葉草採取は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### どうもろこし

■どうもろこしは、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### ネギ

■ネギは、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)

### 大根

■大根は、長野県内の川や湖に生息する淡水魚で、かつては、20センチ以上は、200センチ以上は、と取れていた。…番号102 69番 (江原孝太郎)





























# 山仕事

## 毎日やった

■草球、水泳、水産学を毎日やった。  
…番号52 67頁 (下塚 勇樹)

## 木の葉かき

■木を削るという作業は、コナハヤシや杉は伝統的な山仕事で、手際よく木を削ることは、山仕事で大切なことだ。  
…番号176 74頁 (出下 文雄)

## 焚きつけ

■山仕事で大切なことは、山仕事で大切なことだ。  
…番号126 75頁 (上塚 雅樹)

## 柴刈り (小学生の頃)

■山仕事で大切なことは、山仕事で大切なことだ。  
…番号133 69頁 (上塚 雅樹)

## 思い出 (山仕事)

■山仕事で大切なことは、山仕事で大切なことだ。  
…番号54 74頁 (下塚 勇樹)

## 竹の皮拾い

■竹の皮を拾うのは、山仕事で大切なことだ。  
…番号55 67頁 (下塚 勇樹)

## 枝おろし

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号133 69頁 (上塚 雅樹)

## まき割り

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号11 70頁 (下塚 勇樹)

## 木の匂い

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号25 64頁 (下塚 勇樹)

## 思い出 (山仕事)

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号54 74頁 (下塚 勇樹)

# 感覚

## 痛い

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号27 62頁 (下塚 勇樹)

## かゆい

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号50 64頁 (下塚 勇樹)

## あたたかい

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号33 60頁 (下塚 勇樹)

## 痛気持ちいい

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号170 65頁 (下塚 勇樹)

## 災害

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号81 68頁 (下塚 勇樹)

# その他

## 今と昔

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号72 62頁 (下塚 勇樹)

## 思い出

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号39 74頁 (下塚 勇樹)

## 便所にはまった

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号72 68頁 (下塚 勇樹)

## 戦争

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号72 68頁 (下塚 勇樹)

# 移動、運搬

## 江若鉄道

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号67 61頁 (下塚 勇樹)

## 農業アルバイト

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号30 69頁 (下塚 勇樹)

## 温泉

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号66 67頁 (下塚 勇樹)

## ハイヤー

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号30 69頁 (下塚 勇樹)

## 仰木から堅田へ

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号173 73頁 (下塚 勇樹)

## その他

■山仕事をしながら、山仕事をしながら。  
…番号72 68頁 (下塚 勇樹)

# よくわからないこと

## 24時間勤務はあったらどうなるか

…番号52 70頁 (上塚 雅樹)

## 24時間勤務はあったらどうなるか

…番号32 70頁 (上塚 雅樹)

## その間に何が起きているのか

…番号52 70頁 (上塚 雅樹)

## その間に何が起きているのか

…番号171 74頁 (下塚 勇樹)

## その間に何が起きているのか

…番号35 64頁 (下塚 勇樹)

## その間に何が起きているのか

…番号30 69頁 (下塚 勇樹)

## その間に何が起きているのか

…番号91 72頁 (上塚 雅樹)

## その間に何が起きているのか

…番号29 69頁 (下塚 勇樹)

## その間に何が起きているのか

…番号125 69頁 (上塚 雅樹)

## その間に何が起きているのか

…番号155 69頁 (上塚 雅樹)

## その間に何が起きているのか

…番号155 69頁 (上塚 雅樹)

## その間に何が起きているのか

…番号3 69頁 (上塚 雅樹)

## 三二五 カルタ読み札を決めるための聞き取り調査

三一五一 あふれ出すたくさんの思い出と読み札の絞り込み

聞き取り調査は、二つの段階に分かれる。カルタ四八枚の読み札を決定するまでの「読み札を決めるための聞き取り調査」と、読み札が決定した後の「絵札原画制作のための聞き取り調査」である。

この章では「読み札を決めるための聞き取り調査」についてまとめる。

平成二三年（二〇一一）十月から、上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四地区ごとに老人クラブの方々にお集まりいただき、学生スタッフと共に仰木を訪問して聞き取り調査を進めた。十二名の学生を四地区の担当に分け、三名ずつのチームとした。実際には、可能な限り担当外の地区の聞き取りにも参加するようになった。

十二月までに各地区一〜三回ずつ計八回の聞き取りを行った。会場は各地区の自治会館をお借りした。各回とも二時間程度という限られた時間で効率よく聞き取りをするため、地区ごとにテーマを絞った。「仰木ふるさとマンダラ」で作成した十二のカテゴリーを各地区に割り当て、該当する「仰木ふるさとマンダラ」を見ながらいろいろなお話を伺った。

ふるさと五感体験アンケートで集まった思い出は約一、八〇〇項目。それを分類するために読み取ったキーワードが四四〇。一方で、カルタの読み札は四八枚しかない。聞き取り調査で次々



写真16：仰木ふるさとマンダラを読み上げながら聞き取り（下仰木）



写真14：仰木ふるさとマンダラを貼って聞き取りの準備中（辻ヶ下）



写真17：同年代の人同士だとさらに盛り上がる（平尾）



写真15：趣旨説明や自己紹介をして聞き取りへ（下仰木）

によりがえり湧き出してくる膨大な思い出の中から四八枚の読み札をつくるために、「仰木ならではの」「これは外せない」という仰木ふるさとカルタの候補を絞る必要がある。「読み札を決めるための聞き取り調査」では、「仰木ふるさとマンガラ」を手がかりとして「ふるさとの記憶」を掘り起し、仰木のかつての生活文化を生き生きと浮き彫りにすることを大切にしながら、「読み札候補の絞り込みと、魅力的な絵にする手がかり」を最重要ポイントとした。

三―五―二 読み札を決めるための聞き取り調査の手順と実際  
老人クラブのみなさんに聞き取り調査のご協力をお願いし、以下の日程で実施した。

上仰木 「冠婚葬祭、学校生活、遊び」

十月二十九日、十一月五日

辻ヶ下 「食、衣」

十一月十九日

平尾 「住、結・村組織・コミュニティー、風景」

十一月十三日、二〇日

下仰木 「生き物、田畑仕事、山仕事、その他」

十一月二〇日、二六日、二七日

それぞれの回に、六〇〜九〇歳の男性と女性、五〜十名の方にご参加いただき、以下のような手順で聞き取り調査を進めた。  
1. 事前に「仰木ふるさとマンガラ」をもとに学生が興味を持って「もつと深く、詳しく訊きたい」と思う内容を質問シート



写真20：熱心にメモを取りながら話を聞く学生（辻ヶ下）



写真18：グループに分かれて聞き取り（下仰木）



写真21：聞き取りをしながら似顔絵スケッチをする学生



写真19：準備をしながら吊し柿のお話を聞く（上仰木）

にまとめ、仰木の方の話を一方的に聞くだけではなく積極的に理解を深めていくようにした。

2. 当日、聞き取り会場の自治会館にて、学生スタッフで、机配置、お茶、お菓子、名札、資料などを準備。

3. 壁面に、該当する「仰木ふるさとマンガラ」(模造紙サイズ)を貼り出し、あわせてお手元にA3サイズにプリントしたものと「仰木ふるさと五感体験アンケートの仮冊子」を配布。

4. 研究員が司会を務め、初回は趣旨説明などのあと、「仰木ふるさとマンガラ」のキーワードや印象的なコメントを読み上げ、それをきっかけに仰木の方に思い出を語っていただく。学生スタッフと研究員が聞き取り役となり、仰木のかつての生活文化を掘り起こし、記録していく。

時間が限られているため、後半はカテゴリを手分けして研究スタッフ一、二名に対して、仰木の方二〜四名という小グループで詳細を聞き取るなど工夫する。

5. すべてのキーワードの聞き取りの後、それぞれの地区の最終回到研究スタッフが印象的に感じた候補を提示し、仰木の方の意見を聞きながら「仰木ならでは」「これは外せない」という読み札候補をカテゴリごとと五〜八項目を目安に絞り込む。

6. 読み札候補について、その情景をより詳細に聞き取り、仰木の方と研究スタッフでイメージを共有する。

7. 大学に帰校後、聞き取った内容の整理と読み札候補につい

て「魅力的な絵となり得るか」などの検討。

「仰木ふるさとマンガラ」の言葉はすべて、アンケートに記入された仰木の方々の言葉そのままである。五感に宿る思い出を綴った一つひとつの言葉やキーワードが、仰木の方々の記憶や感情を呼び覚まし、共有され、話題が広がっていく。最初は緊張気味でちよつと無愛想に見えたおじいちゃん、少しはかなだような表情のおばあちゃんたちが、アンケートの言葉を読み上げるごとに、歓声にも似た相づちや笑いが起き、昨日のことのように事細かくお話をしてくださる。時に絵を描いて説明してくださったり、大切にしまっておかれた当時の野良着や使い込まれた道具をご持参くださったり、古いセピア調になった写真を見せてくださったりして、育った時代も環境も違う我々研究スタッフにもなつかしさと共にそういう時代に育まれた生活文化が今につながっているのだという確かな手応えが感じられ、心に響き、仰木の方々の思い出話に惹き込まれた。

読み札候補を絞り込む様子の例として、上仰木の「冠婚葬祭」の時のメモを抜粋し、以下に示す。絞り込んで新たな興味深い話が出てきて、話が尽きない。

「仰木祭(泥田祭)」…満仲さん。馬止め。仰木太鼓と雨。

「元三大師」…夜に松明を持って横川へ行く行列ができた。夜通し(オツウヤ)で盆踊りを踊った。松明は「コエマツ」という。

「地藏盆」…子どもの祭で上仰木では個別にやっている。とう



# 辻ヶ下聞き取り調査

**ナツキ = ミナモト**  
木削皮に、種とばして 勝手に自然。

**ミソ豆**  
お豆に 芽をまいた後、豆の皮が剥がれ完成。  
(酢水の上に乗る)  
中国のお豆タン

**とぶく**  
内緒。昔は 味噌の木にしよう。  
においせすといひい。

**納豆餅**  


**柿**  
柿屋  
屋根は 臨時で、ワラかすか？  
ひこして 足りなからたのり 出現。  
物11と さん万個  
現金取入のり。

**干し柿**  
ゆずり、こぶ、  
柿

**粉くい葉** - 1坪の粉の穴  
これが主に食べられる。おたつ。  
だまが全部おたつ。(おたつは...  
おたつ)

**ずし柿**  
生活の歴史 MOTTAINAI

**けんぞり** こぼる = おたつ  
農作業の 雨の日の夕飯の時に 食べる。  
手廻りの おにぎりとか もしと、  
産ませる。野良。  
家でもおたつに食べると、間食、おたつ。

**かんざい**  
干比豆のこぶ。半と間に合おせにた。

**こげおし**  
お湯で戻す  
おいしい

**ほうしん**  
おたつ

2011年11月(9日(土)) 大雨



**飯**  
おにぎり モノの 着物  
おたつ、おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ

**ほうぞり = ほうぞく**  
中華飯？ おたつ、おたつ  
おたつ？

**豆腐子**  
おたつ、おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ、おたつ

**おたつ**  
おたつ、おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ、おたつ  
おたつ、おたつ、おたつ

写真23：辻ヶ下聞き取り調査のスケッチメモ (作：小林佳紫)



写真25：手ぬぐいのかぶり方（姉さんかぶり）を覚えてもらう（下仰木）



写真26：依編みの実演（下仰木）



写真27：依編み機の実演（下仰木）



写真24：大切にしまっておかれた野良着を着せてもらう（下仰木）

「結婚」：ヨメリミ（嫁入り見？）  
顔見せ。荷出し、伊勢音頭が唄われた。「ハチワレ」、午後八時を道で聞いたらダメ、八割れで縁起が悪い。

「お葬式」：足袋はだし。親が亡くなったら、お嫁さんは足袋はだしで上仰木の墓地まで歩く。五〇年前くらいまでは山式のお葬式（お墓でお葬式）、土葬。山式のお葬式では「オンボ」（穴掘り、死骸を埋ける役目）がいたい二人。お町内一人と親類一人。穴はかなり深く、一人では上がれないくらい。大変。山式から戻ったら「オンボ」が一番上座で飲み食い。墓が掘り返されないように竹囲いで囲った。

もろこし（なんば）を食べるのは下仰木だけで、上仰木にはない。地藏盆の前にお地藏さんを家に持ち帰って、身体をきれいに洗ってお化粧をして、またお祀りをする。お地藏さんを動かしてはいけないが、この日だけ動かしてもいい。

「仰木踊り」：江州音頭で踊る。手を叩くところだけ合わせて、あとは自由にユラユラと。人によって踊りが違うので難しい。男踊りと女踊りがある。四つの地区で八月中、次々に盆踊りが行われた。下仰木の千日盆、上仰木の薬師盆、平尾の虚空蔵盆、辻ヶ下の地藏盆や元三大師誕生会など。

「お葬式」：足袋はだし。親が亡くなったら、お嫁さんは足袋はだしで上仰木の墓地まで歩く。五〇年前くらいまでは山式のお葬式（お墓でお葬式）、土葬。山式のお葬式では「オンボ」（穴掘り、死骸を埋ける役目）がいたい二人。お町内一人と親類一人。穴はかなり深く、一人では上がれないくらい。大変。山式から戻ったら「オンボ」が一番上座で飲み食い。墓が掘り返されないように竹囲いで囲った。

聞き取りの間、ICレコーダーで録音するが実際には声が錯綜しテープ起こしは難しく、研究スタッフのメモが重要な記録となる。簡単なイラストスケッチを描きながら絵と文字で記録していく学生も多く、メモを取りつつ話者の似顔絵を描いたり、まさに芸術大学で学んでいる特技を活かした手法で見応えのある記録を残した。後半の絵札原画制作の準備ができていく。

### 三・五三 実体験をともなった聞き取り調査、中間報告の展覧会、ワークシヨップ

今回の聞き取り調査では、単にお話を聞くだけではなくいろいろな実体験をさせていただいたことが大きな特徴の一つと言える。聞き取り会場でむかしの野良着などを着せていただいたり、手ぬぐいのかぶり方(姉さんかぶり)を教わったり、依頼み機の実演を見せていただいたり、仰木の方々のご厚意によるものである。また、納豆餅、干し柿、蜂の子ごはんなども食べさせていただいた。「五感体験アンケート」からスタートした調査・研究だが、我々研究スタッフも五感で仰木を体験し、つながっていくことができた。

また、聞き取り調査と並行してここまでの活動の中間報告として展覧会を開催し、その関連イベントで仰木の食のワークシヨップを実施した。これらの取り組みで、仰木をより身近に感じ、思い出の中のかつての仰木が今の仰木の生活文化の中に確かに息づいているつながりを実感した。

以下に主な取り組みを挙げる。それぞれの機会に幅広く聞き取りも進め、充実した成果となった。

1. 成安造形大学附属近江学研究所企画展覧会 「仰木 水と記憶のコスモロジー」

会期：平成二十三年十月二三日～十一月二七日

会場：成安造形大学「キャンパスが美術館」ライトギャラリー  
概要：附属近江学研究所と地蔵プロジェクト<sup>註3)</sup>のそれぞれが、水・記憶・音をテーマに、滋賀県大津市仰木で

取り組んできたフィールドワークと聞き取り調査に基づく三つの研究成果の一端を発表した展覧会。「水と暮らし」(里山・水と暮らし第一期の報告)、「里人の記憶」(第二期として本研究の中間報告)、「音のコスモロジー」(地蔵プロジェクトによる二〇一〇年度近江学研究所助成事業「仰木サウンドアーカイブ・プロジェクト」の報告)の三つのスペースで構成され、仰木の方が唄う江州音頭などを聴くことができる会場で、五感体験アンケートから選んだ約七〇〇項目の思い出をカルタの読み札仕様にしたものと映像で、里人の記憶を展示した。(写真28～32)

主催：成安造形大学

企画：成安造形大学附属近江学研究所

ディレクション・展示技術協力：成安造形大学情報メディア

センター



写真31：カテゴリーで色分けし、読み札を模した五感体験アンケートからのコメントカード

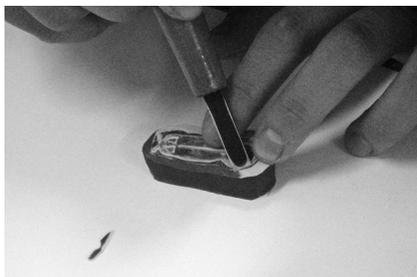


写真28：カテゴリーのシンボルマークを消しゴムハンコで作成



写真32：五感体験アンケートから抽出した言葉を映像で表現した



写真29：読み札仕様の五感体験アンケートコメントカードを作成



写真30：畳に座ってコメントカードを味わっていたかくコーナーを設けた

2. 仰木のくらしワークショップ

プ「食」

日時：平成二十三年十一月十二日

会場：成安造形大学【キャンパスが美術館】ライトギャラリー

概要：本研究の公開ワークショップ。学生たちが仰木の方々と一緒に仰木の「食文化」の魅力

概要：本研究の公開ワークショップ。学生たちが仰木の方々と一緒に仰木の「食文化」の魅力



写真34：食のワークショップにて仰木の食について聞き取り



写真35：五感体験アンケートで興味深いと感じた内容を振り下げる



写真33：食のワークショップで仰木物産市「仰木ふれあい青空市」を開催。地元の新鮮な野菜などを販売していただいた



写真37：食のワークショップにてつくたてのお餅に納豆をはさみ納豆餅をつくる



写真36：食のワークショップにて納豆餅づくりのために餅つき

3. わら草履づくり

日時・平成二三年十一月二〇

日

概要・下仰木自治会館で仰木祭に使用するわら草履づくりが行われ、学生スタッフもわら草履づくりを体験。(写真39～41)

を探った。仰木物産市「仰木ふれあい青空市」、仰木独自の食文化である「納豆餅づくり」「食文化の聞き取り調査」を前述の「仰木 水と記憶のコスモロジー」展の関連企画として開催。(写真33～38)



写真39：仰木祭のためのわら草履づくりに飛び入り参加。親切に教えていただき学生も何とかつくれた



写真38：食のワークショップにて納豆餅をわらを使って切る



写真41：11月につくったわら草履が来年の5月3日の仰木祭で履かれる



写真40：わら草履づくりの手順をスケッチしながら聞き取り。見事な手さばき、足さばきでわら草履ができていく

## 4. 手づくり味噌づくり

日時：平成二十四年三月三日

概要：J A 堅田中央支店で、仰木の方にご指導いただいて仰木の材料でつくる手づくり味噌づくりを体験。(写真42～43)



写真42：仰木の素材で手づくり味噌づくりを教えていただく。大豆は事前に炊いておいてくださった



写真43：麴をまぜる。3月に桶で仕込み10月に美味しい手づくり味噌ができあがった

## 5. 京都新聞夕刊「@キャンパス」に「次世代へ 結の心をつ

なく」の記事掲載

概要：「@キャンパス」とは、夕刊の二面見開きを各大学の学生が取材・構成・執筆するという企画。平成二十四年一月から京都新聞の記者の指導のもと、本研究の聞き取り調査で出会った仰木の魅力を「つながり」をキーワードに紙面企画・構成を始め、五月二日に記事が掲載された。仰木地区では普段、夕刊は配達されないが、三日の朝刊と一緒に配達された。五月三日は仰木祭の当日である。(写真44～46)



写真44：新聞記事「@キャンパス」の打合せ。仰木での聞き取りをもとに「結」をテーマとした記事にまとめる



写真45：新聞記事「@キャンパス」の編集作業。人のぬくもりを伝えるイラストをたくさん使うことに



©近江学研究所 編集責任 稲垣賢治氏/法野

写真46：京都新聞「@キャンパス」の掲載記事

## 前編の結び

本稿は、前編としてひとまずここで終える。後編では、「読み札決定」から「絵札原画制作のための聞き取り調査」、「絵札原画制作と仰木ふるさとカルタの完成」とあわせて、教育活動としての側面を学生スタッフの声をまじえて報告し、また、「仰木ふるさとカルタ」の活用についても触れたいと思っている。

## 謝辞

本学近江学研究所研究員の大原歩氏と加藤賢治氏が、本研究の共同研究者である。大原歩氏は、学生の頃より仰木をフィールドとした「地蔵プロジェクト」という研究チームで活動し、仰木支所に勤めていた経験もあり、本研究において大学と仰木をつなぐ重要な役割を担っていただいた。また、学生への指導、研究活動のサポート、研究の記録（録音、撮影）等、本研究を推進する上で欠かせない存在であった。加藤賢治氏は、「仰木・堅田の祭礼」を研究してこられ、特に上仰木での調査に多大なご助力をいただいた。そして、何より、仰木在住のたくさんの方々のご協力なくして、本研究の取り組みはあり得ない。聞き取り調査にご出席いただいた仰木学区老人クラブ連合会の方々から草履づくりや納豆餅、手づくり味噌などをご指導いただいた方々、後編で報告する読み札を一緒に推敲してくださった仰

木の俳句の会「畦草会」の方々など、総勢五〇名以上に及ぶ方が学生と温かく接してくださり、多大なご協力をいただいた。他にも一八五通のアンケートを記入してくださった方々や仰木で出会った多くの方々に、ふるさとカルタへの期待と励ましの応援をたくさんいただいた。ここに感謝の意を表する。

#### 学生スタッフ（敬称略）

梅下菜々美、益友花子、兼森絢子、日下部まこ、小池由華、後藤美子、小林佳紫、鈴木沙季、関戸望、長野明代、永禮尊大、宮本暖子 以上十二名が学生スタッフとして研究を支えた。あわせて、感謝の意を表する。

#### 註

1. 自然写真家として世界的に活躍する今森光彦氏の映像を交えて、琵琶湖畔の里山の人々と自然が共存する姿をハイビジョン撮影で一年間定点取材、詩情豊かに綴った映像。仰木地区の棚田が主要な舞台となっている。一九九九年放送。

2. 五感体験アンケートは、上田洋平氏（滋賀県立大学教育共生センター助教、心象図法の提唱者）の考案。

3. 地蔵プロジェクトとは、二〇〇〇年、成安造形大学生に

よる仰木地域のフィールドワークを実施するプロジェクトとして発足。大学の公式プロジェクトとしての活動が終了した後、二〇〇三年から現メンバーを中心とする有志により独自の活動を継続。地域と関わりながらさまざまな記録調査や企画を展開中。本研究の共同研究者である大原歩氏は、そのメンバーのひとり。

# 仰木の民俗誌・牛と人の関係

「仰木ふるさと五感体験アンケート」より考察する

大原 歩

Title :

Ogi Folkloristics : The Interdependence between Cows and People

Summary :

This report is based on data collected in the “Questionnaire regarding First-Hand Experiences of Life in Ogi,” conducted in Ogi in Otsu City, Shiga Prefecture. It examines the vital relationship between cows and people in the life of farming villages between the years 1945 and 1965.

## はじめに

成安造形大学附属近江学研究所における近江学研究「里山水とくらし」の第二期として二〇一一年より二年間、研究活動「仰木の生活文化の聞き取り調査及び仰木ふるさとカルタ制作」〔註〕に取り組んだ。本稿は、研究活動の過程で滋賀県大津市仰木地区の六〇歳以上で組織する「仰木学区老人クラブ」を対象に実施した「仰木ふるさと五感体験アンケート」〔註〕においてキーワードとして多く記述された「牛」に着目する。農耕の暮らしに欠かせなかった「牛」との暮らしを読み解くことにより、昭和二〇〜四〇年代という手が届く過去において、仰木地区で営まれてきた自然と対峙した厳しくも豊かな生活文化の一端を記録することを試みた。

## 第一章 仰木ふるさと五感体験アンケート「牛」――

「仰木ふるさと五感体験アンケート」（以下アンケート）は、当時の五感体験、身体感覚を思い出し書き出していただいた。一八五枚集まったアンケートの中から、牛についての記述は、

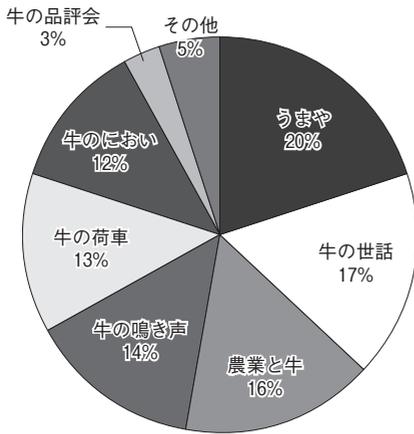


図1：「仰木五感体験アンケート」における牛の記述に関する分類

一二九項目あった。  
内容を分類すると、図1のようになる。「うまや」と呼ばれる牛小屋・牛舎が家の中にあつた様子など牛との共同生活の様子がわかる記述が一番多く、次に、牛のエサ取りやエサづくりなど子供も一緒に取り組んだ「牛の世話」に関するものが多かった。三番目、五番目には田仕事や山仕事における牛の役割について、また、四番目、六番目には牛の鳴き声やにおいなど、時間がたつてもよみがえる嗅覚や聴覚の記憶に残つたという記述があつた。その他には、牛の品評会、牛祭りについてなど、牛の売買や祭礼にまつわるものがあつた。

第二章より表記する抜粋したアンケートの執筆者については、文末のかっこ内に順に（アンケートを回収した二〇一一年時の年齢、性別、在住地、アンケート番号）と記す。

## 第二章 生産生活に欠かせない牛

仰木では、昭和三〇年代に耕耘機が販売されるまで、牛が労力として重宝されてきた。

高低差のある棚田での農作業、秋の稲刈りの運搬、また山で伐採した木を伐り出すなど田畑・山仕事には牛が必須であつた。黒毛牛がほとんどで、昔は力強い雄牛が多かつたが、戦後は男手が少なくなつたため女性でも扱いやすく大人しい雌牛を飼う家が多くなつていったという。どれほど牛がいたかという点、杉立繁雄氏の『八坂神社の笹神輿』を引用すると、「宝永三年（一七〇六）の「下仰木村指出帳之覚」には下仰木村一七〇軒に対して牛六六疋・馬十二疋。明治十三年の『滋賀県物産誌』には仰木全体で四五七軒に対して牛二〇〇疋」が記録されている。その後、「昭和初期までには、殆どの農家に一頭の牛が飼われていた」という。

### 二一 田仕事

牛の労力が一番必要とされていたのは、「田仕事」であつた。棚田を耕作する上で一番重要な土を起こし、酸素を含ませ、養

分を蓄え、土をならし、水が抜けないよう水を張る「田んぼのこしらえ」。仰木では粘土質の泥田が多く、ぬかるみの中の田仕事には牛の力が不可欠であった。以下、アンケートをまとめて記す。

農業は牛なしではできない。(七〇歳、男性、上仰木、番号92) / 田んぼを耕作するのに牛でカラスキを引っ張り、耕していた。(七〇歳、男性、上仰木、番号129) / 土質は粘土層で瘦せた土地が多く、農耕には人力だけではとても困難であり、先祖の人々は貧苦の中から牛を飼い、労力の重要な担い手として大切に扱い、共生してきた。(八八歳、女性、平尾、番号185) / 小学生の頃から牛でカラスキを持って田んぼを耕した。またクワでかくれば、大昔に噴火した跡と思うが、火山の灰色の土がにゅっと出てきた。この土が乾くとクワがはね返ってきて細かくできなかつた。その場所の付近へいったら牛が沈んで行って牛がなかなか上がれなかつたこと、とてつもなく長い孟宗竹を差しても沈んでいたことなどを覚えている。(六七歳、男性、上仰木、番号86)

## 二二 山仕事、運搬

また農閑期には、山仕事や、米俵や丸太などの物資の運搬にも牛が活躍した。山仕事は、山の谷あいできり出した六間ほど(約十一メートル)の丸太や材木を、キンマ(木馬・木材で作られたそり)を使って尾根道まで引き出す作業があった。また、

大津や京都など遠方へ米俵などを運搬した際は、牛用の藁の沓を前足に履かせ、牛の蹄を傷つけないように気をつかった。冬の寒い時期には、角に八の字に布を巻いたり、背中に毛布をかけてから鞍を乗せるなどの防寒をし、大切にされていた。

アンケートをまとめて記す。

親が木伐を伐出していた。車ではなく荷車を引っ張るのは牛でした。牛の仕草の掛声「オウ、シイツ」、そして坂道を帰って来るキーツというきびしいブレイキの音で今日も無事に帰って来てくれたと夕方ホツとする一刻でした。(七四歳、女性、下仰木、番号34) / 私たちの子供の頃は、重たいものを運ぶ時は荷車を牛に引っ張ってもらってガタガタ道を歩く生活でした。秋は日が短いので、暗くなつて父が帰ってくる時、タイヤが金の玉だったので、チャリンチャリンと大きい音が聞こえてくる」と「ああ、お父さんの音や」と言つて、外へ出迎えに行つたものです。(六九歳、女性、上仰木、番号89) / 農作業の運搬は鉄車輪の荷車を牛に引かせ、「シイツチャイ」と尻をたたいていた。(七九歳、女性、上仰木、番号135)

## 第三章 牛と暮らす

生産生活を支えるために一家に一頭は牛を飼っていた。牛を維持することは大変なことであった。この章では、牛と共に暮らす生活へ目をむける。

三一 うまや

仰木の百姓の家には、「うまや」と呼ばれる牛小屋が家の中にあり、一つ屋根の下、牛と共に暮らしていた。以下、アンケートをまとめて記す。

昔の家は玄関より入ると土間があり、居間は殆んどの家は六畳の居間が4間あり、居間の反対側には牛舎があり、訪ねて行くとき牛が顔を出して挨拶してくれることがどの家にも多くられた。(九九歳、男性、平尾、番号25) / 家入って右側の間が牛小屋だった。(六九歳、女性、上仰木、番号96) / 玄関の横に牛小屋があり、知らない人が玄関と間違えて戸を開けたら牛が出てきてびっくりした笑い話がある。(六二歳、男性、下仰木、番号32)

記述と聞き取りをもとに当時の「うまや」のある民家の平面図(図2)を描いてみると、うまやが土間・台所の一角にあることがわかる。牛は土間側へ顔を出し、そこでエサを与えた。うまやには、短く刻んだ稲わらを敷き、二日に一度昼頃に片づけ、糞と一緒に田の肥料とした。

また、子供心に強烈だったのは、うまやのおいだったようだ。アンケートをまとめて記す。

家の中に入ったら、どの家でも牛のおいがした。(七六歳、男性、下仰木、番号71) / 牛のおいより馬屋の臭いがきつかった。その馬屋からフンを手でつかんで丸めて棒で挿して田んぼまで運んだものである。臭いもくそも言っていられなかった。

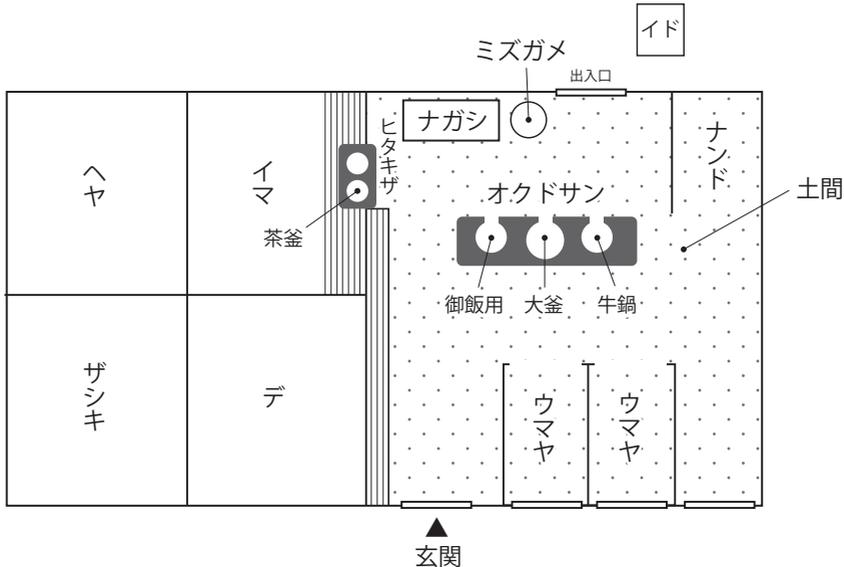


図2：ウマヤのある仰木の農家の平面構成

それが田んぼを作る常識だから。家の玄関に入った所に馬屋があるので家中が臭く、昔はハ工取り紙がなかったからハ工が飛びまわっていた。(六九歳、男性、上仰木、番号133)

また、外に牛をつなぐ時には、

「牛つなぎと言った丈夫な木につながれていた。(七三歳、女性、下仰木、番号173)」「昔は自分の家で牛を飼っていたのでよく牛の世話をした。そして牛をつなぐ木(なつめの木)があつてそこでよく牛の体をこすってきれいにした。(七一歳、女性、下仰木、番号175)」など、

特定のなつめの木を庭木として育成し使用していた。牛の体を洗うときや角を切る時などには、鼻の高さで紐をつなぐことによって牛のいたずらを防止した。

また、牛をつなぐ綱は麻で作られるなど、使用するのに最適な身の回りにある植物を利用してきた。

「牛の綱などに麻縄があるので、自家製の麻を作っていた。刈り取った麻を池につけて、腐らして、皮がとける頃引き上げて、皮を池の側でしごいて家に持ち帰り、縄をつくった。(七四歳、女性、下仰木番号34)

### 三二一 牛のエサ

牛のエサは、朝・夕の二食。稲わら・干し草を主に、麦・稗・粟が入った煮物であった。藁や干し草を細かく切り、牛鍋で柔らかくなるまで炊き、米ぬかを混ぜて作った。



家族同様に飼われていた仰木の牛(昭和32年・深田氏提供)

「農家は玄關を入ると、土間奥にかまどがあり、中心に大釜さん、大きな鍋が掛り、左には御飯用鍋、右には牛鍋が掛けてありました。(七九歳、男性、平尾、番号1)」というように、人間と同じおくどさん(かまど)で、牛のエサが作られていた。また、「牛に餌をやり、その後家族が食事についた。(六二歳、男性、下仰木、番号54)」とあり、牛が家族同様に勞われていたことがわかる。

牛のエサである干し草は、「牛の冬用の餌のため、夏に干草をたくさん作っていた。家の敷地内で干していた匂いが開けっ放しの家の中まで充滿していた。(七十二歳、男性、下仰木、番号41)」というように、夏に刈り取りを行っていた。また、「牛のエサの確保のため、堅田方面の草を競って買い付け、時には草の刈り取りを巡って小競り合いが生じたこと」「註」もあつた。

### 三二 子供たちの仕事

毎日の牛のエサの確保は大変であつた。牛をエサ場の草地に連れていきエサを食べさせたり、庭で牛の体を洗うなど、子供たちが牛の仕事を担当していた。

牛のえさの草刈を学校から帰宅後毎日していた。(七五歳、女性、上仰木、番号174) / 朝仕事に牛の飼料用の草刈、束にして棒に突き刺しかついで帰る。(七六歳、男性、上仰木番号158) / 小学生の頃から牛のエサとして手で草刈りをしたこと。手を切ったり、草を刈っている何とも言えない音や感

触を覚えている。(六七歳、男性、上仰木、番号86)

## 第四章 売り買いされる牛

### 四一 馬喰

仰木では、馬喰と呼ばれる牛の仲介業者が出入りをしていて、子牛を但馬などから買い、牛を飼っている家に貸し与え、三、四年後に成牛を賃金を払って引き取り、また子牛を置いていくという委託飼育制度が行われていた。農家にとって重要な現金収入であつた。馬喰は、牛の飼育方法や、種付けの方法、病気の対応も行い、日常的に地域に出入りをしていった。

また馬喰は、出入りする農家の年頃の娘や息子の結婚相手探しもしており、仰木の娘は働きの者のためよく声をかけられた。馬喰の仲人で他所の農家と結婚した人もいたという。

### 四二 品評会

毎年、共進会による畜牛の等級を決める牛の品評会が行われていた。仰木小学校の運動場に百頭以上の牛が集められ、骨格・肉付き・良い顔・性格などで評価された。馬喰の所属する屋号や名前が書かれた油単(化粧布団)を着せて、鼻木には赤か紺の鮮やかな紐をかけて牛を飾った。大切に育てた牛が一級に選ばれることは家族にとって誇りであつた。級がついた牛は高値で売れた。しかし、愛情をかけて育てた牛を売らずに大切に飼

い続ける家も少なくなかった。

「牛の品評会。運動場いっぱいにはたくさん牛が並び品評会が行なわれていた。京都の但馬牛の有名な地域との交流が盛んに行なわれていた。(八八歳、女性、平尾、番号185)」

## 第五章 牛の祭り

### 五― 八坂神社の笹神輿

仰木の下仰木地区には、牛頭天皇をまつる八坂神社があり、毎年八月十四日、十五日には牛の疫病払いの「笹神輿まつり」(通称・牛まつり)が開催される。竹と笹で作られた笹神輿が造られ、八坂神社まで渡御し、牛の疫病を諫める牛頭天皇社に神輿が奉納される。祭礼の起源はわかっていないが、「ある時、牛の病が流行ったので、牛の好きな笹を神輿に仕立てて奉納したのが始まり」〔註2〕とされている。十五日の午前中には飼っている牛を落合川に連れて行き洗ったという。かつては、青年会組織により運営されていた。笹神輿は、大・中・小と三基つくり、大きい方から牛頭・多賀・八幡の三社の神輿とされていた。現在の祭りの運営は、「下仰木民芸保存会(笹神輿保存会)」が行い、下仰木子供会により神輿渡御が実施され、笹神輿は一基となっている。〔註3〕

以下、平成二〇年時の笹神輿まつりの流れを記す。

八月十四日、笹神輿の制作が、下仰木の北東にある「マムシ

ワラ」と呼ばれる一角にて行われる。以前は、牛を飼う家が竹を一本奉納しその竹で神輿を作った。牛を飼っていない家は現金を奉納した。余った竹は、竹林を持たない仰木の住民に販売し、青年会の活動資金となっていた。十五日、午前中、八坂神社では湯立祭りが執り行われる。その後、正午頃、東光寺の施餓鬼法要が終わると、寺の鐘が数回鳴らされ、それを合図に、マムシワラから子供会によって笹神輿が渡御され、およそ三〇〇



笹神輿の制作 (2008年8月14日)

メートル離れた八坂神社に向かう。笹神輿の後ろには、サカキ（枝ぶりの良い四メートルほどの檜の枝）を牛に見立てて引きずりながら後に続く。八坂神社に着くと、神職による神輿と子ども達のお祓い、餅まきが行われ、祭りが終了する。

アンケートからは、湯立祭りの様子は、牛の疫病除けでもあり、村人の厄除けの祭事であったことが伝わる。

天の山の八坂神社で湯立祭が行われ、釜湯に巫女さんが酒を注ぎいれ、笹でその湯を跳ね飛ばし「湯がかかると病気をせん」とか云うて皆がありがたがって詣るのであった。釜に余った湯はやかん等にもらって帰り、「牛に飲まずと病気をしようらん」と云うて、欲張ってもらってきたものでした。そして家族の者もいただいたのでした。（八三歳、男性、下仰木、番号72）

#### 五二一 京都葵祭・時代祭

京都の三大祭である葵祭や、時代祭に練り歩く牛車を曳く牛として、仰木の牛が派遣されていた。葵祭の牛は、実際に牛車を曳く二頭と交代用の二頭の計四頭の牝牛が必要で、牛や馬の調達にあたる明馬会によると、一・五トンもの牛車を曳く体力が求められる上、長距離の巡行でも暴れたりしないように人になれ調教されていないと務まらないという。その点、仰木の牛は、人に慣れ、体力もあり、また京都には大原へ運搬などで行き来をするなどしていたこともあり、重宝されていた。祭の日には、京都へ出向き、牛が無事に務めを果たすかを見物にいつ

たという。

#### 結び

昭和三〇年代中期に農業の機械化が急激に進むことで役牛の飼育は急速に減少し、現在仰木で牛を飼育している家は二軒となった。本稿では、牛に関わる生活の記述・聞き取りを描くことで、牛によって生みだされた人々の社会関係を明らかにし、また、厳しい自然の中で資源を循環させて営みに努めてきた農民の暮らしを描くことを試みた。

牛は、役牛として、農耕や運搬に用い、干し草や麦など農業副産物を与えて飼育をし、委託され肥育した牛は現金収入となり、この時代の持続的な自給自足の農業にはなくてはならないものであった。また、牛は、厳しい生活を協働する一員として、家族のように手厚く扱われ、疫病払いなどの祭事も執り行われるなど、生活の側で大きな「命」を扱うことが心の通った豊かな結びつきを生み出してきた。

牛と人の暮らしを読み解くことで、大量消費・大量廃棄型の暮らしを追い求める中で、切り捨ててきた優れた素材や技術、豊かな暮らしの知恵や自然観を振り返り、「命」や「豊かさ」の意味を見直すこれからの生きる指針のヒントになるはずである。

また、調査の課題としては、仰木に現存する農耕具など民具

の調査ができていないこと、周辺集落などとの流通に関する調査が不十分であることだ。現存するカラスキやウマガワなどの民具調査をすることで、江戸時代には開拓されていた広大な棚田でどのように牛を扱い生産性を保っていたのかを調べてみたい。また、隣接する集落では牛ではなく馬が使われていたことなどの伝承があり、牛の貸し借りなどの流通についてなども、牛を扱っていた方にお聞きし記録しておきたいと考える。

参考資料

- ・『天津市下仰木 八坂神社の笹神輿』 杉立繁雄
- ・『ふるさと仰木 古老が語る』（発行：仰木史跡会 一九九四年）
- ・『草山の語る近世』 水本 邦彦（発行：山川出版社 二〇〇三年）
- ・『牛と農村の近代史…家畜預託慣行の研究』 板垣 貴志（発行：思文閣出版 二〇一四年）
- ・『人と動物の日本史2―歴史のなかの動物たち―』 河野通明『農耕と牛馬』（発行：吉川弘文館 二〇〇九年）

註

1. 本誌 永江弘之著「生活文化と聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 前篇」P 25～72 に詳しく掲載している。

2. 『天津市下仰木 八坂神社の笹神輿』著：杉立繁雄より引用

3. 杉立繁雄氏著『天津市下仰木 八坂神社の笹神輿』によれば、「笹神輿まつり」は、かつては青年会組織（数え十五～二五歳、若衆組織）のうち、十五～十七歳の前髪によつて行われていたものであった。その後、昭和三十四年に前髪の崩壊や時代の風潮もあつて一時中断されたが、昭和五一年に伝統的な行事が途絶えることを危惧した有志によりまず一基が復活された。これを受けた地元では昭和五七年には新しく「下仰木民芸保存会（笹神輿保存会）」が結成され、それまでの前髪主導の行事から、現行の保存会および子供への行事と移っていったとある。

近江の水をめぐる

石川  
亮

Title :

The Water of Omi

Summary :

I began making artworks using water I collected from springs throughout Shiga Prefecture in 2010. This marked the start of what has become my ongoing investigation of the background and roots of the various springs of Shiga Prefecture, most of which have names that can be traced back to traditional stories, area names, and the like. The focus of my current research is on the life that sprang up around water sources and the cultures to which the water gave rise.

古代より自然環境と対峙し共存してきた日本人は、それらに固有の名を命名し、自分たちの生きる源として敬意を表してきた。例えば圧倒する山々の存在や、原野より湧き出る泉、流れ落ちる滝、その運動により形を変えた岩、石、木などあらゆる自然の有様や現象に神仏の名を冠したのはその現われではなからうか。

私はそのような固有の名を冠した場が周囲の人々によって現在もお受け継がれ、生活の源として精神的、物質的に主たる存在であることに興味をもたずにはいられない。なかでも近江の国（滋賀県）は、四方を山に囲まれ、その山々の合間から流れ出た水は真ん中に大きな水溜りをつくっている。言うまでもないが、水のある国である。

高度経済成長期に育った私は、水道の蛇口をひねれば、いわゆるH<sub>2</sub>Oの水が流れでる。これが当たり前の感覚としてこれまで生きてきたのだ。

近代化と共に上水道が整備されるまで、生活を営む人々にとって水は我々の生活と同様、当たり前のものであったのであろうか、上水道の水でしか生活したことがない私には、どうしても水道がない生活に実感が持てないのである。そこで疑問とし

て、上水道のそれとは別の水との生活や関わり、在り方に、迫ってみたいと考えたのである。

先に述べたように滋賀県は水の国であることから、固有の名を冠した水がどれだけあるのか、大湖に流れ着くと考えられる水源は、何カ所あるのかを自分の足で探し出すことにしたのである。

## 一、全体の水・固有の水

二〇〇七年、美術家である私にスイス、ジュネーブの美術学校の先生の誘いで水をテーマにした展覧会に参加することになった。このときに私が出した作品アイデアは、日本の湖（琵琶湖）の水とジュネーブの湖（レマン湖）の水を混合させ、固有の水でなくなるプロセスをみせる提案をした。よって鑑賞者はその様子を只々見守ることになる。土地の歴史や自然の背景に特徴のある固有の水は、混ざり合うことで固有性は失われ、同時に背景も全て失われる。それは単なる生命として不可欠な水分に成り代わり、名前の無い水、（全体の水）に成り変わるのである。

作品の表現は二つの凹みのある分厚い金属性プレートに、それぞれの水を固体化したもの（水）を配置する。二つの水は外気にあふれ、時間と共に表面から溶け出し液体となる。やがてその水滴はプレートの表面に綺麗な二つの水溜りをつくり、それ

らは互いに少しずつ近づき張力が働くことよって一つとなり混ざり合うのである。鑑賞者は改めてそれぞれが別々の水源から取水されたことを知り、目前で一つになった水が名もない水に成り変わることを理解するのである。

次に二〇一〇年と二〇一二年、湖国に住む私は更に水に関する表現を発表する機会を与えられた。それはスイスでおこなった二国の別々の水を混合させ融合する表現に対して、自国の地元の固有の水をめぐる表現へと展開する。

四方を山々に囲まれ、真ん中に大湖をつくる近江（滋賀）の水源を探り出し、それらを取水し、プレートの上に配置する。球体に凍らしたいくつかの湧水を混合させ、融合した水（全体の水）をつくる作品を計画するに至った。

いよいよ近江の水をめぐるフィールドワークから始めることになるが、地図や観光情報などの資料から調査を開始するが、思った以上に情報が集まりやすいことに気付いた。今日では個人のウェブサイトからの情報が頼りになることも多く、それらを辿りながら実際に現地で水を汲んでいると地元の人からの紹介で、現地人のみが知る湧水に巡り会うことにも恵まれた。そこには地域で受け継がれてきた伝承や民俗信仰も一緒に知ることになり、興味深い経験をするようになった。二〇一〇年三月の時点で八〇カ所、二〇一二年十一月時点で一二〇カ所近くの固有の名を冠した水を確認している。

これを融合させるプロセスを「全体—水（近江の水源）」と



2007年スイスジュネーブでの展覧会の様子



同展覧会へ出品された作品「全体一水（レマン湖－琵琶湖）」（部分）

帯刀田の水（たいとうだのみず）  
湧水の紹介を始めるに至って、最近縁あってめぐり合えた湧き水を紹介しておきたい。湖北、余呉湖の湖畔に川並という集落がある。その水辺に近いところに湧き出るスポットは存在する。石碑が建っており、そこには「餓鬼に来て仏にかわる清水かな」という句が読み取れる。川並在住の桐畑博夫（きりりはたはくお）さんの話によると、別名「最後の水」と呼ばれ、死期が近づくとこの辺りの人はこの水を飲まれるそうだ。この湧き水から西の山側へ視線をあげると大きな桶がたっており、その根っこ辺りにこの集落の先祖が眠る墓地があるそうだ。その辺りから地中に染み込んだ水がこの場所に湧き出ていることから、

題し、先ずは美術作品として発表することに意識化した。近江の国（滋賀）に、たくさんの固有の名を冠した水が存在し、結果として作品の成立と共に湧水を紹介することになったことから、この固有の水より具体的な起源を探り出す意識へと方向付けられた。ここでは水質や成分の探索調査より、どのようにして現在もなお、存在をあらわにし、受け継がれてきたのか、それらがこの湖国にどれだけ現存するのか、生活、民俗、宗教、交通など様々な要素から迫り、背景を探究することを主たる研究として進めることとした。



2012年滋賀県立近代美術館「自然学」にて出品された作品「全体一水（近江の水源）」

この水を飲むと先祖に会いに行けると信じられているそうである。

名前の由来については、戦国時代、賤ヶ岳の戦いに備えた武士が帯刀をこの水で研いでいたとの伝承が今も伝わり、集落内での呼び名になっているそうだ。

現在、鏡湖と呼ばれる美しい余呉湖の水は北から流れる余呉川より余呉導水路が引かれている様であり、帯刀田の水は余呉湖へ湖畔から湧き出る唯一の水となっている。



帯刀田の水を汲む筆者

## 二、職の水、用の水（しよくのみず、ようのみず）――

近江の水（水源）において、特に名前がついている水や、現在も周囲の人々の手で大事にされている水をこれから紹介していきたい。中には名前がつくに至っていないが、古くから地域の人々によって大切にされ、今日も使われている水も取上げたい。現在、一〇〇カ所近い水を確認しているが、水汲みに出かける度に新たな水にめぐり合うことができる。それらをより適

切に分類するには今後更に多角的な観点から考察する必要があると考えている。

今回は近江の文化を支えてきたものづくりにおいて、水が重要な原料であり、地域産業を発展へともたらし、その豊かさが今日に至るまで持続され活用されている水。

この水を「用いる」ことが職を産み、技をみがき、その豊かさが増えたと考えた。このような水を取上げたい。

### 紺九の川戸（こんくのかわと）

野洲市小篠原の交差点から旧中山道を少し入ったところに近江本藍染「紺九」がある。

創業明治三年から天然の藍染めは、原料確保から染における一つひとつの作業に至るまで、今日もその伝統の技を受け継いでいる。国の重要文化財「紺紙泥華厳経」の修復や桂離宮松琴亭（茶室）の襖の壁紙、市松藍染紙を手がけている。

敷地内には、藍甕（あいがめ）で染める紺屋（こうや）と呼ばれる建物や裏庭には藍を筵（むしろ）と重ね合わせじっくり発行させ、「すくも」をつくる先代のつくった室（むろ）がある。その中庭との間に、なにやらぶくぶくと音を立てる水場、川端のような場所がある。

紺九を受け継ぐ森芳範（もりよし のり）さんとお話を聞くと、そこから湧き出ているのは地下水であり妙光寺山と田中山との山間から流れる水系か野洲川の水系であるかわからないが、そ



紺九の川戸



「すくも」をつくる先代のつくった室（むろ）

の水は藍染めの行程で灰汁をつくる時に用いられ、これが染まり具合をみるのに非常に重要であるとの事、一切薬品類を使わない事から水道水では余分な薬品成分が混入してしまい、あざやかな藍色の仕上がりにならないそうだ。またこの地下水は、染める前の絹糸についた脂分を落とすために炊く際にも使われるそうであり、近江本藍染「紺九」にとって命の水と言つて良いであろう。

「この二、三年で周囲は田畑から住宅、商店が変わつたことや山手の方でちよつと工事があると地下水は数日濁つてしまふなど環境の変化はめまぐるしい。」と芳範さんは話される。

水に限らず天然の原料である藍、筵の調達や木桶や金盥（か

なたらい）などの道具の確保も難しくなっているようだ。このことから本藍染めを持続するには相当厳しい環境になってきていると感じた。明治期からの近代化により、大幅に自然環境が変化し、それに伴う人々の生活様式も変容したことをあらためて感じた。

上下水道が整備される以前は、紺九さんの「かわと」と近所の人々から親しまれ、飲み水として、或は洗ひ物などしながら身近な情報交換の場となつていたようである。

### 七本鎗の水（しちほんやりのみず）

北近江北国街道沿い木之本に、創業四六〇余年の地酒、造り酒屋「七本鎗」の銘柄で知られる「富田酒造」がある。

地酒の「地」にこだわり、日本酒の原料である米は地元の家でとれる既存の品種を使用し、水は奥伊吹山系の伏流水である蔵内の井戸水を使用している。江戸期から続く酒蔵は決して大きくはないが、その水を中心に酒造りの手順が段取りされているように私の目には映つた。

富田酒造十五代目蔵元の富田泰伸（とみたやすのぶ）さんにお話を聞くと、その井戸水から豊富な水が湧き上つているからこそ、酒造りができるのだと、またこの水でないと「七本鎗」ができないと断言されている。

泰伸さんが蔵元になり、「地」にこだわることを改めて見いだし、地元の家とその土地でできる「米」を使う事から更に



江戸期から続く 富田酒造



蔵内で水を汲む筆者

広がり、地元の農業高校で学ぶ高校生がつくるお米を使用した「七本鎗 長農高育ち」を店頭で販売することなど、「原料」「つくり手」「次世代育成」と全てを地元の手でつくり上げる姿勢があらわれている。私がこの造り酒屋の水に着目したのは、その気持ちの源が蔵内の井戸水に他ならないと感じたからである。酒は言うまでもなく「ハレ」も「ケガレ」も人々にとつてその輪の中に必ず存在し、奉られてきた。即ちこの水は現代でいう「メディア」そのものであると私は考える。結果として木之本ひいては伊香郡の町づくりを担ってきた水（地酒）ではなからうか。

泰伸さんはこうも言う。「しかし近年本当に若い人が木之本、

湖北から遠ざかっている。次世代のこの町はどうなるのか？」と危惧されている。

酒造りと町づくりは表裏一体と言って過言ではない。

かなぼう

旧近江町（現米原市）湖岸道路沿いの少し東へ入ったところに世継（よつぎ）という集落がある。周囲は田畑がひらけ、伊吹山が視界に入ってくる。私をはじめその地を訪れたのは二〇一〇年冬、近江の湧き水を探しはじめた頃である。車一台が走れる道を進むと神社があらわれ、気の向くまま歩いていると「ジャバジャバ」という音が聞こえてきた。家一軒分の開けた所に目的の水を発見した。驚くほどの勢いで湧き出ており、小さなプールが二段になった水場には先客が何やら仕事をしていた。私はそつと顔を覗かすと「人間は仕事せなアカン」といきなりその先客（おばあちゃん）が話しかけてこられた。上の段のプールに沢山のカブをおかぶかと浮かせ、脇にあるタワシでカブをこすっている。それが終わると改造乳母車にカブを大事に乗せ、「お先」と一言。その間先客と話をしていたのを覚えていたが、冬の寒い中、一時も手を休める事なく話されていた。先客の話では金属のパイプが地面に突き刺してあるだけで自噴しているとの事、金気が強くプールの淵には何かが付着しており温泉の匂いがした。少し離れた地面に石のプレートがある。読むと「水の湧き出ている泉及び洗い場を総称した言葉で、



沢山のカブが浮かぶ



地面に石のプレートがある

この水源は遠く霊仙山に発すると言われる。深さは地下百米ほどあり、鉄分を含むため茶の湯には適さない：平成八年十月「淡海文化」とある。しばらくして先程の女性が忘れ物をしたのか戻って来られた。そして一言「あんたらはこの水飲んだらお腹こわすぞ！」と。

近江には今日も伝統の職や技、労働と共にこのように水が受け継がれている。この水が職を産み文化を受け継いできたのであろう。先述したように昨今これらを持続するには難しい状況になってきているようだ。

目前の利便性を追求する豊かさの時代から、職と技と水が無理なく持続できる環境が我々の求める豊かさではなかるうか。

### 三、暮しの水、近い水(くらしのみず、ちかのみず)――

私水を採し出す切掛けとなり、最も感覚を研ぎすます要因の一つである水にせまりたいと思います。

今日の生活において「水道の水」は蛇口をひねると流れ出し、しめると止まる。この当たり前と思っている水は一体何処から来たのだろうか、私はこの問いに直ぐに答える事は出来ない。どこか「遠く」で浄水され、地中の管を通って来ているのである。

この問いに対する答えが直ぐにでる水、自分の居場所から「近い」場所に水源があり、今日においても昔と何ら変わらない「暮らし」の水を見て行きたい。

#### 針江の生水(はりえのしょうず)

高島市新旭の針江(はりえ)地区は集落一体が湧水群となっている。そこは北西に比良山系を望み、その北側を尾根伝いに大きく弧を描きびわ湖へと注がれる安曇川の最下流域に位置している。この周辺は名も無い自噴水がいたるところで湧き出し、びわ湖の周囲において最も多く水が湧き出ている地域である。

中でも針江に湧き出る水は透き通っており、とても美しい。私が言うまでもないが、地域の方に手渡された竹筒の器に水を汲み、一口飲むとあらためてそのおいしさ、まろやかさを実感する。不思議な事に、ここから一集落湖岸へあるいは山側へ行

くとこのような水は湧き出ていないようであり、何かこの場所が神域めいたものを感じざるを得ない。針江ではこの水を生水（しょうず）と呼んでおりまさに「生きる水」なのである。

この地域の元漁師、田中三五郎（たなかさんごろう）さんのお家に伺い、お話を聞く事ができた。玄関を入ると土間になっており旧家の佇まいが今に残っている。あたりは薄暗く、前に進むと右側へ一段下がるつくりになっている。辿り着くとそこは眩しく、キラキラと揺らめく光に満ちている。直径一メートルほどの壺池に水が注がれその下方へもう一段下がったところに三メートル四方の囲いがある。そこには口をばくばくした鯉が数匹おり、どうやらこの空間は外と一体となっている事に気付く。これが内川端（うちかばた）である。

三五郎さんが「ある日この鯉、何故か元気が無いんや。なんかいつもと違うもん」がながれてきたんやろなあ」と話された。同行した学生はその言葉にドキッとしたようである。いつもと違うもんを意味する物が環境に不適合なものであることはすぐに想像はついたが、三五郎さんが日々の自然環境の変化に敏感である事がじわじわ伝わって来た。鯉と共存する事により周囲（近く）で何が起きているかを未然に感じ取っていたのである。そのことは私たちの生活の水があまりにも遠いところから来ていることに気付かされることとなった。

我々の自然に対する危機感はいつも情報の中にある。「〇〇の数値が空気中に××あり、身体に直ちに影響を及ぼさない。」

などと言った言葉にリアリティーを感じている。我々は数値や理論上で表される文明の力が、自然の脅威と対峙できるのであるろうか。

ここには自然から贈与される恵みと自然の変化を感じ取る力が暮しの中に息づいていると感じた。



針江の生水 内川端の鯉とたわむれる学生をそと見守る三五郎さん



針江の生水 内川端の外側は水路とつながっている。

### 蛭谷の湧水（ひるだにのゆうすい）

八日市（東近江市）から伊勢の国（三重県）へと抜ける八風街道を走り、永源寺ダムをこえ更に進むと小椋谷六ヶ畑と呼ばれる地域がある。その一つ黄和田あたりから北側へ入ったところに古くは茶所として知られる政所（まんどころ）がある。まだ山奥へ進むと蛭谷（ひるだに）と呼ばれる集落にでる。現在

では七戸くらい小さな集落であるが隣の集落、君ヶ畑（きみがた）と並んで生業を「木地師」とする歴史と伝承が色濃く残っている。

この地にはじめて訪れたのは二〇〇九年の夏である。暑い盛りに木地師の里をうろろしていると「チヨロチヨロ」という音が聞こえ、その音源に誘われるように近寄って行くと音源ならぬ水源を発見した。山の斜面に重なるように集落が立ち並んでおり、自然石を積んだ石垣はこの集落をしつかりと支えている。水源は崖から連なるその石垣の間から溢れ出ており、その水をうまくパイプにつなげ一旦貯水槽に貯めている。それを日差しの良い場所まで引き、皆が集まる水場が設けられていた。

二〇一二年初夏に、木地師の伝承を取材する機会が訪れ、蛭谷在住の小椋正美（おぐらまさみ）さんにお話を伺った。その時に水についてもお話を聞く事ができた。「私が小さい頃から絶えることなく水が出ており、この地域の生活の水である事は言うまでもなく、生まれる前からずっと湧き出ている水である。」と話された。

更に私はお話の最中、気になったことがある。それは丁寧にお茶の用意をされていたことだ。お茶の葉を急須にいれ、湯を湯のみにいれてから随分と時間をかけ、またそれを湯のみから急須に移し、ゆっくりとお茶を出していただいたことである。

お茶の香と味は非常に印象深いものであり、文章では到底伝える事が出来ない。その手順も形式張ったのではなく、自然に

お話しされながら入れていただいた事を記憶している。後からお茶の話も聞くと、「この辺りでは皆、自分の家に茶畑があり、そこでとれるお茶を飲むのが習わしだ。」と話された。この小椋谷では生業を支えた木（木地）とお茶は自然の恵みであり、神であり、生活と一体化していることの現れである事を感じた次第である。

我々はイギリスやインドの輸入紅茶、或いは宇治や静岡の玉露などを専門店で購入し、お茶を楽しんでいるが、ここにも「近い水、茶」の差を感じずにはいられなかった。

最後に蛇足であるが蛭谷の一つ下流の集落、政所が「宇治は茶所、茶は政所」とうたわれたのは茶が生活の一部であった事は



蛭谷の湧水 石垣の連なる集落にある水場



蛭谷の湧水 斜面にある水場

当然の事、途切れる事の無いこの湧き水とのマッチングが持続されてきたからではなからうか。

### エンコ（えんこ）

瀬田の唐橋東詰から北へ少し歩くと平屋の一軒家が軒を連ねる懐かしい昭和の空気が漂う地区がある。大津市瀬田一丁目付近頃その枯渇していた湧き水が復活し不思議な程に溢れ出ているという知らせを聞いた。早速、まちづくり住民グループの村田譲（むらたゆたか）さんと連絡をとり、お話を聞かせていただいた。

前回紹介した米原市世継地区の「かなぼう」と姿形がよく似ている。湧き水は上下二つの水槽にためられ上の水槽は飲用、下の水槽は瀬田川で捕った魚を生け簀（す）代わりに入れたり洗濯をしたり、昭和三〇年代頃までは近所の住人と共同で使っていたと聞く。なぜその湧き水が再び湧き上ったかであるが、最近、隣接する大手家電メーカーの工場が撤退したことで地下水を使わなくなったことが大きな原因ではなからうかと話される。

工場は発展と共に地下水をたくさん汲み上げ、その使用量が増えるのと、同時に上水道が整備された事で周辺住民は「エンコ」を次第に使用しなくなったのであろう。

近年我々の生活を豊かにし、日本の近代化を担って来た大手家電メーカーの撤退や規模縮小、吸収合併の話を目にする。そ



エンコ 現存する上下二層式の遺構



エンコ 最近復活した湧水を汲む筆者

れは高度情報化社会の隆盛が一段落し、コミュニケーションツールなど多くの製品を世に送り出す利便性を追求して来た時代から、人間同士が向き合って対話する時代に変化して来たのではないだろうか。ここ瀬田一丁目では「瀬田唐橋まちづくりの会」が発足し、八カ所あった「エンコ」を復元する計画があるようだ。「まちの宝として郷土史の伝承や防災面でも活用していきたい。」という思いを村田さんは話されていた。

これから我々が目指す本当の豊かさとは、となり近所の方々と水場を囲んで対話をする。そして、いざという非常時に助け合える関係でいられることではなからうか。

## 四、道端の水、巡りあう水

(みちばたのみず、めぐりあうみず)

地図を片手に目的地に向かって水を探し出す途中、ふとした切掛けで巡り会うことになった水、あるいは探しながらも水場が発見できず通り過ぎてしまうような存在の水を取上げます。

湧き水を探すには事前の準備が重要である。予め地図と睨み合い、「だいたいこの辺やろう!」とつぶやき、その場所を想像しながら地図に印を入れて行くのであるが、何回かめぐっているうちに、概ね水場の条件が見えてくるものである。

社寺や史跡の中にある場合は案内がきちんとされている。主要な街道沿いにある場合は東屋が設置されるなど、立派な表札が建っている。県内のエリアだと一日八カ所くらい回る事が出来れば、上出来である。

しかし、そう簡単に行かないのが、湧き水めぐりの面白いところであり、そもそも地元の人々だけが知っている水場を訪ねるのだから当然のことである。私のようなよそ者がその生活圏に入り込み、湧き水が見つからないとなると、周辺をウロウロする事になるので段々気が引けてきて、悪い気がしてくるのは当然のことだ。

このような状況に陥った時に毎回「水」をいただくことの意味を考えるのである。水は生命体にとって不可欠であることは当然の事、その背景にある地域の「結」の水であるということ

だ。そんなことを思いながら柄杓とボトルを持って歩いていると「こっちやで!」と近所の方の声がして、とっくに通り過ぎて見落とした「水」にめぐり会えるのである。

今回はそのような、派手な存在観はないが、その周囲の地元息づく水に迫りたい。

## 胡桃谷の名水(くるみだにのめいすい)

長浜市余呉町、上丹生(かみにう)から菅並(すがなみ)を走る県道285号の脇からその水は突如湧き出ている。県道沿いには蛇行する高時川、東の峰には横山岳、迎いには七七頭ヶ岳(ななづがたけ)を仰ぎ見ることが出来。何の変哲もない道路脇のコンクリートの土手のパイプに導水してある。そこにペットボトルの先を差込み、絶えず水が出ているのである。道路脇の側溝にはステップも設置しており、取水口の上に誰かの手書きであろうか、木製の立派な表札が掲げているのだ。「この名水は古来より湧きし、生命の源となる名水です。付近を清浄に!! 胡桃谷の名水」と記されていた。

私は二〇一〇年の冬と二〇一二年の初夏に二度訪れ汲水したが二度とも通り過ぎていた。車で二回三回と前を走つてようやく辿り着くのである。更にこの県道285号の先、菅並方面には古刹、塩谷山・洞寿院(えんこくざん・とうじゅいん)という曹洞宗のお寺がある。その山門の脇に山側から水が出ており「みんなの塩谷の水」も同時に立ち寄ることになっている。こ

ちらも同様手書きの木製の表札が立っているが、詳しくは後述したい。



胡桃谷の名水 路側帯ぎりぎりまで水を汲む筆者



胡桃谷の名水

### 栃生の水（とちうのみず）

大津と京都の県境、途中から国道367号を福井方面へ走り、高島市に入って直ぐのところ、朽木栃生という地がある。ここも道路脇の斜面側に水飲み場が設けられており、取水口の横にはお地藏様が祭られている。比良山系の最高峰、武奈ヶ岳を南東方向に仰ぎ、国道と並走するように安曇川が流れていることから、比良山系に染み込んだ水が安曇川へと流れ込んでいるのであると想像がつく。おそらくこの辺はたくさんこのような水が出ているのであろう。



栃生の水 山側から湧き出る水を汲む筆者



栃生の水 道路脇の地藏の横に水場がある

以前ここを通り、気になって車を止め、水を汲んでみた。偶然地元の方の方があらわれ、「わしらがこの水を汲めるようにしたんや」と話しかけられた。ここは側道が少し広めにとられてあり、気をつけて見ていると比較的気付きやすい水場になっている。私が訪れた時は表札などで名前を示すものはないが、ここも地元の方が掃除をされているようで、通る度に水汲みに来る人が増えているように思われる。

偶然みつけた水場であるが、自然の恵みに対する人間の思いは高まって来ているのだろうか、もしかしたら名前がつけられ表札が立てられているかもしれないと、ふと考えた。

白清水（しらしよず）

米原市（旧山東町）のJＲ柏原駅近く、国道21号柏原東交差点から北に入り踏切をこえた小道の脇の山裾にその水場はひっそりと佇んでいる。何回か私も訪れたが水を汲んでいる人と出くわしたことは一度もない。その理由は湧き水の水源をみれば一目瞭然、水は枯れてはいないが非常に少なく、手を洗ったりするほど勢い良く湧き出ているとは言えない。

しかし、ここは周囲の整備がなされた上、表札がしっかりと立てられ、伝説を受け継ぐ名前がつけられている。表札には「白清水（しらしよず） 小さな泉で、古くより白清水または玉の井と呼ばれています。『古事記』に、倭建命（やまとたけるのみこと）が伊吹山の神に悩まされ、この泉で正気づいたとあり、また、中世仏教説話『小栗判官照手姫（おぐりはんがんとてひめ）』に、姫の白粉（おしろい）で清水（しみず）が白く濁ったことから白清水というようになったとあります。平成八年三月 山東町教育委員会」と記されている。

もう少し調べてみると国道21号は旧中山道であり、南西方向に柏原宿があります。東西約一・五キロにおよぶ宿場は中山道の中でも大規模な宿場町であり三四四を数える軒が並んでいたと伝わっている。また伊吹もぐさの産地でもあり、旅人で繁盛したことがうかがえる。

二〇〇二年に制定されたまちづくり条例「歴史的・文化的景観または、自然景観の形成のための整備等が必要な地区」とし

て指定を受け、二〇〇六年には米原市の柏原地区環境整備事業において白清水の周辺も整備されているようだ。  
一見、道端のなんの変哲も無い湧水と思いがちだが、思わぬ大物との巡り合せであった。



白清水 少ない湧出量の水を丁寧に汲む



白清水 立派な表札が立つ

岩間の水（いわまのみず）

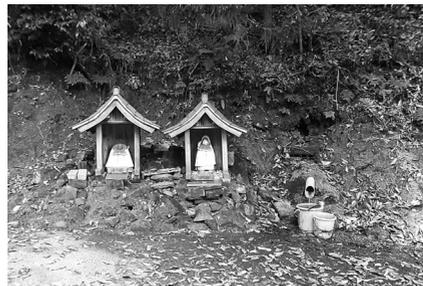
西国巡礼三十三所観音霊場第十二番札所、岩間寺から蛇行する参道を少し下山したところに、祠が二つ並んで建っておりその脇から勢いよく湧き出る水がある。急な坂道だが、曲がり道の少し奥まった場所に取水口があるため、比較的足を止め易く、いつも誰かが水を汲んでいるのを目にする。

本当のお目当ては岩間寺（岩間山正法寺）にある「雷神爪堀

の湧水」であり、この湧水も伝説を持つ水であるが詳しくは後述することにする。巡礼の道を車で逆走することになるが岩間寺へと登る途中、突然目に飛び込んで来た水場である。音羽山系岩間山は日本海側から複数の断層が比叡山を経て複雑に交差しているとのことだ。永い年月を経て沢山の層を通過して溜まった伏流水が地中に溜まっているようである。

岩間山は京都と近江をまたぎ、このように永い年月をかけ豊富な水を潤して来たことを思うと日本の文化の源流がここにあるのではないかと考えずにはいられない。小学生の頃、京都伏見で育った私は父親に連れられ、伏見醍醐の上醍醐寺（第十一番札所）から岩間寺まで歩いたことを思い出した。巡礼者の多くもおそらくこの水で喉の乾きを潤したにちがいないであろう。また伏見はその名のとおり伏水が語源であり、伏見桃山の御香宮（こうこう）にある御香水（こうすい）が有名である。今となつては伏見も多くの湧水（伏流水）に名称がつけられ観光用湧水マップがつけられる程、町のアピールになつていようだ。偶然出会った水であるが、今日「近江の水をめぐり」ながら私の育った町と偶然繋がった「岩間の水」を紹介することになつた。

今回紹介した「栃生の水」と「岩間の水」は正しい名称を知ることが出来なかつたため仮につけている。本当の名称をご存知の方、或いは地域での呼び名をご存知の方はご教示いただければ幸いです。



岩間の水 祠のとなりから湧き出る



岩間の水 突き刺してあるパイプの奥からも湧き出ている

## 五、人物の水、伝説の水

### （じんぶつのみず、でんせつのみず）

歴史に名を刻んだ人物ゆかりの水、あるいはその水場が今日に至まで耐えることなく湧き出流ことにより伝説が場をつくつた。そんな湧き水に迫ってみる。

湧き水を探すにあたって、比較的簡単に情報が見つかり且つ、現場でも周辺をウロウロと探しまわることはそれほどなく、あっさり見つけることの出来る水が今回迫る水だ。そもそも有名な人に所以のある水は、その名前が大きい事から庶民に取っては覚えやすく、伝説も時代時代の様々脚色がつき、伝説が伝説

を呼ぶことにより一層その場が名所となったことは容易に想像がつく。

周辺環境も整備が行き届き、必ず案内の表札が設置され、そこには湧き水の由緒がしっかりと記載されている。ここまでくると観光名所のひとつになり、語り部と呼ばれる人々が積極的に紹介されるようになってくるのである。最近のスズリチュアルスポーツブームもあいまって、街の案内絵地図にイラスト入りで載るほどであり、湧き水の名称そのものが名所になりつつある。

話は少し変わるが、私は湧き水を汲む時に、必ず写真撮影を行う。その決まり事は次の三点だ。先ずはその湧き出る様子を借景となる景色を入れ、どのような環境で湧き出ているかを撮影する。これはこの環境が今日現在では保たれているが、近い将来その状態が維持されているかわからないからだ。次に私自身が湧き水を汲む様子を同行する助手（その多くは妻、次に少し関心のある学生）に撮影をお願いする。これは当然のことながら確実に自分自身がその湧き水を汲水（きつすい）していることとの証明として。最後に取水口のアップ、或は湧き出る水面の様子を撮影する。これも一番目と同じく、湧水量や透明度、その豊かさを記録しておく必要があると考えるからである。

また昨今の環境の異変による予期せぬ災害で、いつまでもこの状態が持続するとは限らないことが写真撮影を必ず行うことにつながっている。

話は戻して今回迫る湧き水は前述したように、歴史に名を刻んだ人物ゆかりの水であることから、周辺整備が行き届いており、写真撮影が比較的容易、足場がしっかりと確保でき、こだわった被写体のイメージをつくるのが可能な比較的優等生のような水に迫ってみたい。

#### 梅の川（うめのかわ） 織田信長

近江八幡市安土町、JR安土駅をびわ湖側へ下車してすぐに西側へ歩くと常楽寺大堂（じょうらくじだいどう）と呼ばれる地区に出る。道幅は狭く碁盤の目状に路が延びている事から城下町や寺内町として古くから、この町が栄えたことが想像つく。所々曲がり角に木製で渋い感じの小さい案内板が立っている。よく見ると「梅の川↓この先」と書かれている。その路地を曲がりしばらく歩くと「コボッコボツ」と小さい音がした。住宅地の一角にその水場は設けられており、道路から一段下がったところから湧き出ている。湧水量は少ないようである。石段で囲われ、その上は竹垣が設けられており、きちんとした水場としての存在を放っている。脇には表札が設置され、「梅の川」この由来は、織田信長の家臣武井夕庵が難波より珍茶を求めて来、此処の水にてお茶を入れ信長に献じたところ信長非常に喜び、其の後お茶の湯には常にこの湧水を使用したと言われている。」と記されていた。

他にもこの西側、直ぐ裏手に当たるところに音堂川（おとん



梅の川 音の出る方へ柄杓を入れ汲水する筆者



梅の川 立派な由緒書きが脇に立つ

どがわ) 湧水と呼ばれる湧水と、びわ湖側へ少し歩いたところに北川湧水(喜多川とも)がある。これらは梅の川と対象的に湧水量が非常に多く豊かである。たくさんの鯉が泳いでおり、新旭の針江の生水と同様、浄化作用に一役かっているようだ。二〇一〇年の冬に北川湧水を訪れた時には近所の農家の方であるうか、たく育ったネギをゴシゴシ洗っておられたのが印象的だった。

ここからもう少し北上すると常浜という港公園に出る。ここは室町時代、観音寺城の外港として栄え、明治初期まで蒸気船の寄港地として活気にあふれていたようだ。更に北上すると西の湖が広がり、この湧水郡の水が注がれ太湖へとつながっている。

なのだ。

戦国の世に、天下を目前にした信長が拠点安土においたのは、交通の要衝であったことは言うまでもないが、豊かな水に恵まれていたことも重要な要因であったのではなからうか。

### 三尺の泉(さんじゃくのいずみ) 中江藤樹

高島市安曇川町、国道161号線を大津より北上し、白鬚神社、大溝城跡をこえ、しばらくすると、右手に藤樹の里文化芸術会館が見えてくる。その交差点を右折したところに上小川と呼ばれる集落にあたる。そこから少し南下したところに良知館、その隣に藤樹書院跡が見えてくる。ここの門を入ったところに「チヨロチヨロ」と清らかな音を立て湧き出ているのがわかる。これが三尺の泉。掘り抜き井戸が回収され以前のように地下水の湧出が復活したそう。取水口は綺麗に整理され、庭や植栽の手入れが丁寧にいきとどいており、清々しい気持ちになる。横には飲料用のコップが備え付けてある。当然ここにもしつかり案内板が設けられており、「三尺の泉 この書院の掘抜井戸が改修され、その時以来、こんこんと清水が湧き出すようになりました。美しい湧水が見事であったため、蕃山の「万里の海は一夫に飲みしむる事あたわず、三尺の泉は三軍の渴これは、大海の渴きをいやすことは出来ないが、三尺こそこの井戸でも万人をいやすことができる、という意味です。」と記載されていた。



三尺の泉 整備の行き届いた庭で水を汲む筆者



三尺の泉 藤樹書院跡

中江藤樹は、江戸初期における近江の国小川村出身の陽明学者。二七歳で母への孝行と健康上の理由により近江に戻り私塾を開く。屋敷に藤があったことから、門下生から藤樹と呼ばれるようになる。藤樹が四一歳で亡くなる半年前に「藤樹書院」を開き、門人の教育拠点とした。その説く所は身分の上下をこえた平等思想に特徴があり、武士だけでなく商人まで広く浸透し「近江聖人」と呼ばれた。代表的な門人として熊沢蕃山、淵岡山、中川謙叔などがある。

この周辺は道沿いに水路が多くみられ、無名の湧き水が所々から湧いているようである。比良比叡の山々からしみこんだ水が伏流水となり、安曇川水系となっているのである。水の豊

かな場所には豊かな人材が育ち、後世に受け継がれるのだと感じつつ、水を汲んだ。

#### 若草清水（わかきしみず） 蒲生氏郷

近江商人の町、蒲生郡日野町、ここは綿向山を眺め、その里宮として馬見岡綿向神社を中心とする集落がある。伊勢、京の中継点でもあり、全国から参詣する人々の行き交う場所であったことは言うまでもない。町の中心部、村井の町並みをすぎたところに、河川の堤防沿いを予感するような開けた場所があらわれた。その目前に地藏堂が建っており、すぐ下には整備の行き届いた美しい水場がある。私が訪れたときは何か箱の形をした籠が取水口近くにおいてあり、その中をそっと覗くと小さな魚が泳いでいた。水面から水底がくつきりと見え、非常に綺麗である。これが「若草清水」と呼ばれる湧き水だ。

千利休の七哲の一人だった日野城主蒲生氏郷は茶の湯にこの水を使ったという由緒ある清水だそう。この泉のそばには趣のある石の句碑がある。ひとつは天明年間に画家の島崎雲圃が清水のいわれを書いた碑を建てたそう。もうひとつの石には歌が刻まれていた。詠むと「たちよれば やがて心の底すみて むすぶにあかね 若草の水」とある。これは慶応二年（一八六六）に河原田町の谷孝道が若草清水をよんだ歌碑を建てたということだ。この他、日野の三名水と呼ばれる湧き水がここにはあるようだ。ひとつは東へ五分程歩いたところに興敬寺がある。そ

の南側の脇を入ると土手になっており、落葉に埋もれるかのごとくそこから水が湧いている「落葉の清水」。もう一つは「清水脇の清水」という水が湧いているそうだが今は埋没してしまい涸れてしまったようだ。

蒲生氏郷が茶の湯を楽しみ、近江商人が栄えた。そして綿向山を仰ぐこの地に人々の繁栄が無いはずがないのだ。そこに湧き水があるのは当然のことだ。と、あらためて感じながら柄杓で水を汲んだのである。



若草清水 趣のある石碑の前で水を汲む筆者



若草清水 地蔵堂横の石段を下りたところに水場がある

### 弘法の水（こうぼうのみず）弘法大師

弘法大師の名を借りた水は全国にたくさんある。代表的なものに広島県福山市赤坂、神奈川県秦野市、愛媛県西条市、石川

県七尾市、福井県越前町、京都市伏見区小栗栖など数多く確認されている。また関係の深い水場は四国や和歌山、大阪、伊勢など数えだすと切りがない程である。

我が国、「近江」にもそれは存在した。湖北木ノ本から北国脇往還を北へ、余呉の集落に差し掛かった坂口というところに、日の登る方向に朱塗りの鳥居が見える。扁額には「大箕山」と書かれている。そこは呉枯ノ峰への登山道であり、菅山寺の参道に当たる。登り始めてしばらくすると、道脇に石仏がたっている。そこで手を合わせ、先を急ぐとまた石仏が現れる。次々と現れ、何かに導かれているようである。峠まで登ると菅山寺へは少し下ることになる。しばらく歩くと大きな二本の櫻の木が迎えてくれた。あたりは鬱蒼と茂る樹林の間に本堂、護摩堂、経堂、鐘楼などが建ち並びかつての繁栄の時代を忍ばせる。「菅山寺」その名の通り、菅原道真が中興したと伝わる古寺である。朱雀池を挟んで向いに建つ近江天満宮とは神仏習合の形態をとっていることがわかる。

さて、話は湧水に戻るが、実はここに訪れること三回目にして始めて取水口を発見することができた。二本の櫻の向こう側に庫裏があり、その脇の石段を少し下りたところに石仏座像を発見した。なんとその足元から大量の水が湧き出していたのである。私はそこでようやく気付いた。坂口集落からここまで導いて来た石像こそ「弘法大師」その人であり、ここに四国八十八箇所霊場の圧縮された姿が展開されていることを。



弘法の水 石像の足下から湧き出る水を汲む筆者



弘法の水 菅山寺の櫟の古木

数えはしなかったがその最終地点が、探し求めていた「弘法の水」であったのである。おそらく明治以前の隆盛を図った時代の遺跡なのである。

現在は、坂口の人たちを中心とした信仰の厚い人々の手で守られているようだ。

先述したように四国、近畿、北陸などの地に、この名を冠した水が多いのは弘法大師の残した足跡と地域の人々の厚い信仰が今日にも受け継がれているのである。水は途切れることのない証明そのものなのである。

## 追記

滋賀県文化振興事業団が発行する「湖国と文化」に二〇一二年十二月より「近江の水をめぐる」と題して近江の湧水を写真と文で紹介する機会をあたえられた。現在まで五回の連載が継続されており、オリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。研究の動機として美術作品制作からはじまる「全体の水、固有の水」、次に近江の手仕事を今に伝える水として、「職の水、用の水」、水道が整備される以前から現在も主たる生活の水として持続する「暮しの水、近い水」、目立たぬ存在ではあるが行き交う人々の潤いとなっている「道端の水、巡りあう水」、歴史に名を残す著名人と所以を残す「人物の水、伝説の水」に焦点をあて、その水の背景に迫ってみた。先述したが湧水の出自に対し、適切に分類するには今後更に多角的な観点から考察する必要があるであろう。しかし、美術家である私が今日の生活や現実性の面から迫り、体感し表現することから探究することが重要だと考える。今後も新たな切り口を探しつつ水の出自について迫って行きたい。

安土城書院の狩野永徳筆「三上山図」

小寄  
善通

Title :

“Mikamiyama-zu” painted in the Shoin at Azuchi Castle by Kano Eitoku

Summary :

This paper is a study of the Wall Paintings “Mikamiyama-zu” painted in the Shoin at Azuchi Castle by Kano Eitoku.

小奇 善通

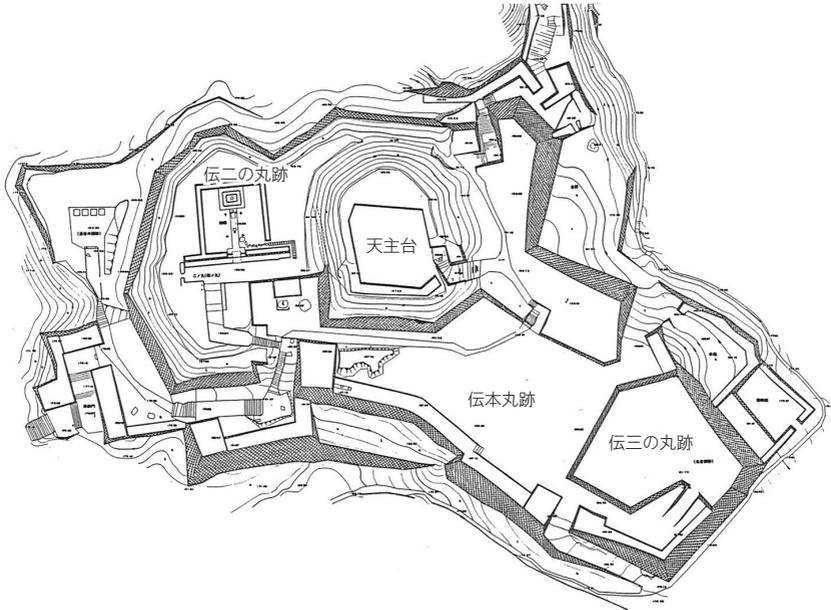
天正十年（一五八二）六月十四日、安土城は山上の天主、本丸を中心とする織田信長の居城部分および安土山下の町々を焼失した。本格的な天主を有する織田信長の居城であったということでは注目度が高い一方、天正四年の築城開始からたった六年後の炎上ということで、安土城には不明な点があまりに多い。ここでは安土城障壁画のうち、『丹青若木集』が記す、狩野永徳筆「三上山図」が描かれた書院の位置について考察を進めてみたい。

## 第一章 安土城の御殿と襖絵

まず、安土城に存在した諸御殿について、『信長公記』から関連部分を抜粋してみよう。天正四年の築城開始以降、御殿関係の記事として最初に出てくるのが、次の天正六年正月朔日条である。信長が完成した御殿を観覧させるために家臣を御殿御座所へ集めた記事である。

（前略） 其後御殿御座所迄皆見せさせられ、三国の名所を狩野永徳に仰付けられ、濃絵に移され、（後略）

これによると、天正六年正月の段階で、御殿御座所が完成して



安土城跡 平面図

おり、そこには永徳の描いた濃彩の三国名所図が描かれていたことが判明する。この三国については『信長公記』の他の箇所  
の記述から尾張、美濃、近江とする説（註）をはじめ、山城、  
近江、大和（あるいは摂津）とする説や、日本、中国、天竺（あ  
るいは朝鮮）など海外の諸国を想定する大胆な説も古くから唱  
えられている。

このあと御殿の記事が確認されるのは、次の天正十年正月朔  
日条である。

（前略）おもての御門より三の御門の内、御殿主の下、御  
白洲まで祇候仕り、爰にて面々御詞を加へられ、（中略）  
各階道をあがり、御座敷の内へめされ、忝くも御幸の御間  
拝見なさせられ候なり。御馬廻・甲賀衆など御白洲へめさ  
れ、暫時逗留の処、御白洲にて皆々ひゑ候はんの間、南殿  
へ罷上り、江雲寺御殿を見物仕候へと上意にて、拝見申候  
なり。

御座敷惣金、間毎に狩野永徳仰付けられ、色々様々あらゆ  
る所の写絵筆に尽くさせられ、其上四方の景気、山海・田  
圃・郷里、言語道断面白き地景申すに計りなし。是より御  
廊下続きに参り、御幸の御間拝見仕候へと御錠にて、かけ  
まくも忝き、一天君・万乗の主の御座御殿へ召上せられ、  
拝濫に及ぶ事、有難く、誠に生前の思ひ出なり。御廊下よ  
り御幸の御間、元来檜皮葺、金物日に光り、殿中悉く惣金  
なり。何れも四方御張付け、地を金に置上げなり。金具所

は悉く黄金を以て仰付けられ、斜粉をつかせ、唐草を地ほりに、天井は組入れ、上もか、やき下も輝き、心も詞も及ばれず。御畳、備後表、上々に青目なり。高麗縁、雲絹縁、正面より二間の奥に、皇居の間と覚しくて、御簾の内に一段高く、金を以て瑩立、光耀き、衣香当を撥四方に薫じ、御結構の所あり。東へ続ひて御座敷、幾間もこれあり。爰には御張付、惣金の上に色絵に様々か、せられ、御幸の御間拜見の後、初めて参り候御白洲へ罷下り候（後略）

これは、天正十年正月に城完成のお披露目として家臣を呼び寄せ、御座敷内の御幸の間やその中にある皇居の間、南殿や江雲寺御殿を観覧させた記事である。天皇の行幸のために建てられたとする御幸の間や皇居の間は金碧画で彩られ、そこから廊下続きに接する江雲寺御殿の諸室もやはり金碧画であり、そこには狩野永徳による名所絵の数々が描かれていたとされる。

この間、『信長公記』によると、天正七年五月十一日には信長は完成した天主に移り、天正九年九月八日には築城に関わった諸職人に褒美として小袖を与えている。この中には障壁面制作を担当した狩野永徳、光信父子の名も記される。

次に、宣教師ルイス・フロイスの記述になる『フロイス日本史』の記事をみてみよう。天正九年三月にあたる記事<sup>(註2)</sup>に、信長は、この城の一つの側に廊下で互いに続いた、自分の邸とは別の宮殿を造営したが、それは彼の（邸）よりもはるかに入念、かつ華美に造られていた

とある。『信長公記』の記事と合わせ読むと、天正六年に家臣に披露した御殿御座所が彼の邸で、「廊下で互いに続いた、自分の邸とは別の宮殿」が天正十年に家臣に披露した御殿群であると想定できる。濃彩の障壁画であった御殿御座所に対し、御殿群にはより華麗な金碧画が描かれていたとする『信長公記』の記載も、この『フロイス日本史』の記事と符合する。

ところで、これらの御殿は安土山上のどこに建てられていたのであろうか。ここで重要な示唆を与えてくれるのが、先の『フロイス日本史』の記事のなかの「この城の一つの側に」という文言である。安土山上の地形をみると、建築可能な平坦地は東西にやや細長く、そのほぼ中心に天主台が築かれている。このことから考えると、『フロイス日本史』では天主を中心に建物配置が記述されているものと判断できる。「一つの側」という文言をわざわざ用いているということは、つまり、信長邸と、それとは別の宮殿とは天主を挟んだ異なる側に配置されていたことを意味しよう。近年の発掘調査によると、天主東側の伝本丸御殿跡から、御所の清涼殿に匹敵する遺構が確認されている<sup>(註3)</sup>。また、敷地の広さから見ても、廊下でつながれた諸御殿を配置できるのは、天主東側の伝本丸跡及び伝三の丸跡以外にはありえない。

つまり、安土の山上には天主を中央にして東側に御幸の間や皇居の間を擁する御殿と南殿、江雲寺御殿、西側の伝二の丸跡に信長の邸である御殿御座所が存在したことになる。現在、天

主台西側には信長の御廟があるため発掘調査は実施されていないが、そこにはまさしく信長の御殿御座所があったことになる。

## 第二章 狩野永徳の三上山図

狩野一溪重良（一五九九～一六六二）が記した『丹青若木集』

の狩野永徳の項の記事には、永徳が描いた安土城の襖絵に関する興味深い記述が含まれている。現存する最も古い写本は幕末期のもので写し誤りも多く、文意が辿りにくい所もある。次に掲げた全文は国会図書館本による。

源四郎尚信者松永法眼之家嫡所絵強厚而筆力揺動起飯廻絶非所逮言舌氣韻生動出于天成自早年丹青超越于父遠甚以是狩野中興為名手矣平信長卿近州安土山令築一城狩野一家図繪之其至于書院中鑑監三上山事專令造此画図者命源四郎尚信一之間者模写彼山昼終日詠覽真山夜者戸障子昼図有之半開詠則真山尾崎障子之絵書繼之信長卿感深之擢法印号永徳近世神品昼工是也惜哉四十有七歳而慶長二丁酉九月十四日死

これについては辻惟雄氏の研究（註4）があり、要約すると次のような内容であろうと解釈されている。

安土城の書院一の間障壁画は織田信長が狩野永徳に命じたもので、三上山が描かれている。昼間、戸障子を開ければ実際の三上山を見ることができ、夜、戸障子を閉じれば画図の三上山

を鑑賞できる。昼間、半ば戸障子を開ければ実際の三上山が見え、画図がそれをつないで唐崎あたりまでの景観を楽しむことができる。

安土山から見える三上山から唐崎あたりにかけての景観をパノラミックに描くだけでなく、実景とオーバーラップさせるという奇抜な手法であったようである。

永徳と信長との出会いは、これ以前、上杉家本洛中洛外図を信長が入手した時に遡ろう。この時信長は永徳の描く現実感豊かなパノラミックな名所景観図にいたく共感したに違いない。先に記した御殿御座所や江雲寺御殿に数々の名所絵を描かせていることや安土城の書院ではそれをさらに進めて虚と実を交錯させる仕掛けを工夫したのである。永徳の作風は一般的にはモチーフを豪快かつ巨大に描くことで知られているが、安土城築城当時はそれとはまったく違った点で信長から評価を受けていたように考えられる。

ところで、この三上山が描かれた書院とは安土山上の諸御殿のどの建物を指すのであろうか。これについても既に前述の辻氏が天主西側にあつたであろう建物とする見解（註5）を提出されている。当時の安土山上の建物配置を想定して、三上山を眺めることが可能な場所、という観点から導かれた結論である。現在でも安土山に登ると天主台の石垣上から南西の方角に三上山を望むことができるが、当時の安土山上主郭部において、天

主以外で三上山が眺められる場所は、現在信長の御廟のある天主台西側以外、やはり考えられないであろう。その場所にあった建物とは先に確認したとおり、信長の日常の居所である御殿御座所であった。そしてそこには『信長公記』によると永徳による濃彩の三国名所図が描かれていたのである。従来の研究では、三上山図が描かれた建物と、三国名所図が描かれた建物は異なるもの、という見解<sup>〔註6〕</sup>が一般的であるが、『信長公記』と『フロイス日本史』の記載や、三上山の眺望状況を勘案すれば、三上山図が描かれた障壁画は三国名所図の内の一図ということになる。書院（御殿御座所）一の間が三上山図を含む近江名所図であったということになると、他の二国がそれに続く二の間、三の間に描かれていたことになる。その二つの国とは、既に信長の支配下にあった美濃、尾張とも考えられるし、あるいは天下統一に際しての重要拠点である京、大坂であったと考えるとさらに興味深い。

### 第三章 狩野派による近江名所図

近江を描いた最古の絵画作例としては平安時代末期の国宝源氏物語絵巻の関屋がある。画面上方に琵琶湖が描かれる。このあと中世の絵巻物にも琵琶湖が描かれる作例が認められるが、パノラミックに景観を捉える作例においては、そのいずれもが南方あるいは陸側から琵琶湖を捉えている。すなわち、東海道

からの視点である。先に見た永徳の三上山図を含む近江名所図はその点異例である。北方から手前に琵琶湖を介して南近江を捉えていたと考えられるからである。永徳による新図様であったわけであるが、何よりも信長の安土城築城によって得られた新たな視点ということができよう。

既に失われてしまった安土城御殿御座所に描かれた永徳の近江名所図ではあるが、はたしてどのような図様であったのだろうか。これを知る手がかりとしては、一つには滋賀県立近代美術館が所有する「近江名所図」屏風があげられる。この作品の制作年代はちょうど安土城築城と前後するころと考えられ、作者も狩野永徳あるいはその周辺画人である。三井寺あたりから右方に坂本、堅田、高島あたりまでをやはりパノラミックに描いた濃彩による作例で、画面手前には琵琶湖が描かれている。安土城あたりからの視点と考えると矛盾のない作例である。また、サントリイ美術館が所有する「近江名所図」屏風も時代は下がるものの、やはり琵琶湖南岸を北方から捉えた構図を持ち、三上山や瀬田、大津、唐崎、堅田あたりを描き込んでいる。江戸時代初期の制作であり、金碧画である点は相違するが、左隻左方に安土城と考えられる城跡の石垣が描き込まれている点も興味深い。永徳の描いた近江名所図の図様が粉本として狩野派内に伝来し、それをもとに描かれた可能性も考えられる作例といえよう。

近世に入っても近江を描く絵画は枚挙にいとまがない。近江

八景図が成立するからである。しかしながら、八景に漏れた三上山はその後描かれることが少なくなり、永徳の新図様もやがて狩野派内でも忘れられることとなったようである。

本稿では、安土城の諸御殿の配置を近年の発掘成果を参考にしたうえで、『フロイス日本史』の記事と合わせ検証した。そのうえで、永徳による三上山図の描かれた御殿とその位置の確認を試みた。いずれ現存しない建築と絵画であるが、安土城のイメージの輪郭が少しでも確かなものとなれば幸いである。

## 註

1. 辻惟雄『戦国時代狩野派の研究』（吉川弘文館 平成六年）所収「永徳の三上山真景図について」の補記
2. 『フロイス日本史5』第五章（中央公論社 昭和五三年）
3. 木戸雅寿「よみがえる安土城」歴史文化ライブラリー 一六七 吉川弘文館 平成十五年
4. 辻惟雄「永徳の三上山真景図について」『美術史学』二 昭和五四年
5. 註四論文
6. 武田恒夫『狩野派絵画史』吉川弘文館 平成七年



古式祭礼に見るコミュニティとそこに展開するコミュニケーション

〔大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心に〕

加藤 賢治

## はじめに

現代の地域コミュニティを眺めるとき、村の鎮守の氏神（産土神）を中心とした旧村落地域と、特定の氏神を持たない新興住宅地域に大きく二つに分けることができる。

近世の村落社会は、生老病死全てがそのコミュニティの中で完結していたが、現代の地域コミュニティは、公共の福祉や教育、サービスが充実し、便利になった一方で、地域の繋がりが希薄になった。よって近年発生した自然災害において、その希薄なコミュニティが機能せず、被害を大きくしてしまうことも明らかとなった。

滋賀県は古来、貴族や寺社の荘園が多く存在し、その名残として今もなお宮座の形態をとる産土神を中心とした集落が多く残っている。しかしながら第二次大戦後の急速な経済成長の中で宮座の形態は消滅、あるいは大きく変化してきた。筆者は大津市仰木地区と今堅田地区について調査を行い、宮座の古式祭礼の現状を『村座と祭礼』―滋賀県大津市仰木地区の例―（二〇一〇年近江地方史研究第四四号）、『宮座の祭礼』―今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状―（二〇一二年成

## Title :

Community as Detected in Ancient Festivals and the Resulting Expansion of Communication, Focusing on the Atago-ko and Jizo-ko Festivals of Imakatata 1-Chome, Otsu City.

## Summary :

I examined two ancient festivals, Atago-ko and Jizo-ko, which are carried today, in Imakatata 1-chome and considered their role in the communication of the district.

安造形大学附属近江学研究所紀要第一号)において現状を報告した。同様の調査は、高橋統一「滋賀県の宮座の現況」(一九六九年 東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年表)、小栗栖健治『宮座祭祀の史的研究』(二〇〇五年 岩田書院)などいくつかの滋賀県の集落を舞台とした論文や報告書が発表されている。それらは、その古式祭祀についての中世から近世、あるいは近世から現代にいたる形式の変化やそれらの特異性についての言及が中心であるが、今回の報告では、古式祭祀におけるコミュニケーションとそこに繰り広げられるコミュニケーションに注目したいと考えている。

現在、琵琶湖の西側にある湖西地域や南の湖南地域は、京阪神に近く、そのベッドタウンとして発展し、大型マンションの建設や新興住宅地の積極的な開発が行なわれ、新旧の居住地域が隣接している。旧村落地域では、新興住宅地に見られる新しいコミュニケーションづくりにも関与しながら、古式祭祀を継承する難しさに直面し、新興住宅地においては、古式祭祀の文化的価値に注目し、そのかけがえのない行事に思いを寄せながら、現代の希薄な地域コミュニケーションに嘆いている。

氏神(産土神)を中心とした氏子集団の結束はある程度強く、例えば、どこかの誰が何をしているか、また、その子供がどのような性格で、どんな問題を抱えているのかということも共有しつつ、自然なかたちでその地域独自の善悪の道徳も根付いているように見える。

一方で新興住宅地においても、地域の運動会や市民センターのサークル活動など、種々のコミュニケーションが存在し、それらの活動を通じて情報が交換され、固い絆となっている事例も散見される。しかし、地域コミュニケーションの核となる町内の自治会への加入は強制的でない地域も多くあり、その集団の弱さが読み取れる。

歴史や伝承に支えられた祭祀は、その地域の誇りであり、明快なアイデンティティーである。その意味において、神のもとに平等な村衆が存在し、連綿と続いてきた古式祭祀に敬意を表すコミュニケーションの存在は、今後の社会のあり方について大変重要な指針を示していると考えられないであろうか。

筆者が『宮座の祭祀』(今堅田に伝わる祭祀「野神祭り」に見られる現状)(二〇一二年成安造形大学附属近江学研究所紀要第一号)で報告した大津市今堅田地区は、現在の行政区画で今堅田一丁目、二丁目、三丁目の三つの地域に分かれている。伊豆神田神社は基本的に今堅田地区全体の氏神であるが、氏子として神社の祭祀に関わる人々は、一丁目に住居があるものに限られている。二丁目と三丁目は、新興の住宅街となっており、その住民は氏神として神社を意識しているものの、神社の祭祀に参加することはない。

一丁目においては、西町・仲町・嶋町・南町の四つの地域に分かれ、それぞれの町から氏子総代が出され、講などが盛んに行なわれている。伊豆神田神社の分社である野神神社では中世

から継承されていると伝わる野神講が行なわれていたが、現在は伊豆神田神社の氏子（いわゆる今堅田一丁目住民）がこれを引き継いでいる。これらの伝統行事をまちづくり活かさうとする「今堅田まちづくり委員会」による活動が平成十八年から始まっている。

今回は、平成二五年（二〇一三）八月二四日、今堅田一丁目の地蔵講が行う地蔵盆「地蔵巡り」に参加し、講というコミュニティとそこに展開するコミュニケーションに注目してみたい。

## 第一章 今堅田の愛宕講と地蔵講

### 一 一 今堅田の講

大津市今堅田一丁目にある伊豆神田神社を産土神とする氏子は、そのほとんどが琵琶湖に面した南北に細長い今堅田一丁目（約二〇世帯）に居住し、北から西町（ニシジョウ）四五世帯・仲町（ナカジョウ）十五世帯・嶋町（シマジョウ）一八世帯・南町（ミナミジョウ）四一世帯の四つの地域に分かれている。この地域は近世に、出来島（デケジマ）と呼ばれ、船大工と農業を生業とする村衆が集住した。現在でも、兼業農家と造船業を営む企業がこの地域にみられる。

この地域には、今もなお「地蔵講」と「愛宕講」そして「日待ち」と呼ばれる「講」が行われている。かつては他地域でもみられる伊勢講や行者講などが存在したが現在では無くなって

いる。

これらの講は、当屋にあたる家を中心となって運営される。四つの各地域では二軒ずつ当屋を順番に担当し、地蔵・愛宕の二つの講の当屋となって運営する。最も大きな西町は、先の当屋二軒と今年の当屋二軒、次年の当屋二軒の六軒が講の行事の中心をなう。要するに順番で連続三年間、講の行事に携わることになる。仲町、嶋町、南町は同じく二軒が当屋となり、五〇六軒の家が当屋を補佐し、毎年地蔵盆が終わると当屋と補佐役すべてが入れ替わる。

それとは別に、西町三名、仲町一名、嶋町一名、南町三名の八名〔註2〕が宮総代としてそれぞれの町から選出され、この地域の氏神である伊豆神田神社の例祭を中心に宮座の運営（宮仕事）に関っている。宮総代の任期は三年と決まっている。

愛宕講は本当屋が代表して京都の愛宕山に登り、愛宕権現にお参りをして火伏せの札を持ち帰ることが主な内容となる。かつては一月三日に愛宕山に登り、戻り次第、講中の各家に配布して回ったというが、近年は、雪が積もらない十一月、十二月頃に山に入り、年内中に札を各家に配る習慣になっている。

一月の最終土曜日と日曜日のいずれかの日に各町で年に一回の「日待ち」と呼ばれる講が行われる。かつては一月三十一日と決まっておおり、それぞれの当屋の家で行われていたが、集まる人数が多い町もあるので、二日に分けて今堅田公民館（大津市今堅田一丁目 ※P123地図）で行われるようになった〔註3〕。

平成二六年(二〇一四)の日待ち講は、今堅田公民館にて、一月二五日(土)に西町(公民館二階)と仲町(当屋宅)、二六日(日)に南町(公民館二階)と嶋町(当屋宅)とに別れていずれも午後七時から行われた。各町内の家から男女問わず必ず成人一名が参加することになっている。

講の内容は、午後七時から約二〇分程度、僧侶による読経が行われ、その後、講の会計報告や行事の日程、役員選抜などの決めごとを行う。決めごとの中には、愛宕講や地蔵講として行われる地蔵盆という行事の内容や、当屋の決定、伊豆神田神社の宮総代の選出なども含まれるため、各町内の神仏等の信仰的なコミュニティの決めごととはすべてこの日に決着することになる<sup>〔註4〕</sup>。

読経は、今堅田一丁目にある圓成寺と海蔵寺の僧侶が務める。いずれも曹洞宗の寺院で、公民館の会場では、床の間に掲げられた「天照大皇神」の掛軸と「愛宕大神」のお札の前で、般若心経を唱え、町内の一年間の無病息災、厄難排除などが祈願される。神と仏が一体となった感がある行事である。

## 第二章 地蔵巡り

地蔵講は八月の地蔵縁日(二三日)いわゆる地蔵盆の運営を行う。四つの地域によりそれぞれ異なるが、基本的な形式では各町で管理する石造地蔵菩薩像(以下地蔵尊)を当屋前にきれ

いに飾り付け、地蔵盆当日に行われる「地蔵巡り」に備えるのである。

平成二五年の地蔵盆は、八月二三日(土)に行われた。前日の二二日に準備が行われる。各町の当屋は、仮設の地蔵堂を建て、町が管理する地蔵尊をそこに安置し、飾り付けを行う。地蔵尊への供え物は、米粉でつくった紅白の餅が中心で、琵琶湖のヨシを斜めに切った切り口を使って、餅に菊の花などの模様を押し付け装飾されている。以前は、この餅ばかりであったというが、近年はジュースやビールなどの酒類、市販されている菓子が地蔵尊の前に所せましと並ぶ。町内の各家からこの日に供え物を持ち込まれるのである。

今堅田の地蔵盆の特徴は、これらの町が管理する地蔵尊以外に個人が所有する地蔵尊を各家庭で飾り付けることと、その各家の地蔵尊を拝みながら巡る「地蔵巡り」である。

準備が整った二三日(土)の地蔵盆当日、午後七時から「地蔵巡り」に参加した(写真1)。

午後七時には太陽が西の山に沈み、各家の軒下に吊るされた「南無地蔵大菩薩」、「南無地蔵尊」と書かれた赤や白地の大きな提灯に火が灯された(写真2)。今堅田(旧出来島)の最も南から今回案内いただいた南町の桑野氏と西町の仲川氏とともに地蔵を訪ねた。

各家の地蔵尊は、広い玄関に華やかに飾り付けられたものや(写真3)、家の前に臨時の祠を建てて祀ってあるもの、もと

もと、家の前や裏庭に安置されている祠の扉を開け、中に祀られている地蔵尊を拝むものなど様々である(写真4)。地蔵尊には、家を改築するために地面を整地する時や、田畑を耕す際に出てきたといわれているもの(写真5)、夢見枕に出てきた地蔵尊を湖中から引き上げ、母親の病が治ったという伝承を持つものなどそれぞれに出自がある(写真6)。また、数えきれないほどの地蔵尊を所有する家では、そのすべてを居間に並べてお参りができるようにされていたりする(写真7・8・9)。

地蔵尊の形も様々で、身体と頭、顔の区別がつくものには、美しく化粧がされている。一方、何かが彫刻されているが、それがどの部分かわからないものや、半分に折れてしまっているもの、五輪塔の最上部と判断できるものなど、地蔵尊として判別しにくいものがあるが、それらがすべて地蔵尊として尊ばれている。

南町が管理する地蔵尊は、唐破風がついた格式ある古い仮設の地蔵堂に安置されている(写真8・12)。その前には、イベント用のテントが二張り立てられており、酒類やジュース、おつまみ、うどんやたこ焼きなどの軽食がふるまわれ、子どもや大人たちも一緒にあって地域の人々が楽しそうに語らっていた(写真13)。案内いただいた桑野氏は「われわれが子どもの頃は、この地蔵堂に蚊帳をかけてもらい、地蔵盆の前日、町内の子どもたちと一夜を過ごし一晩中遊んだ思い出がある」と古き良き時代の子どもの楽しさを教えていただいた。



写真3：南町の個人所有の地蔵尊 家主がご詠歌を詠っていた珍しい北向き地蔵尊であると説明を受けた



写真1：日没真近の今堅田南町



写真4：南町の個人所有の地蔵尊 広い玄関いっぱいには飾り付けが行われていて、中央が地蔵尊で、向かって右に五輪塔の最上部と思われる石がある



写真2：各家の軒下に吊るされる提灯



写真9：駐車場が地藏堂に 個人所有の地藏尊 手前のラジオカセットからご詠歌が流れていた



写真5：元は海蔵寺の境内にあったものを辻に出して 拝むことができるようになった石仏群



写真10：南町管理の地藏尊



写真6：湖中から引き出し母親の病気が治ったという伝承を伝える半身地藏尊 子どもの「くさ」に効くといことから「くさ地藏」とも呼ばれる



写真11：立派な唐破風が特徴



写真7：多くの石仏を所有する個人宅 お供えも多い



写真12：南町お堂内部



写真8：中央に米粉でつくった餅が供えてある

南町の北、嶋町との境、浄土真宗泉福寺の前に少し大きめの祠があった。その祠の中は空であったが、平生は先ほど拝んだ南町が管理する地藏尊と、嶋町が管理する地藏尊の二体の地藏尊が安置されているという。そして、その祠に向かって右側に石塔が立っており、その石塔の上の部分に札を収納する場所があり、その中に南町の当屋が京都の愛宕権現に参って持ち帰った火伏せの札が入っているという。この火伏せの札は、南町を火の難から守っているのである(写真15)。嶋町の火伏せの札は、そこから少し今堅田の旧道を北に進み、右に折れ、琵琶湖へ向かった「出島灯台」の下に同じような石塔に入っている(写真16)。地藏盆の提灯の火が静かに灯る「出島灯台」への両側の古い家並みは、遠くに聞こえるご詠歌の声や鐘の音、そして琵琶湖のさざなみと重なって、情緒ある雰囲気が漂っていた(写真14)。

再び、旧道に戻り少し北へ進むと嶋町の地藏尊を祀るお堂にたくさんの方が集まっていた(写真17・18)。そこからすぐに仲町に入った。入ってすぐの左手に、祠とその横に二本の石塔があった。祠は中町の地藏尊を安置するもので、向かって左の石塔は、今までのものと同じく愛宕神社の火伏せの札が入ったもので、右側の石塔には、秋葉神社の火伏せの札が入っているという。関西圏の愛宕山に対して、秋葉山は、中部地方から東方面の火伏せの神で知られている。仲町では、明治期に大きな火災があり、それ以降、秋葉山の神様も祀るようになったとい



写真15



写真13: 南町管理の地藏尊の前に張られたテント様々なコミュニケーションが見られた



写真16



写真14: 出島灯台に続く道

う（写真19）。

仲町の仮設のお堂にもお参りしながら（写真20・21）、最後となる西町の地藏尊に向かった。西町のだ蔵堂は、伊豆神田神社の前、圓成寺の向かいに設置しており、きれいなお堂の中にたくさんのお供え物に囲まれた地藏尊が安置されていた（写真22～24）。

地藏巡りはこのように、午後七時から八時半まで、それぞれの地藏尊の前でご詠歌が流れる中、各町内の老若男女が自分の町内と他の町内にある町管理の地藏尊と個人所有の地藏尊を含め、それぞれ二〇ヶ所以上を巡る。地藏尊の前では、ふるまわれた軽食や飲み物をいただきながら、「ご無沙汰です。お父さんお元気？」「お孫さん生まれはったんや」「お嬢さん大きならはって」など、年に一回の非常に充実した貴重なコミュニケーションが図られるのである。

九時になると子どもたちは家に帰り、大人たちは各町のだ蔵堂に集まる。そこへ、この年の担当者の長老がご詠歌を詠いに来てくれるのである。そのご詠歌を聞きながら、もう一度地藏尊に家内安全を祈願して、地藏盆は終焉を迎えるのである〔註5〕。



写真19



写真17：嶋町管理の地藏尊



写真20：仲町管理の地藏尊



写真18：嶋町にお参りする人々



写真23：西町管理の地蔵尊



写真21：仲町の地蔵堂内



写真24：西町管理の地蔵堂に集まる人々



写真22：新調された西町管理の地蔵堂

### 第三章 愛宕講と地蔵講の関係

今堅田一丁目（旧出来島）では、愛宕、地蔵の二つの講のつながりについてあまり注目されていないようであるが、地蔵が安置される祠の横に愛宕権現の札を納める石塔があることや、二つの講を同じ当屋が務めるという仕組みから、この二つの講は何らかの関係性と、その必要性があったかではないかと考えられる。ここではその関係性について考えてみたい。

地蔵信仰については、一般には京都の子どもの守護神として石仏の地蔵菩薩を各町内単位で祀るという「地蔵盆」がよく知られる。滋賀県においても広くその風習は残されており、京都、滋賀以外の地域でもみられる民間信仰である。

地蔵信仰の起源は、平安時代の末法思想をもとに産まれた浄土信仰や、輪廻転生の考え方などに遡る。六道輪廻転生（天・人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄）の苦しみから逃れ、極楽浄土に生まれ変わるためには、造仏、造塔、写経などの作善を積む必要がある、平安時代ではそれを行うことができるのは財力のある都の貴族のみであった。中世から近世にかけては、庶民の中にも浄土信仰が広くいきわたることとなるが、農業や漁業などを生業として忙しく生きる庶民には、極楽浄土にいくための作善をおこなうことができないという大前提があった。したがって、一般庶民は、来世を極楽浄土に生まれ変われるという希望を捨て、やがては地獄へ落ちる定を自覚していたのである。

そのような中で、『今昔物語』や『沙石集』、『宇治拾遺物語』などの仏教説話の中に落ちるべくして地獄に墮ちた庶民を地蔵菩薩が救うという話が現れ、庶民の信仰が集まるようになった<sup>〔註6〕</sup>。

特に、堅田の地は、船運や船大工、農業を中心としながらも、近世は漁業も盛んに行われており、特に殺生を生業とするものは来世の地獄を覚悟していた。よって他地域よりも地蔵信仰を厚く信仰していたことが想像できる。

また、堅田浮御堂の創建に関わると伝わる恵心僧都源信は元三大師良源の弟子として比叡山延暦寺横川で修行し、念仏や極楽浄土を代表とする日本浄土信仰の根本をつくった人物である。そのお膝元である堅田地域に地蔵信仰が根付いたことは何ら不思議なことではない。

ただ、今回はその今堅田地域の地蔵盆をはじめとする地蔵信仰を調査する中で、愛宕山の信仰との繋がりを見た。ここで、その地蔵信仰と愛宕山の関係に触れた興味深い資料があるので紹介したい。

一つは、『都名所図会』巻之四（秋里籬島著 安永九年（一七八〇））である。そこには「本殿は阿太子山（あたごさん）権現にして、祭る所は伊弉冉尊（いざなみのみこと）・火産靈尊（ほのむすびのみこと）なり。本地は將軍地蔵を垂迹となし、帝都の守護神として火災を永く退け給ふなり。」と紹介されている。愛宕権現は火伏せの神でありながら本地仏は將軍地蔵と

いう地蔵尊であるという。

また、もう一つは、『見た京物語』（木室卯雲著 天明元年（一七八一））で、京都の町の様子を書いているが「町々の木戸際ごとに石地蔵を安置す。是愛宕の本地にて火伏せなるべし」としている。二つの資料はほぼ同じ時代に書かれており、どちらも、火伏せの神と地蔵尊が一体化し、特に『見た京物語』においては、火伏せを祈願するために石仏である地蔵尊を町ぐるみで信仰していたように読み取れる<sup>〔註7〕</sup>。

京の町や堅田の様に民家が密集している所は、特に火災に敏感であり、地獄からの救いの手である浄土信仰の意味合いよりも、火伏せへの祈りの方が強く信仰されていたかもしれない。

今堅田においては、各町内の地蔵尊と愛宕権現の火伏せの札が一对となり、特に仲町の地蔵尊の端に愛宕神社と秋葉神社の火伏せの札を入れた石塔があることなどは、地蔵信仰の新たな見方を示唆しているのではなからうか（写真15・16・19・25）。



写真25: 西町の愛宕神社石塔(火伏せの札を入れた石塔)

## 第四章 講に見る地域コミュニティ

このように今堅田一丁目では約一二〇世帯の住民が、多少かたちをかえながらも現代まで連続と講を続けてきた。この理由はいかなるものであろうか。古くから続いてきた風習を断ち切ることができなかったということもあるかもしれないが、全く必要のないものであれば消えていたかもしれない。確かに、恐ろしい火事という災難から逃れたいという祈り、そして、町内全体が、家族が健康で幸せに暮らせるという家内安全を祈願するという行為も大切であると考えられる。

しかし、今回のフィールド調査で感じたのは、小さな地域コミュニティにおいて実践されていた大切なコミュニケーションのあり方である。

大人も子ども、みんなが各町を巡り、それぞれ地蔵尊に手を合わせながら、「ご無沙汰ですね」「お元気ですか」という人と人との会話がそこにあった。かつて子どもたちはこの日だけ建てられる仮設の地蔵堂で一晩寝ずに遊ぶのを大変楽しみにしていたし、地蔵尊を介しての一年に一度の挨拶回りと、「日待ち」という講の開催によって町内住民は常にお互いの生活を知ることがのできるのである。

現代社会における地域においては、そのような地域の繋がりがなくとも生活ができるようにつくられている。よって新興住宅地においては、あえてこのようなコミュニティをつくる動き

はあまり出てこなかった。しかし、近年はその地域の繋がりが重要視されている。

今堅田一丁目では、各町から数名ずつが集まり、二〇〇九年から「今堅田まちづくり委員会」が発足され、地域の文化力を活かした地域活性化が行われている。地域内の地蔵尊を調査して地図を制作することや、大津市の指定を受けた出島灯台（デジマトウダイ）周辺の景観を守る運動などが具体的に行われている。

ここでは、地蔵巡りなどの古い風習を一つのアイデンティティとして位置づけ、それらを核に住民が活動しているのである。このような考え方によって、古くからの講が消えずに続けられているのである。

## おわりに

現代の経済学の中ではGDP指数などの経済指標について様々な見方がなされており、数字のみでどこまで社会の幸福感が計れるのかという疑問が示されている。例えば、美しい自然環境や、風景など金額で価値が計れないものは、経済指数に現れないのである。経済至上主義の中では、モノやサービスが売買されることによって数字に変化が起り、その活動の多少によって豊かな社会とそうでない社会を判断している。これを交換型社会と仮定すると、家事労働やボランティア活動など経済

指数として現れない活動を重んじる社会を非交換型社会という。この非交換型社会のあり方を未来の社会に置き換えるような取り組みも大切であるといえる。

今堅田一丁目に見られる講を中心としたコミュニティのあり方の中に、理想の地域社会のあり方が見えてくると考えている。今回の調査で貴重な時間を割いて、聞きとりやフィールドワークにご協力いただいた本城善孝様、仲川利明様、桑野仁様にごこの紙面をお借りして厚く御礼申しあげます。

註

1. 三丁目は真野浜に面する古い集落に地藏盆という行事が残っており、真野浜に伝わる石造地藏を祀っている。
2. 各町内の世帯数に合わせて宮総代の人数が決まっている。
3. 講の日が三十一日となっていたのは、毎月一日の日を休みにしていた職人たちの信仰を含んだ娯楽として行われていた「日待講」の名残ではないかと考えられる。この地域ではこの講を「日待ち」と呼んでいる。
4. 今堅田自治会の役員などは別になる。自治会の行事は完全に別れている。
5. 翌朝、子どもたちがお供え物を丁寧に小分けして、町内の各家に配りにまわるといふ。ここにも、一つのコミュニティ



ケーションが見える。

6. 閻魔庁に住む地獄の主閻魔王と団体であるという考え方もあり、地藏信仰をより強いものにした。

7. 田中久夫『地藏信仰と民俗』（岩田書院 一九九五年）

#### 参考文献

- ・肥後和男『近江に於ける宮座の研究』（東京理科大学 一九三八年）
- ・高橋統一『滋賀県の宮座の現況』（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年表 一九六九年）
- ・小栗栖健治『宮座祭祀の史的研究』（岩田書院 二〇〇五年）
- ・橋本鉄男『琵琶湖の民俗誌』（文化出版局 一九八四年）
- ・加藤賢治「村座と祭礼―滋賀県大津市仰木地区の例―」（近江地方史研究第四四号 二〇一〇年）
- ・加藤賢治「宮座の祭礼―今堅田に伝わる祭礼 野神祭りに見られる現状―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要1号 二〇一二年）
- ・田中久夫『地藏信仰と民俗』（岩田書院 一九九五年）
- ・新修大津市史 第七卷 北部地域

## 執筆者一覧

大岩 剛一 建築家 附属近江学研究所客員研究員

永江 弘之 成安造形大学准教授 附属近江学研究所研究員

大原 歩 成安造形大学非常勤講師 附属近江学研究所研究員

石川 亮 美術家 成安造形大学非常勤講師 附属近江学研究所研究員

小嵯 善通 成安造形大学教授 附属近江学研究所研究員

加藤 賢治 附属近江学研究所研究員



## 編集後記

研究室から望む比良の山々は白銀をまとい、一千メートル強の標高とは思えぬ厳しさを見せています。それも本紀要が刊行される3月下旬には、桜花に似合う優しい雪化粧に姿を変えていることでしょう。

本号には本研究所研究員から6編の論考を頂戴いたしました。そのうち本学の所在する仰木地区に関わるものが3編を占めます。永江研究員の論考にあります「仰木ふるさとカルタ」ですが、今年のお正月、おごと温泉の旅館に宿泊された子供さんたちにも楽しんでもらえたそうです。また、カルタ制作にあたって事前に行われた仰木の方々へのアンケート。実はこれが立派な研究材料となっています。永江、大原両研究員の論考はその嚆矢。今後もさまざまな視点からの研究に役立つものと期待しています。

編集担当 小嵯 善通

---

## 成安造形大学附属近江学研究所紀要 第3号

発行日 平成26年3月24日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所  
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1  
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

---

©Seian University of Art and Design 2014

ISSN 2186-6937